

目次

序章 本稿の目的と構成	1
第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態	19
導言	19
第一節 『紅梅千句』における振り仮名	21
第二節 『軒端の独活』『江戸宮筋』の表記	37
第三節 『正章千句』の振り仮名	62
第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記―振り仮名の機能と表記形態の特徴―	77
結語	94
第二章 近世初期俳諧の用字考証	97
導言	97
第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法	97
―『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について―	98
第二節 『當流籠拔』における「悶る」について	113
第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集―語頭に「お(オ)」「を(ヲ)」が付く語について―	173
導言	173
第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語―定家仮名遣を通して―	174
第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣	187
結語	200
終章 本稿の結論と今後の課題	203
資料編	
資料一 『紅梅千句』の振り仮名付き語と付合指導書との関係	(1)
資料二 『紅梅千句』の振り仮名を付す語と条件との関係	(7)
資料三 一〇俳諧集における振り仮名付き語	(19)

序 章 本稿の目的と構成

一 目的と方法

一・一 はじめに

日本語の表記の史的 연구において、近世に焦点を絞ってみると、近世期のまとまった資料として、俳諧というひとつの文学ジャンルがある。俳諧は当時の日常語を多く含む。したがって、日常語の表記を考える上で貴重な資料となり得ることは言うまでもない。そこに、俳諧を資料として取り上げる価値があり、検討して行く必要がある。

寛文から元禄にかけて、多数の俳諧集が出版されるようになり、その中には、振り仮名を付す俳諧集も散見する。日常語を多く含んだ短詩型の表記において、振り仮名はどのように機能しているのだろうか。日本における漢字の用法において漢字と訓の関係では、元来、漢字一字に与えられる訓が必ずしも一対一の対応ではなく、例えば「揚屋・揚屋」のように複数のヨミがあり、ヨミによって意味が異なる場合には語義を確定するために振り仮名が必要となる。

また一つの和語に対して複数の漢字が与えられる場合がある。例えば「ホトリ」に対応する漢字に「畔・辺・頭」などがある。「頭」では「アタマ・カシラ」のヨミが常用され、使用頻度が低い「ホトリ」と読む場合には振り仮名を付す必要がある。

一方において、俳諧の表記体は、概ね漢字仮名交じりで一句が構成されている。それらに使用されている漢字を取り上げてみると、使用される漢字の中には工夫を凝らした用字が見える。そのような常用されない漢字、例

えば「肋骨（あばらばね）」の「肋」に「害偏に善」の造字、あるいは「石の帯」に「胃糸の帯」を当てる当て字などには振り仮名がヨミを確定する働きをする。

さらに、特殊なヨミが与えられる「悶る」では、「イキ（る）」と振り仮名を付すことにより、「悶」の漢字が持つ義と振り仮名「イキ（る）」で二重表現の効果をねらう。

もう一つ加えれば、易しい漢字「読・照・霞」などのように、送り仮名を付けない代わりに語形を明示する振り仮名がある。

以上のように、振り仮名にはいくつかの目的が考えられ、様々な例があるから考える意味があり、俳諧の特質を知る手がかりともなる。

さらに加えて、振り仮名を俳諧のことばの面から考えると、これまでの韻文とは異なり、方言やかたことを用いることがあり、それらのことばを文字化したときに、仮名で書けば意味が理解できず、漢字で書けば意味は理解することができるが、実際の音声言語を読み取ることは不可能という現象が起こる。このような、音声と書かれた漢字表記に差異がある場合は、俳諧の特質である俗語と表記を如何に近づけるかが問題となり、振り仮名が関わってくる。

いずれにおいても、書き手が自分だけの記録として残しておく日記のような場合は、振り仮名が付されないのは当然である。手紙のように、書き手と読み手が一对一の場合も、読み手に応じた書き方をするので、振り仮名が付されることはない。ところが、位相の異なる、多くの人を対象として書記するときには、様々な読み手を想定しなければならぬ。出版された俳諧集のように、書き手と読み手が場を共有しないときには、書き手の意図を伝えるために、振り仮名を付す必要性が生じてくる。

このような振り仮名に関する問題を含め、漢字で書記する場合におこる諸問題において、乾善彦氏（二〇〇二）が日本語書記の史的研究にとつて「日本語書記のさまざまな方法の中で、それぞれにしめる漢字の用法や機能は、

もつとも重要な研究課題のひとつなのである。」（『漢字による日本語書記の史的研究』三頁）と述べるように、古代から現代への通時的な考察と同時に、それぞれの時代における検討を欠かすことは出来ない。

よつて、近世初期の蕉風が確立する前の慶安元年から延宝末年までの、貞門の俳諧集では正章千句（一六四八年刊）・紅梅千句（一六五五年刊）、談林では宗因七百韻（一六七七年刊）・江戸八百韻（一六七八年刊）・當流籠拔（同上）・西鶴五百韻（一六七九年刊）・江戸蛇之蛭（同上）・江戸宮筥（一六八〇年刊）・軒端の独活（同上）・七百五十韻（一六八一年刊）の俳諧集を取り上げ、江戸時代初期の俳諧における振り仮名のあり方を中心にした、表記に関する問題を考えて行くことにする。

一・二 表記研究における課題

今野真二氏（二〇〇九）^②は「和歌を分析対象とした国語学／日本語学の研究は、『万葉集』以外ではほとんど行われていないようにみえる」（『大山祇神社連歌の国語学的研究』一二頁）と指摘し、「和歌も連歌も「韻文」だから特殊で国語学／日本語学の資料とはならない、と切り捨ててしまいう前に、そこで使われていることばをきちんとした「方法」に基づいて「定位」させることが必要であろう」（前掲の書一五頁）と述べる。このことは、ことばにおける問題であるが、ことばを文字化するとき、どのような形で出力されるか、その出力されたものが表記であると捉えらると、ことばと表記の関係は、切り離して考えられるものではない。和歌や連歌はうたであり、使用されることばが特殊である。同時に、表記の特徴として、わずかに漢字が使用されることはあっても、主に仮名で書かれ、伝統を踏まえた表記という特徴があり、そこに、国語学研究的対象外とされていた根拠がある。

俳諧についても、今まで、韻文の中でも特殊な文芸形態であると見做され、国語学的研究からは除外される傾向にあったようだ。しかしながら、俳諧のことばについて『日本語の歴史5』^③（文芸に俗語を登場させた俳諧）に次のような記述がある。

（日本語の歴史）の流れのなかで、近世の新しい文学様式の展開を考えるにさいして、もちろん、私たちが焦点をしぼるべきは、それらの文学に時代のことばがいかにえらびとられ、その言語表現のうえに、新しい文学の発想がいかに具現しているかの点である。

そういう意味で、いわば時代の俗語のうえに、新しい文芸の世界を展開していった俳諧こそ、まず私たちのとりあげなければならないものであった。（二二九頁）

このように、俳諧は和歌や連歌の線上に位置するけれども、右の文に示される「時代の俗語」、すなわち、和歌や連歌に用いられないことばを用いることを俳諧の特質とし、和歌や連歌とは、使われることばに雅語と俗語という相違がある。俳諧が今までの韻文と異なるのはことばだけではない。表記法においても、一句を漢字のみで構成する例、捨て仮名を片仮名で右に小さく記す例、漢字に振り仮名が付される例などが見え、和歌や連歌に比べて多様である。その中の漢字と振り仮名の関係を取り上げてみると、ヨミが常用的か、特殊なヨミであるかが問題になり、振り仮名ほどのような役目を担っているのかも問題となる。また、用字においては、偏の増画・省画、あるいはあて字的用法などの遊戯的な文字遣いが見え、これも振り仮名の問題と併せて重要な課題となる。

一、三 振り仮名に関する先行研究

振り仮名に関する先行研究を概観すると、前田富祺氏（一九九二）³³が

近世・近代の文学者が漢字に付ける振仮名（表記されている漢字を主と考えるか、振仮名によって表わされる言葉の主と考えるかも問題であるが）に特別な文学的意図を托していたことは明らかである。これらの文字に関わる様々な問題の研究は、文章研究・文体研究としての文字の研究に止まらず、文学的な評価との関わりからの検討を必要としているのである。（『国語文字史の研究一』国語文字史研究の課題 六頁）

と述べる。また細川英雄氏（一九八九）の「振り仮名―近代を中心に―」では

振り仮名の問題は、すなわち漢字・仮名表記の問題であり、同時に和語・漢語の問題とも深くかかわっている。従来、なぜ振り仮名が施されるのかという観点での個別的・選択的な研究はいくつかなされているものの、どのような場合にどのような形で振り仮名が付されるのか付されないのかという観点からの具体的な基礎調査は少ないのが現状である。（『漢字講座4』二二二頁）

と、振り仮名の研究は未開拓部分の多いことが指摘されている。

玉井喜代志氏は「振仮名の研究 下」³⁴（『国語と国文学』第九巻第六号）で、振り仮名を「漢字」と「邦語」と「音」の関係、あるいは「漢字」と「邦語」と「意味」の関係など形態上からの分類（五三頁）、または、「文字を讀ましむる爲」「翻訳に於て原文の意味なり、面影なりを、なるべく忠実に伝えるため」「字面を美しくするため」など、振り仮名の目的からの分類をし（五六頁）、ルビは上記の三つの目的のいずれかによるものでなければならぬと述べる。つまり、「読ますためのルビの濫用」「不自然なるもの」「蛇足的なるもの」「ペダンチックなるもの」はルビの理想に反するとする（六九頁）。

鈴木丹士郎氏（一九六六）³⁵は、「近世文語の問題」で『弓張月』『八犬伝』などを取り上げ、漢字の左右両側に付されたルビについて、字音と和語・字音と類義の字音語・左右とも和語などの例を示し

これは文語と口語とを接近させる文章の口語化をめざしたとみるよりは、むしろ文語と口語とは性質を異にするものであり、両者を対にして示すことにより、ことばを教えようとすることにあったと考えられる。『専

修大学論集3』六一頁）

と述べている。また、『英草紙』を取り上げ、漢字一字一字の音と訓を付していることについて

一語兩ヨミの手法は書きことばと話しことばとを近づけようとした意図とみるよりは、用語・用字を教えるためであったとみられるのである。（前掲の書六二頁）

と述べ、漢字の両側に付す振り仮名には「ことば」「用語」「用字」を教える機能があるとする。

屋名池誠氏（二〇〇九）^⑧は、「総ルビ」の時代―日本語表記の十九世紀―で、一九世紀の日本文学の表記における外形的な共通点の一つとして総ルビを取り上げ

「総ルビ」の文章では、動詞などの場合、原則として読みが二拍までの語では送り仮名が送られない…（内省略…。そのため、たとえば〈よむ〉も〈よみ〉も「読」とだけ書かれ、漢字だけでは〈よむ〉なのか、〈よみ〉なのか決定できないことが多い。（『文学』二〇〇九年十一月―十二月 二二〇頁）

と、総ルビの文章で、ルビを取り去るとヨミが不定になる理由として、一つには送り仮名の問題があるとすると、これは、本稿の資料の一つである『紅梅千句』でも、当俳諧集は総ルビではないが、「読」^{ヨム}「照」^{ゲル}など易しい漢字ではあるが振り仮名を付す例があり、振り仮名がヨミを指定する機能を果たしている。

明治期では進藤咲子氏（一九六八）^⑨が「明治初期の振りがな」（『近代語研究第二集』四九―一頁）で、『近世新聞』『生産道案内』『郵便報知新聞』『英氏経済論』『安愚楽鍋』など一〇種の資料から用例を挙げ、種々の振り仮名の機能を示している。その一つである「本文の漢字そのもののよみを助けるよみがな」では、バラルビの場合には「使用度の高い語の一般的な漢字表記には、あまり振られない傾向が見られる」（四九四頁）と述べ、西欧の学術書の訳語では「概念を読み手に伝える効用」（四九四頁）、戯作では「漢字と振りがなの二重表現の効果をねらって漢字を補助手段として用いたもの」（四九五頁）などと分類し、「明治期の振りがなの特色の一つは、西欧語との交渉によって新しく生じた役割であろう」（四九六頁）と述べる。

大島中正氏（一九九一）^⑩は、「語の漢字仮名並列表記は有用か」（『日本語日本文学 三号』同志社女子大学）で、漢字と振り仮名で示す表記形式を「並列表記」と呼び、タイプによって、何とかかわるかによって、「有用・無用の評価が変わってくる」（三一頁）とする。

矢田勉氏（二〇〇五）^⑪は、「振り仮名」（『漢字と日本語』朝倉漢字講座1）で、振り仮名について「漢字には所謂辞書的意味の他に文脈によって与えられる意味があるということ」「本来の中国的カテゴリーからより大きく無用の評価が変わってくる」（三一頁）とする。

「当用漢字音訓表」以前にあって訓は、常に新たに生産され得るものであった」（一六五頁）と述べ、日本語における漢字は、表音性の能力に乏しい記号となったことが、日本語における漢字の大きな特徴の一つであり、振り仮名が日本語表記において要請される理由になったと論述されている。また、ヨミが複数ある中で、その場でのヨミを指定するのが振り仮名の本質的・本来的機能であると、用途上の分類では大きく三つに分類され、「①啓蒙・学習的用途②読み指定の用途③臨時的な読みを与える用途」（一六六頁）があるとするとする。

俳諧での振り仮名を考えると、ごく初期の天文年間に著された『犬筑波集』『守武千句』を初めとして、一六三二年刊の『犬子集』『塵塚俳諧集』などでは振り仮名は施されない。俳諧に振り仮名が付されるようになるのは、江戸時代に入って、俳諧が庶民に広がるようになったことと、同時に板行が可能になり、書肆が売るための本を作ろうとしたことによると考えられる。

そして、俳諧を学ぶ人たちが増加するに従い、教科書的な用途を備える書には上述の矢田氏の分類による①「啓蒙・学習的用途」が大きく関わり、多訓を有する漢字には、作者の意図するヨミが振り仮名にあらわれ、②の「読み指定」と関係し、③の「臨時的な読み」では、熟語の問題や常用されないヨミが関わってくるだろう。このように、用途上の分類に示される①から③は切り離せるものではなく、臨時的なヨミは、即ちヨミを指定することにつながり、それが読み手に対してヨミを指示することにもなる。

また、矢田氏（二〇〇五）は用途上の分類に加え、機能上の分類では「A音形表示機能、B二重イメージ機能」の二種に分類され、BはAから派生した後発の機能であるが、当該漢字と振り仮名によって与えられた語形とを合致させることが目的ではなく、表現の多層化に活かすものであるとする（前掲の書一六八頁）。

今野貞二氏（二〇〇九）^⑫は『振仮名の歴史』（九三頁）で、平安期を振り仮名の始まりとし、振り仮名の機能では、室町期までは主に漢字の「読み」であった振り仮名が、江戸時代に入って、「表現としての振仮名」が加わ

ると述べる。

要するに、振り仮名はヨミを指定することが基本であり、そのヨミによって文学的評価ともつながり、読み手への便宜を図ることにもなる。時には、俳諧集『當流籠拔』で、「悶る」に「イキ(る)」と振り仮名が付される場合のように、一つの語に対して、漢字が表す意味と振り仮名で表す意味の二面性を持ち、前述の矢田氏(二〇〇五)の表現の多層化「二重イメージ機能」、及び今野氏の「表現としての振仮名」に相当し、表現性を重要視した振り仮名がある。

一、四 仮名遣に関する先行研究

次に、本稿では振り仮名との関連で、本文中の仮名遣と振り仮名の仮名遣に相違が見られることから、仮名遣についても考えていきたい。仮名遣における先学の研究では、中世の仮名遣については、大野晋氏が「仮名づかいの歴史」¹⁾で

仮名の使い分けに関する規範の設定と、その実行という問題は以上述べて来た通り藤原定家に始まり、その学問につらなる行阿の『仮名文字遣』などによって中世の歌文の世界の常識となった。^{〔『源氏物語』 日本語 8』三二〇頁〕}

と述べる。しかし、また「定家はこの仮名遣を世間に強いるつもりはなかったらしい」とも記す。

一方、小松英雄氏(一九九八)^{〔1〕}は「定家仮名遣の軌跡」で、「定家は当世の人たちの書く文字がでたらめであつて、占来の用法を過っている」(『日本語書記史原論』一七五頁)と考え、「整然たる規則を定めて厳密に適用したりすることではなく、読み誤られることのないテキストを整定すること、すなわち証本テキストを整定するために「仮名の綴りを択一的に決定する必要があつた」(同書一七五頁)と述べる。そして、「この特殊な技術は定家以外のだれにとつても必要がなかつた」から「定家はみずから開発した文字運用の規範を子息の爲家にすら伝

授した形跡が認められない」(同書一八二頁)とする。

安山章氏の『仮名文字遣と国語史研究』(五六頁)では、個人の内部での平仮名・片仮名両種表記文献として、親鸞の『唯信鈔』(平仮名)と『唯信鈔文意』(片仮名)、北条重時の『極楽寺殿御消息』(平仮名)と『六波羅殿御家訓』(片仮名)などを取り上げ、文献の質などと関係して、「ヲーお・を」の対立、「お・を」の共用などの背景を詳しく論述されている。

さらに、今野真二氏は『仮名表記論攷』(二八五頁)で、大山祇神社連歌や荒木田守武の独吟千句を仮名文字遣の資料として取り上げ、後者に関して、前掲の安田氏と同様に、個人としての文字遣の実態という事になると述べる。

近世初期の仮名遣では、酒井憲二氏の「近世初期通行の仮名遣いについて」^{〔『国語と国文学』二〇〇〇年〕}において、『寛永諸家系図伝』の仮名本を資料として取り上げ、「当時通行の仮名遣いの根幹は、やはりいわゆる「定家仮名遣」(行阿の『仮名文字遣』の源流としての)にあつたとすべきものごとくである」(一二頁)とする。この資料は、一六四三年に完成された、江戸幕府の編纂による大名・旗本の系譜であり、本稿で資料の一つとする、『正章千句』(一六四八年成立)と成立年代が近い関係にある。

定家の仮名遣については、江湖山恒明『新・仮名づかい論』(昭和二五年)、木枝増一『仮名遣研究史』(昭和八年)、馬淵和夫「定家かなづかいと契沖かなづかい」^{〔『続日本文法講座2』昭和三四年〕}、今野真二「定家以前」^{〔『国語学』二〇〇〇年〕}などの数多くの論考があり、馬淵氏は前掲の『続日本文法講座2』で、「かなの原則」がやぶれて「かなづかい」がおきたのは、「和歌・和文の書写の風習がさかんになったためである」(一一二頁)と記す。

本稿では、振り仮名と本文中の仮名書きの中で、語頭に「お(オ)・を(ヲ)」が付く語のみを取り上げるが、「お・を」の使用法については、大野晋氏の前掲の「仮名づかいの歴史」に「定家が仮名遣の方式を定めたのは

一七歳から二一歳までの年少の時期であったのだから、独自の見解でそれを決定することはまず不可能」(『註 説書 日本語8』三一五頁)とある。それだから定家は何を根拠として「お」と「を」を使い分けたかについて、次のように記されている。

語数も多く、決定に最も困難の感じられた「お」「を」について、『色葉字類抄』の「お」「を」の分類が、伊呂波歌の「散りぬるを」「おく山」におけるアクセントの高低と照応していることを知り、そこに一つの信憑すべき根拠があると見たことは考えやすいことのように思われる。

また、本稿で資料とする俳諧集では、本文は漢字と平仮名(外来語などは片仮名)を用いるが、振り仮名は片仮名で記される。その片仮名の振り仮名に關しては、矢田勉氏(二〇〇五)が前掲の書で

振り仮名の由来が訓点の仮名点にあった以上、本来、振り仮名の用字は片仮名であるのが理の当然であった。

振り仮名の主たる機能が、対応する漢字の音形の表示であることからしても、より表音性の傾向が強い文字である片仮名が選択されるのが自然である。(一七三頁)

と述べていることから、本文中で「お」を用いる語が、振り仮名ではアクセントに關係なく「ヲ」で記され、両者に差異が生じていると言える。

以上のように、中世から近世の仮名遣については、前掲の安田氏、今野氏、酒井氏等が考察の対象とされた資料があり、安田氏・今野氏の仮名遣の実態の調査では、それぞれの筆者個人の仮名遣によるものであるとし、書く人により使い分けがあるとされる。しかしながら、文献資料が豊富にあるにも関わらず俳諧の仮名遣を論じた先行研究では、寺島徹氏(二〇〇六・二〇〇八)⁽²⁰⁰⁶⁾が、江戸中期の俳諧の仮名遣について、蕪村・晧台・也有・士朗を対象に、定家仮名遣・歴史的仮名遣・近世通行の仮名遣の観点から、それぞれを比較分析されているが、江戸初期の俳諧においては、十分に検討がなされているとはいえない。そこで、前田富祺氏が、前掲の書の「国語文字史の課題」で

定家仮名遣いとか歴史的仮名遣いとかいう規範についての考え方も問題であるが、資料ごとに実際に用いられている仮名遣いの実態を明らかにしてゆくことが必要である。(『国語文字史の研究 一』二五頁)

と指摘されていることから、仮名遣の実態の一斑ではあるが示しておくことにしたい。

一、五 本稿での問題点

これまでに述べてきたように、本稿は、近世初期俳諧集で振り仮名が付されない俳諧集もある中で、振り仮名が散見する俳諧集を資料とし、振り仮名の目的を主とした表記に関する問題を取り上げ、特殊性と一般性を見極めながら検討を加えて行くものである。

テキストとした俳諧集の振り仮名の中には、前述のように難読字に付す振り仮名を基本として、俳諧のことばと表記を近づけるための振り仮名など、様々な機能があるのではないか、また一つには、それぞれの俳諧集により振り仮名を付す割合が異なり、ある俳諧集では振り仮名が付される同じ語が、他の俳諧集では振り仮名が付されない、その差異は何かなど、漢字と振り仮名の關係における種々の問題点がある。

また、漢字の川法の考察と同時に、振り仮名と本文中の仮名書きに、語頭の「オ(お)・ヲ(を)」の仮名遣に相違があることから、「正」か「誤」ではなく、近世初期俳諧の仮名遣の傾向性を提示しておきたい。

なお、用語について、少し触れておくと、本稿で使用する「表記」・「書記」・「用字」の用語については、用字はそこниのような文字が使われているかが用字であり、書記は、本稿では「書記方法」「日本語書記」などを用い、文字や符号を以て書き表された状態に用いる。表記は、振り仮名・仮名遣い・文字の種類など書き記されたすべてのものに、縦書き・横書き・分ち書きなどの書式を加えて表記と捉える。つまり、書記・用字は表記の下位に置かれるとするのが稿者の考えである。

山田俊雄氏(一九五五)⁽²⁰¹¹⁾は「国語学における文字の研究について」(『国語学』第二一集)において、右の三語

についての直接的な解説はなされていないが、文字の位置付けについて論述されている。その中で、橋本進吉氏の「国語学概論」（著作集第一巻 岩波書店）から、文字の研究における「文字を主として」と「言語を基礎にして」の二つの方法を引用して、後者の場合に「素材としての文字の有する可能性」に相当する語として、次のように「文字観念」を用いるとする。

文字の表記を意識する場合に：（略）；現実の表記を云々しないでも、記憶の中の文字の諸属性に還元して、語を意識することから起るのであって、そこに儼として動かすべからざる、字音・字訓の観念の存在を我々に知らせる。このような場合に、私は文字観念ということばを用いて：（『国語学』第二集 一〇頁）

乾善彦氏の前掲の書（二〇〇三）では、用語について、「（広義の）文字」には「文字（文字の素材面）」と「書記（文字の機能面）」があり、「書記（用字の面を含む広義の表記、書き様）」には「表記（用字と対概念の狭義の表記、書き様とも）」と「用字（表記内における個々の文字の用法、用い様）」があるとする（一一・一三頁）。

また、乾氏は「書記」について、「現在ではまだ、「書記」が動詞性が強く」（二頁）と述べているように、稿者も、「書記」を単独で用いる場合は動詞として用いることがある。

テキストの俳諧集には、近世文学資料類従（注）から『正章千句』（正）・『紅梅千句』（紅）・『宗因七百韻』（宗）・『當流籠拔』（当）・『西鶴五百韻』（西）・『江戸蛇之鮓』（江蛇）・『江戸宮筈』（江宮）・『軒端の独活』（軒）・『七百五十韻』（七）の九作品集と天理図書館綿屋文庫（注）から『江戸八百韻』（江八）の一作品集を選択した。以上の俳諧集中で調査の対象とするのは句のみであり、詞書・題詞は除外した。また、本文中各俳諧集の句番号は、稿者が便宜上通し番号を付けたものである。

以上のような考察を進めるに当り、伊京集（伊）・明応五年本（明）・天正十八年本（天）・饅頭屋本（饅）・黒本本（黒）・易林本（易）（以上の六種の節用集を本文中一括して「古本節用集六種」と記すことがある）・合類節用集（合）・書言字考節用集（書）の八種の『節用集』と適宜他の辞書を参照し、仮名遣の考察では『仮名文字遣』

『定家卿仮名遣』『下官集』を使用する。（俳諧集と節用集の（ ）内は本稿で使用する略称である）

二 構成と概要

構成としては、大きく三つの章を立て、それぞれの章は次のような構成となっている。

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

第一節 『紅梅千句』における振り仮名

第二節 『軒端の独活』『江戸宮筈』の表記

第三節 『正章千句』の振り仮名

第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記―振り仮名の機能と表記形態の特徴―

第二章 近世初期俳諧の用字考証

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法―『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について―

第二節 『當流籠拔』における「悶る」について

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて

第四節 『西鶴五百韻』の用字考証―熟字訓と当て字―

第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集―語頭に「お（オ）」「を（ヲ）」が付く語について―

第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語―定家仮名遣を通して―

第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

近世には出版文化が発達し、読者層への配慮から、書き手の表記意識が大きく変化する。その一つが漢字に振

り仮名を付すことである。振り仮名は書き手の意図したことばを読み手に正しく伝えることに存在理由がある。第一章では、主として、振り仮名に視点を置いて考察を加えていく。振り仮名には一つに漢字の複数のヨミに対するヨミを指示する機能があり、また一つに、書き手の表現意識が内在する振り仮名がある。後者の例では「かし」を文字遊戯的に「驚鹿（紅梅千句）・鹿驚（正章千句）」のように、ことばの意義を漢字で表し、ヨミを示す振り仮名がある。このような振り仮名を付す漢字について漢字と振り仮名の関係・振り仮名の機能などを検討していくと同時に、それぞれの俳諧集に見える特徴的な表記法を提示する。

第一章第一節では『紅梅千句』において、漢字表記語に付される振り仮名を、音読み・訓読みの点から調査した結果を示した。また、どのような場合に振り仮名が付されるのか、様々な条件を設定して振り仮名を付す語と対応させてみた。その結果では、同じ漢字表記の語で、同じ条件でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合がある語があり、この点に関して、文学的意図と関わりがあるのか、その根拠を明らかにする必要があることを指摘する。

第二節では、『軒端の独活』『江戸宮筈』を取り上げ、表記の特徴や振り仮名の実態を考察していく。資料として一〇俳諧集で、使用される漢字数など数量的側面からの様相、また、『軒端の独活』に見える雑多な表記法を提示し、振り仮名については、振り仮名を付す人により振り仮名を付す傾向に違いが生じることを明らかにする。

第三節では、『正章千句』と『紅梅千句』とは清書者が同じであるという観点からの考察を試みる。振り仮名を付す語を『紅梅千句』と比較してみたときに、同じ正章が清書したとは言え、板下を書いた人は同じではないと推定できることから、両者の振り仮名を付す傾向が異なるとし、清書することと板下を書くことは別の工程であることを明らかにする。

第四節では、『宗因七百韻』と『七百五十韻』の振り仮名の傾向、表記法について検討を加える。『宗因七百韻』は異なる興行の作品を収録した作品集であり、一書の中で、作品により同じ漢字の振り仮名の仮名遣が異なることなどから、板下を書く人が統一的に振り仮名を付したのではないことを指摘する。一方、『七百五十韻』の雑多な表記法、あるいは古辞書や文献などで用例が見出せない漢字が出現することを報告し、そこに筆者の視覚的印象性を求めようとする意図が窺えることを述べる。

第二章では、俳諧では造字・当て字などを意識的に用いる傾向が見える。それが読者に新鮮味を与える一つの方法である。そこで、現段階では用例を見出せない特殊な用字や、漢字とヨミが常用的に結びつかない語について検討を加える。

第二章第一節では、『江戸八百韻』には一つの和語に対して複数の漢字表記がある語に二〇語があり、その中から「やさし」に「婀娜」「艶し」の二種の漢字を対応させた意図を探っていく。

第二節では、『當流籠技』に見える「悶る」に、「イキ（る）」と振り仮名が付されることに注目して考察を進める。節用集や中国の辞書では「悶」に「イキル」と訓を付す例はないけれども、「煩」に「イキル」と訓を付す節用集がある。中国の辞書に「煩」は「悶也」と収録があり、節用集でも「悶」と「煩」は同じとあることから「いきる」と読める道筋を説明して行く。

第三節では、『江戸八百韻』で「あつかひ」に「哆」を対応させることについて考察を加える。「哆」のヨミについて言及し、その他「あつかい」に対応する「噯」「扱」について、それぞれ用例を挙げ用法を検討する。

第四節では、『西鶴五百韻』に見える熟字訓「日外（いつぞや）」「織姫（たなばた）」と当て字「明上（明星）」「上夫（丈夫）」「性躰（正体）」「胃糸の帯（石の帯）」についての考察を試みる。

第三章では、「オ（お）・ヲ（を）」が語頭に付く語に限るが、本文中の仮名遣と振り仮名の仮名遣について、その実態を提示していく。俳諧は和歌や連歌の線上に位置するが、雅語を用い定家仮名遣を規範とする前時代の韻文とは異なり、俳諧では日常語が用いられる。それならば、仮名遣にどのような傾向が見えるか、振り仮名に關連して仮名遣の観点から俳諧集を見る。

第二章第一節では、資料の一〇俳諧集の中で語頭に「お・を」が付く本文中の仮名書きの語を取り上げて、定家仮名遣との一致度を調査し、用例から、一致しないのは一〇俳諧集だけの現象ではないことを報告する。

第二節では、一つには、同語において振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語と本文中の仮名書き語の語頭の「お・を」とを比較する。もう一つには、それぞれ俳諧集ごとに、振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語を定家仮名遣・節用集と比較し、どれだけ合致するか検討を進めていく。

本稿は、以上のような構成で、振り仮名を中心にして俳諧における表記について論を進め、俳諧での振り仮名の機能、及び表記の特徴などを明らかにしていくものである。

表記に関して言うならば、初期俳諧の特質の一つとして、雑多な表記法や特殊な漢字を用いる場面がある。しかし、決して特殊性一辺倒ではなく、前時代から受け継がれた一面がある一方で、俳諧に見える漢字の用法や表記の形式が、後の時代へと引き継がれたものもあり、俳諧は江戸初期の表記の資料として重要な位置にあると考えられる。

今回は俳諧の表記に関する一片の報告に過ぎないけれども、今まで、殆んど国語学的研究の資料とされてこなかった俳諧を、一つの文字領域として分析を試み、ここに示すものである。

注

- 1、乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』二〇〇三年 搞書房
- 2、今野真二『大山祇神社連歌の国語学的研究』二〇〇九年 清文堂
- 3、亀井孝他『日本語の歴史』近代語の流れ』昭和五十一年第二版第一刷 平凡社
- 4、前田富祺『国語文字史の研究一』一九九二年 和泉書院
- 5、細川英雄『振り仮名―近代を中心に―』『漢字講座4 漢字と仮名』一九八九年 明治書院

- 6、玉井喜代志『振假名の研究(下)』『国語と国文学』第九卷第六号 一九九二年 至文堂
- 7、鈴木丹士郎『近世文語の問題』『専修大学論集3』一九六六年
- 8、屋名池誠『「総ルビ」の時代―日本語表記の十九世紀―』『文学』二〇〇九年十一月―十二月 岩波書店
- 9、進藤咲子『明治期の振りがな』『近代語研究 第二集』昭和四十二年 武蔵野書院
- 10、大島中正『語の漢字仮名並列表記は有用か』『日本語日本文学 三号』同志社女子大学 一九九一年
- 11、矢田勉『振り仮名』『朝倉漢字講座1』漢字と日本語 二〇〇五年 朝倉書店
- 12、今野真二『振り仮名の歴史』二〇〇九年 集英社
- 13、大野晋『仮名づかいの歴史』『岩波講座 日本語8』一九七七年 岩波書店
- 14、小松英雄『日本語書記史原論』一九九八年 等間書院
- 15、安田章『仮名文字遣と国語史研究』二〇〇九年 清文堂出版
- 16、今野真二『仮名表記論攷』二〇〇一年 清文堂
- 17、酒井憲二『近世初期通行の仮名遣いについて―寛永諸家系図伝』仮名本の表記から』『国語と国文学』平成一二年 東京大学国語国文学会
- 18、江湖山恒明『新・仮名づかい論』昭和三五年 牧書店
- 19、木枝増一『仮名遣研究史』昭和八年 賛精社
- 20、馬淵和夫『定家かなづかいと契沖かなづかい』『続日本文法講座2 表記論』昭和三四年 明治書院
- 21、今野真二『定家以前』『国語学 51巻2号』二〇〇〇年 国語学会 武蔵野書院
- 22、寺島徹『江戸中期における俳諧の仮名遣いについて』桜花学園大学人文学部研究紀要第8号 二〇〇六年
- 23、寺島徹『江戸中期の俳諧句集における仮名遣いの用法について』桜花学園大学人文学部研究紀要第10号 二〇〇八年

- 24、山田俊雄「国語学における文字の研究について」(『国語学』第二十一集 昭和三〇年 国語学会 武蔵野書院)
- 25、『正章千句』『紅梅千句』『西鶴五百韻』『江戸宮筋』『軒端の独活』『宗因七百韻』『當流籠拔』『江戸蛇の鮓』『七百五十韻』(『近世文学資料類從 古俳諧編』28・30・33・34・35・36・39 勉誠社 昭和五〇年と五一年)
- 26、『江戸八百韻』(『談林俳書集一』天理図書館綿屋文庫俳書集成第六卷 平成七年 八木書店)
- 27、改訂新版『古本節用集六種並びに総合索引』昭和五四年 勉誠社／『天正十八年本』昭和三六年 白帝社
／『合類節用集研究並びに索引』昭和五四年 勉誠社／『書言字考節用集』昭和四八年 風間書房
- 28、『仮名文字遣』(『国語学大系』第六卷 昭和五六年 国書刊行会)
「天文廿一重陽前日記之 稱名野釋御判」の奥書ある美濃木版本に拠るものである。
- 29、『仮名文字遣』文明一一年本・東大本(駒沢大学国語研究 資料第一 昭和五五年 汲古書院)
『定家卿仮名遣』(『国語学大系』第六卷 昭和五六年 国書刊行会)
- 30、『下官集』不忍文庫旧蔵写本を底本とする(『国語学大系』第六卷 昭和五六年 国書刊行会)

参考文献

- 小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語』一九八五年 東京堂
- 中野三敏監修『江戸の出版』二〇〇五年 ペリかん社
- 前田富祺「川柳の漢字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』一九八七年 明治書院)

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

導言

仮名と漢字を併用する表記体において、文芸作品の各ジャンルにより、漢字の使用状況に違いがある。例えば、漢字の数量的問題、あるいは漢字に振り仮名を付す形態など、多種多様な様相を展開する。振り仮名を付す方法一つを取り上げても、振り仮名を付す目的・条件・表記方法など諸種の問題が付随してくる。

近世の俳諧では概ね平仮名漢字交じりで表記され、その中には振り仮名が散見する作品集がある。しかし、振り仮名の先行研究では、俳諧以外での論考はあるが、俳諧の振り仮名に関して言うならば、まとまった基礎調査はなされていない。

そこで、本章では振り仮名についての先行研究で、前田富祺氏(一九九二)²⁾が「近世・近代の文学者が漢字に付ける振り仮名に特別な文学的意図を托していたことは明らかである。」と指摘し、細川英雄氏(一九八九)³⁾が「具体的な基礎調査は以外に少ないのが現状である。」と指摘するのを踏まえ、近世の初期俳諧の漢字の使用状況、特に、どのような漢字に振り仮名を付し、振り仮名にはどのような機能があるのか、その実態を明らかにしていきたい。

資料には、振り仮名が一箇所に集中するのではなく、一書で全体的に平均して振り仮名が散見する俳諧集を選択し、文学的意図との関わりなど、多角的な視点から調査検討していくことにする。

第一節の『紅梅千句』は貞門の代表的連句作品であり、季吟の跋文には有馬友仙が貞徳に直接教えを受けたいために興行し、清書したのは正章であることが記されている。最初に当該集での総漢字数・異なり漢字

数・振り仮名付き漢字数の調査を行い、次に漢字一字ではなく、漢字表記の語単位で、そこに付される振り仮名は音読みか、それとも訓読みかの点からも調査した結果を示した。また、同じ語で振り仮名を付す場合と付さない場合がある語については、初出語・付合語・字音語などの条件を設定して、振り仮名との関係を考える手立てとする。

第二節では『軒端の独活』と『江戸宮筈』を取り上げ、一〇俳諧集の数量的側面からの考察、そして一〇俳諧集中最も漢字使用率の高い『軒端の独活』の表記の実態と、最も振り仮名付記率の低い『江戸宮筈』の実態を提示し、それぞれの特徴を述べる。

第三節では漢字使用率が最も低い『正章千句』を取り上げる。当該集は『紅梅千句』と清書者が同じという観点から、振り仮名を付す語の違い、振り仮名を付す割合の違いから、清書者と振り仮名を付す人は別であることを明らかにしていく。

第四節では談林初期の『宗因七百韻』と談林末期の『七百五十韻』について、『宗因七百韻』は、異なる興行での作品を一書に収録したものであり、作品により、振り仮名の仮名遣が異なること、また「土産」に「ニヤゲ」と「ミ」から「ニ」に音韻交替した振り仮名が付されることなどを述べる。『七百五十韻』では有意的に創造した漢字が多用され、新鮮味を出す試みがなされている実態を提示する。

以上のように、本章では、漢字と振り仮名の関係を中心にして、振り仮名の機能を明らかにすることを目的とする。

注

1、先行研究

*大島中正 1991 「語の漢字仮名並列表記は有用か―語彙教育とのかかわりにおいて―」（同志社大学日本語

日本文学第二号）

*京極興一 「振り仮名表記について」（信州大学教育学部紀要四四号 1981）

*進藤咲子 「ふりがなの機能と変遷」（『講座日本語学6』昭和五七年 明治書院）・「明治初期の振りがな」（『近代語研究 第二集』昭和四三年 武蔵野書院）

*鈴木丹士郎 「読本における漢字語の傍訓―兩月物語と弓張月を中心にして―」（『近代語研究』第二集 昭和四二年 武蔵野書院）・「馬琴の語彙」（専修国文創刊号 1967）・「里見八犬伝の用字についての一試論」（専修国文第十一号 1972）

*玉井喜代志 「振假名の研究（下）」（『国語と国文学』第九卷第六号 一九二二年 至文堂）

*蜂谷清人 「振り仮名」（佐藤喜代治編 『国語学研究事典』昭和五一年 明治書院）

*細川英雄 「振り仮名―近代を中心に―」（『漢字講座4 漢字と仮名』平成元年 明治書院）

*矢野準 「人情本の漢字」（『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院）

2、前田富祺 『国語文字史の研究一』一九九二年 和泉書院

3、細川英雄 「振り仮名―近代を中心に―」（『漢字講座4 漢字と仮名』一九八九年 明治書院）

第一節 『紅梅千句』における振り仮名

はじめに

『紅梅千句』は、貞門の代表的連句作品であり、承応二年（1653）正月に興行された¹。一座は松永貞徳・安原

音読みか訓読みかの点から調査したものである。一語の漢字列全てではなく、漢字列の中の一字にでも振り仮名がある場合も、振り仮名を付す語数の中に組み入れた。

また、「ジユズ」に「念珠・珠教」の二種の異なる漢字が使用され、漢字と振り仮名の対応では「珠教」が音読み、「念珠」は訓読み(熟字訓)に、異なり語一に対して二重に含まれることになり、異なり語総数と振り仮名付き異なり語総数(*印)の欄では合計数に差異が生じる。

この表を一覧すると、訓読み語が非常に多く使われているのにも拘わらず、訓読み語に対する振り仮名の割合が最も低い。この現象は、文芸作品に於いて多用され、読み方が易しいと思われる漢字が多く含まれるからである。試みに、六回以上使用される訓読み語を回数が多い順から並べると、(人・物・霞・中)は左の回数の内一回振り仮名を付す。)

月 47・花(華を含む) 36・秋 35・春 33・見 25・露 19・出 19・袖 18・人 17・身 16・物 16・名 15・霞 15・手 13・日 10・松 9・山 9・夜 9・跡 9・水 9・此 8・今 8・聞 8・引 8・道 7・雪 7・雨 7・海 7・火 7・外 7・恋 7・中 7・哥 6・時 6・影 6・子 6・庭 6・冷 6・長閑 6・目 6・宿 6・世 6

となり、これらの合計数が訓読み語二〇一〇語中五二七語を占める。音読み語では、六回以上使用する語は見られず、使用回数が三回から五回までの語を示すと

五回…繁昌(内二回振り仮名付き)・邊(内二回振り仮名付き)・祈祷

四回…気・京・躰(内一回振り仮名付き)・能・景(内一回振り仮名付き)

三回…賀茂・源氏・詩・屏風・風呂・用心・例(内一回振り仮名付き)・紋(内一回振り仮名付き)

となり、音読み語では一語での使用回数は五回が最多である。五回とも振り仮名がないのは「祈祷」、使用回数四回で四回とも振り仮名がない漢字には「気・京・能」があるが、一語の出現度数が訓読み語とは比較にならない。この事から、訓読み語の振り仮名を付す割合が低い事象は、振り仮名を付さない使用度の高い語が、音読みより

訓読み語の方に多いことが起因していると言える。

二

『紅梅千句』を概観したところで、振り仮名のある漢字表記の語と俳諧式日書や付合用語集などの付合指導書に記載されている用語との関連性を見ていくことにする。

照合の資料には、『はなひ草』・『俳諧御傘』・『俳諧類船集』の二書を使用した。『はなひ草』は立園が著した式目書であり、貞徳もこれに式目を做うところがあり、式目書の嚆矢といわれている。貞徳が著した式目書『俳諧御傘』は、二條良基が制定した『連歌新式』や木食上人の『無言抄』を典拠とし、俳諧の作法を説明するために約一四二〇の用語を見出し語として挙げ、百韻俳諧への指標を示した指導書であり、後に及ぼした影響も大きい。三つ目の『俳諧類船集』は、高瀬梅盛著で二七〇〇余の付合語を所収し、付合用語集として他の類書に比べると所収語が非常に多い。このような三書を使用し、付合語ではなく各書の見出し語、及び式目に例として挙げられている語などを対象とし、振り仮名のある語と付合指導書を照合した結果を【資料一】にまとめた。

【資料一】で、『紅梅千句』の漢字表記と、付合指導書の漢字が異なる場合、或いは平仮名表記である場合などは、それぞれの書に記載がある文字を記し、振り仮名が『紅梅千句』と異なる場合は、「訓(一)」と記す。又三書の漢字には必ずしも振り仮名が付されているとは限らず、例えば、『紅梅千句』での「花車」は「花車なる人の有得なる秋 安靜」と詠まれ、「キヤシヤ」と振り仮名があり「花見車」を意味するのではない。『俳諧御傘』では「は」の項に「花車 正花也、春也。花見車の事也。」とあり、明らかに「きゃしや」と「はなぐるま」の読み方の違いが窺える。また、『紅梅千句』では「五月五日」であるが『俳諧御傘』では「五月五日」に振り仮名がなく読み方は不明である。これらのように読み方に相違があると思われる場合は「*」を付記する。「墜栗」につい

ては、『はなひ草』に「ついくわつ」と振り仮名が付されているが、『はなひ大全』では「墜栗花」とあり、『易林本節用集』『合類節用集』には「墜栗花」とある。ここに挙げた「花車・五月五日・墜栗」に加え、「泉郎」に対する「海上」のような用字の違い、「琴」の訓「コト」のような読み方の違いも含めて、『はなひ草』に二三五語、『俳諧御傘』に一三〇語、『俳諧類船集』に三二八語の収載を見た。

【資料一】の中で、『紅梅千句』の振り仮名付き語が三書に収載はあるが、漢字表記、または訓が三書とは異なるものを列挙すると以下のようになる。(一)内は三書での表記を示す。

一、『紅梅千句』と三書の漢字表記が一致しない語(二書中一書でも表記が同じ場合は除外した)

①『紅梅千句』と一語全体の用字が異なる

- | | | | | |
|--------------|----------|-----------|-----------|---------------|
| 泉郎〔蟹・海上・海人〕 | 詠ふ〔あらそひ〕 | 歩く〔ありく〕 | 漏鉢〔うどん〕 | 條〔枝〕 |
| 籠〔えびら〕 | 縁〔えん〕 | 澳〔沖〕 | 跳る〔躍・おどる〕 | 驚鹿〔かゞし・案山子〕 |
| 脚布〔きやふ〕 | 喰〔くふ〕 | 漕ぐ〔こく〕 | 菜〔さい〕 | 冴還る〔さゑかへる・寒冴〕 |
| 大角豆〔さゝげ・小角豆〕 | 指身〔さしみ〕 | 卓散〔沢山〕 | 金精〔さび・渋〕 | 獅笛〔しゝぶえ〕 |
| 透間〔すき間〔すきま〕 | 卓散〔沢山〕 | 詰る〔結〕 | 味〔体〕 | 逃て〔にぐる〕 |
| 運ぶ〔はこぶ〕 | 臂〔肱〕 | 親王〔みこ・御子〕 | 翠〔みどり・緑〕 | 雇はれ〔傭〕 |

②『紅梅千句』の振り仮名付き語の表記と一部が相違する

- | | | | | | |
|-----------|-------------|--------------|----------|-----------|----------|
| 荒波〔荒浪〕 | 志比湊講〔恵比酒講〕 | 叟草〔翁草〕 | 楫枕〔梶枕〕 | 買もの〔買物〕 | 萱葺〔萱ぶき〕 |
| 烏瓜〔からす瓜〕 | 元興じ〔元興寺〕 | 真盛〔実盛〕 | 三途河〔三途川〕 | 時守〔時宗〕 | 時守寺〔時宗寺〕 |
| 白髪〔白かみ〕 | 涼かぜ〔涼風〕 | 銭湯〔洗湯〕 | 高養齒〔高楊枝〕 | 墜栗〔墜栗花〕 | とし越〔年越〕 |
| 屠蘇白散〔屠蘇散〕 | 土鯨〔鯨〕 | 菜畑〔菜畠〕 | 餅言〔餅事〕 | 一女狂ひ〔二妻狂〕 | 風爐釜〔風呂釜〕 |
| 部や〔部屋〕 | 文字余り〔文字あまり〕 | 餅突〔もちつき・餅つき〕 | 焼めし〔焼飯〕 | 仙ひと〔仙人〕 | |

二、二書に『紅梅千句』の訓が見えない語

- | | | | | | |
|---------|-----------|-----------|------------|----------|--------|
| 花車〔訓なし〕 | 琴〔コト〕 | 五月五日〔訓なし〕 | 乞食〔コツジキ〕 | 神輿〔ミコシ〕 | 情〔ナサケ〕 |
| 誰〔タレ〕 | 出る〔出〔イ〕で〕 | 法〔ノリ〕 | 御田植〔オンタウへ〕 | 夕立〔ユフダチ〕 | |

(但し「法」は『俳諧類船集』の付合語では振り仮名が付されないが、「ほ」の項に「法」がある) 右の一と二に挙げた語を節用集(古本節用集六種・合類節用集)と照合してみると次のようになる。

①『節用集』に収録が見えない語

- | | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|----|---|----|----|-----|-----|----|-----|----|------|-----|
| 荒波 | 恵比湊講 | 楫枕 | 喰 | 真盛 | 獅笛 | 時守寺 | 涼かぜ | 銭湯 | 高養齒 | 菜畑 | 一女狂ひ | 風爐釜 |
| 廬地口 | | | | | | | | | | | | |

②『節用集』とは異なる表記(一)内は『節用集』にある表記である。また漢字列の一部が仮名書きされている語を含む

- | | | | | |
|---------|---------|-------------|---------|-------------|
| 泉郎〔白泉郎〕 | 歩き〔行〕 | 叟草〔白頭草・白頭花〕 | 買もの〔買物〕 | 元興じ〔元興寺〕 |
| 驚鹿〔案山子〕 | 烏瓜〔 〕 | 大角豆〔小角豆〕 | 冴還り〔寒返〕 | 時守〔時宗〕 |
| 墜栗〔墜栗花〕 | とし越〔歳越〕 | 土鯨〔鯨・土〕 | 餅言〔餅事〕 | 文字余り〔文字あまり〕 |
| 餅突〔餅つき〕 | 仙ひと〔仙仁〕 | 嫂入〔嫁〕 | | |

③漢字の収載はあるが訓が相違するもの(一)内は『節用集』での訓

- | | | | | |
|----------|----------|-----------|----------|------------------|
| 泉郎〔カツキメ〕 | 乞食〔コツジキ〕 | 金精〔カネノサビ〕 | 神輿〔ミコシ〕 | 誰〔タン・タレ〕 |
| 詰る〔ナジル〕 | 法〔ノリ〕 | 親王〔シンワウ〕 | 夕立〔ユフダチ〕 | (*「泉郎」は②と③に重複する) |
- 以上の語の中には「高養齒・泉郎・金精」など考証を必要とする語があるが後稿に譲りたい。

以上【資料一】の『紅梅千句』の振り仮名付き語と、付合指導書との関係をまとめると

(一) 振り仮名を付す異なり語六一五語と二種の表記がある「鯨・鯢」「珠・叢・念珠」「三寸・三木」の三語を加え、六一八語のうち『はなひ草』『俳諧御傘』『俳諧類船集』(以下三書と記す)のいずれか、またはいずれにも収載がある語数

二七二語

(二) 三書に収載のある語の中で用字の表記が一致しない語

① 語を表記する漢字すべてが一致しない語 二八語

② 語を表記する漢字列の一部が一致しない語 三二語

(三) 『紅梅千句』の訓が三書と異なる語 九語

となり、『紅梅千句』の振り仮名と付合指導書との関係において、表記・訓の相違がある語も含めると、約六〇%を占める三七二語が三書に見えるという結果を得た。

三

これまでとは視角を異にして、次の二つの事を考察の対象とする。

第一に振り仮名を付す六五五語すべてを抜き出して、①文頭に位置する・付合語である・字音語である、の三条件に②『節用集』に収載がある、の条件を加えて、該当するかどうかの調査を試みる。

第二に、同じ漢字で表記された語六三語に振り仮名を付す場合と付さない場合がある点を問題にして、文頭・付合語・初出語の三条件に振り仮名を付す場合の方が、どれだけ適応するかを調査する。ここでは、字音語に関しては、振り仮名を付す場合も、付さない場合も字音語であるので条件としては除外されることになる。

これら二つの調査結果をまとめて示したのが【資料二】である。

【資料二】は、振り仮名を付す六五五語(異なり語六一五)を、文頭である・付合語である・字音語である・初出語である、の四つの条件のいずれかに該当する語に○印、②『節用集』との関係では、異なり語数六一五に二種類の漢字を使用する「鯨・鯢」「二寸・三木」「念珠・珠叢」があるので三語を加え、六一八語中一致する語に○印、異表記には△、異訓に▲、訓なしに●、収録がない語に×の印を記入し、それぞれの収載状況を示したものである。振り仮名を付す場合と付さない場合の両方にある語に*印を付記し、初出語は*印語のみ該当する項目である。

各条件については、付合語は前句からの付合になっている語であり、付合語であるかに関しては『貞徳紅梅千句』(飯田正一編)を参考にした。「入部」は同書の注では付合の記述がないが、『俳諧類船集』に「いはひ」の付合語として「入部」があり、七八〇番の前句「大ぶくはせばきかこひの内いはひ 正章」の「いはひ」からの付合とする。俳言と密接な関係にある「字音語」については、すでに前掲の表に数字が現れている。『節用集』との関係は『節用集』七種(黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集)を参照し、見出し語と、見出し語の注記からも取り上げた。

まず、【資料二】の振り仮名を付す語全体についての調査結果を整理してみよう。

振り仮名を付す語全体においては、四つの条件との調査結果を数量的に示すと次のようになる。

(①は(一)内に振り仮名付き延総語数六五五語に対する割合を示し、②は六一八語に対する割合を示す。)

① ○文頭に位置する語 一九六語(約三〇%)

○付合語 三四七語(約五三%)

○字音語 二四八語(約三八%)

② 『節用集』(七種)との関係

○『節用集』にない語

一五二語(約二五%)

・用字が一致する語（『紅梅千句』の「かい楯・買もの・元興じ・部や・まん中」に対する「搔楯・買物・元興寺・部屋・真中」と、「解怠・喧」に対する「懈怠・喧嘩」を含む） 三九五語

・用字に相違がある語

四一語

・漢字の収載はあるが訓が相違する語

二五語

・漢字の収載はあるが訓がない語

五語

六五五語中①のいずれの条件にも属さない語には一五六語があり、結果として、

①のいずれかの条件に適応する語

四九九語

①には適応しないが②『節用集』と一致する語

九四語（延数）

となり、右の二項目を合わせた五九三語が、①②の条件のどれかに該当し、約九一％を占める事になる。

『節用集』との関係では、約七五％が何らかの形で収載され、収載のない約二五％の語では、「あら寒、荒波・敵酒・宇治香・良角・有得者・恵比須講・縁付・臆病風・落武者・折烏帽子・搔合せ・かさね壘・寒垢離・感じ入・喰くらべ・透とをり・付そめ・泣いる・迷こむ・迷かへり・引捨」などの複合語が三分の一以上を占め、取り立てて読みが難しい漢字表記でもない。難読と思われる漢字はわずかであり、「叟草・二齒・高養齒・驚鹿」や「宮司・老婆」の訓「ミヤジ・オヒウバ」などは未だ例を得ず、『紅梅千句』独自の漢字表記であると推察する。これらの語についても、前項の考証を必要とした用字と共に稿を改めて検討していきたい。

次に第二の調査事項に掲げた、六五五語の中で同じ漢字表記語でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合がある六三語に焦点を移し、振り仮名を付す根拠を検討していく。

挨拶・哀れ・酔・興・行ひ・落す・首途・上・花車・奇麗・景・乞食・衣・桜・座頭・濕気・品・書院・風・巢・薄・情・節分・候・手折・卓散・尋・蓼・弦葉・鉢・亭主・手飼・出・鉄炮・照・道場・燈籠・尼公・

入部・盗み・軒・濱・繁昌・風爐釜・邊・法・蓬萊・程・稀・三木・溝・虫氣・胸・珍し・持・戻る・森・紋・夕立・讀・靈・例・脇

などの六三語に振り仮名を付す場合と付さない場合があり、ここに掲出した語以外にも漢字だけを取り上げれば、「付く・這ふ・踏む」も含まれるが、語としては「付そめ」と「付し」、「這まはり」と「這かくれ」、「踏たて」と「踏あひ・踏ぬ」のような相違があり除外した。

第一の調査では、振り仮名を付す語全体において検討してきたが、右の六三語の振り仮名を付す場合と付さない場合の差異を解明しないと、振り仮名を付す根拠が解決できないのではないかと考え、文頭語である、付合語である、初出語であるの三条件で、調査したのが次の結果である。

六三語と一語に付き二句に振り仮名がある例に四語があるので、初出語以外は合わせて六七語中、

○振り仮名を付す語が文頭である場合 二三例で約三四％

○付合語である場合 三八例で約五七％

○初出語である場合 六三語中 二四例で約三八％

となる。文頭という条件を取り出してさらに検証してみると、

1 イ、あし手まめにと首途いへり 一五四 安静

ロ、首途の馬をおひの坂こえ 三一四 友仙

2 イ、尼公たち参る五条の天神に 三五七 安静

ロ、愛敬のある尼公にこやか 六一二 安静

とあるように文頭に位置する方には振り仮名がない場合、また、左の3から6のように両方とも文頭であるのものも拘わらず、一方にしか振り仮名が付されない場合があるので、文頭という位置的なものだけでは振り仮名を付す理由は成り立たない。

- 3 イ、夕立こそ寶の瓶の水ならめ 二四五 友仙
 ロ、夕立の露は鉞の玉に似て 七六五 季吟
 4 イ、手折て供にもたせぬ萩 五一四 安静
 ロ、手折じな餅躑てふ華の條 六〇九 正章
 5 イ、蓬來にあはまほしきは龜が谷 三三一 可頼
 ロ、蓬萊と鳴ふたつつく庭の華 八九九 友仙
 6 イ、卓散にしも下す筏士 九三 友仙
 ロ、卓散に出る松井はうらやまし 八八九 友仙
- また、初出の句であるからという条件を考えてみよう。すると、右に挙げた2・4・5・6は再出の方に振り仮名があり、初出語も振り仮名を付す決め手とはならないだろう。
- もう一つ付合語との関係では、前掲の振り仮名を付す場合と付さない場合の差異がある例句の中から取り上げると(〜)内は振り仮名がある句)

- 7 手折て供にもたせぬ萩 五一四 安静
 (手折じな餅躑てふ華の條 六〇九 正章)
 8 賀茂山やたゞすの森のあふれ者 九一七 友仙
 (森の木間を落る涼かせ 七六四 正章)
 9 きよめねは蜘蛛の巣となる大工小屋 七六九 長頭丸
 (巢はうくひすかあの高き枝 一一〇 季吟)
 10 首途の馬をおひの坂こえ 三一四 友仙
 (あし手まめにと首途いはへり 一五四 安静)

11 尼公たち参る五条の天神に 三五七 安静

(愛敬のある尼公にこやか 六一二 安静)
 などのように一句全体に振り仮名を付さない句もあり、7は「供・萩」、8「あふれ者」、9「蜘蛛・大工」、10「首途・おひの坂」、11「尼公・五条の天神」などが付合語であるにも拘わらず振り仮名が付されない。さらに、もう一つ「書院」での事例を示すと

イ、霞まする精進の指身奇麗さよ 五〇九 友仙 かざる書院のうちは長閑し 五一〇 政信
 ロ、あまだりやことの外なるよるの雨 八三七 可頼 書院のさきの苔の朝露 八三八 政信
 とあり、両句とも付合語である。イは前句が客を迎えるための膳の様子を描写しているのに対して、書院もきれいに飾ると受けている。『俳諧類船集』には「書院」の項目に「…御成の時はかざり故実有よしくさり釜のにえ音焼物の香などほのめけば客も馳走をかんし入侍る」とある。ロは昨夜の烈しい雨の後の書院の先にある苔庭の美しい光景を詠み、「よるの雨」から「朝露」の付合と共に、書院は「あまだり(雨だれ)」からの付合となる。振り仮名を付すイ五一〇番の「書院」は、振り仮名を付すことにより、付合以外に特別な意味を持ち、何か含みを持たせているのか、それとも恣意的なのか、どちらにしても、ロの「書院」に振り仮名を付さないということ、必ずしも付合語という条件だけで振り仮名を付さないのは確かである。

「書院」や11の「尼公」のように、振り仮名を付す場合と付さない場合の両方が付合語である語を、前掲の六三語の中から取り出すと次の一九語がある。(語の下に振り仮名を付さない句番号を記す。)

- 行ひ 773・花車 690・乞食 15・衣 673・座頭 374・濕気 890・書院 838・風 13・薄 480・節分 153・鉄炮 174・道場 493・燈籠 516・787
 尼公 357・盗み 27・濱 175・820・三木 369・紋 976・夕立 765

ここに挙げた一九語の中には、振り仮名を付さない場合の方が多くの条件にあてはまるものがある。たとえば「振り仮名を付す場合」「振り仮名を付さない場合」

虱	付合語	付合語・初出語
盗み	付合語	付合語・初出語
尼公	付合語・字音語	付合語・初出語・文頭語・字音語

などがあり、このような実態を看過することは出来ないだろう。

したがって、なお明らかに出来ない点があるけれども、本節での調査の結果をまとめると、第一の全体における調査では、約九一％が四つの条件のいずれかに当てはまる。第二の振り仮名を付す場合と付さない場合がある語についての調査では、六三語中五二語が三条件のいずれかに適応し、その割合は約八三％となる。

このように、総括して各条件との適応率は高い数字を示すのが認められるが、前掲の「虱・盗み・尼公」に付す振り仮名の様相を含め、さらに振り仮名を付す根拠を究明していく必要がある。

おわりに

『紅梅千句』における漢字表記語に付す振り仮名の効用は、読みやすくするためだけではない。振り仮名が果たす機能の一つに、明確には説明できないが、一句において俳言や付合語以外にも視点を置く要語の存在があると想定する。つまり、文学的意義の観点から、注意をひくための振り仮名の機能があると考えるのは可能である。

文頭である、付合語である、字音語である、初出語である、『節用集』での収載状況、などの条件を設定して調査をした結果では、俳言と密接な関係にある字音語や、貞門の俳諧では物付手法を専らとする付合語でも、すべてに振り仮名が付されるとは限らない。前述の「虱・盗み・尼公」のような現象を、どう捉えるかを言及する必要も残されている。

乾善彦氏の『漢字による日本語書記の史的探究』(塙書房 二〇〇二年)に「書記の目的」(二四頁)の論述

があり、それを踏まえると、俳諧では文学的意図との関わりが密であり、その場を共有していない読者に対してどう伝わるか、どう理解されるかに書記の目的がある。『節用集』に収載がある以外には、文頭語・付合語・字音語の三条件に適応しない「買もの・栗・まん中」のような、多訓を持たない平易な漢字に振り仮名を付すこと、または、付合語である、文頭である、というように同じような条件でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合の違いがあるなどは、俳諧の振り仮名の機能を考える上で重要なポイントとなり、今回検証してきた条件以外にも、もっと多方面に視点を置いて、より細密に考究していくことが必要である。

本節では『紅梅千句』の振り仮名について、一斑を報告し、問題を提起したに過ぎない。多くの課題が残されたままである。今後さらに考察を重ね明らかにしていきたい。

注

1、『松永貞徳の研究』続篇(小高敏郎 昭和六三年復刻版 臨川書店)に

季吟の跋は「承応何のとしみな月その日」とあり、且この跋の文面から見て、承応二年十一月に歿する貞徳がこの折まだ死んでいないやうであるから、この跋が書かれたのは承応二年以前、即ち承応元年か二年といふことになる。また承応元年は九月に慶安五年が改元されたのだから、承応元年六月に筆を把つたのならば、「慶安何のとし」と書した筈である。従って季吟の跋は承応二年にかかれたものと思はれる。

と述べられている。

2、二〇頁「注1」を参照

3、「月」は「月」一字で一語を成すものと「月」の漢字と平仮名からなる語「月しろ」「月み」を含み、「月影」

「月毛」のように漢字二字で構成する熟字は含まない。「花」も「花」一字で一語を成すものと「花やか」など、漢字と平仮名からなるものを含む。他の漢字も同様である。

4、『花花草草』の初版が出て後、それを訂正増補し、寛文四年『花花草草大全』を脱稿したが、その開板は延宝四年である。（『蕉門俳諧續集』日本俳書大系一七より 稿者要約）

5、『漢字による日本語書記の史的研究』乾善彦 二〇〇二年（一四四頁）

たとえば、稲荷山古墳出土鉄剣銘に刻まれた系譜部分は、…（略）…それを氏族以外のものを含む多くの聞き手（読み手）に一方的に伝えるためなのである。…（略）…一方通行であっても、話し手と聞き手と話題とがあるかたちで存在することが、ここに繋ぎ止められた「ことば」の存在意義なのである。と述べられている。一方的伝達を目的とする銘文と、文芸としての俳諧には、勿論書記の目的の違いがあり、俳諧では、作者が伝えようとするものが読者に正しく理解されなければならない。

参考文献

- * 赤羽学 「俳諧の用字」〔漢字講座7 近世の漢字とことば〕昭和六二年 明治書院
- * 赤羽学 「俳諧・俳文の語彙」〔近世の語彙〕第五卷 昭和五七年 明治書院
- * 飯田正一 『貞徳紅梅千句』昭和五一年 桜楓社
- * 小高敏郎 『俳句講座4名句評釈』昭和三四年 明治書院
- * 小高敏郎 「紅梅千句」〔俳諧大辞典〕昭和五一年一九版 明治書院
- * 小高敏郎 『松永貞徳の研究』続篇 昭和六三年復刻版 臨川書店
- * 前田富祺 『国語文字史の研究一』一九九二年 和泉書院
- * 宮田正信 『付合文藝史の研究』平成九年 和泉書院
- * 『校注俳諧御傘索引篇』（赤羽学 昭和五八年 福武書店）
- * 『紅梅千句』（貞門俳諧集 一）古典俳文学大系1 昭和四五年 集英社

- * 『俳諧御傘』一六五一年刊 松永貞徳著（『蕉門俳諧續集』日本俳書大系一七 昭和二年 日本俳書大系刊行会）
- * 『俳諧類船集』一六七六年刊 高瀬梅盛著（監修 野間光辰 近世文藝叢刊1 昭和四四年）
- * 『俳諧類船集索引 付合語篇』（監修 野間光辰 近世文藝叢刊 別巻1 昭和四八年）
- * 『はなひ草』文禄四年 立圃著 底本：正保四年版 天理図書館蔵（『貞門俳諧集 二』古典俳文学大系2 昭和四五年 集英社）
- * 『はなひ草大全』寛文四年刊（古典文庫 平成七年）

第二節 『軒端の独活』『江戸宮笥』の表記

はじめに

前節では、振り仮名の研究に関して、前田富祺氏が「文学的な評価との関わりからの検討を必要としている」（『国語文字史の研究一』¹）と指摘し、また細川英雄氏が「具体的な基礎調査は以外に少ない」（「振り仮名―近代を中心に―」²）と指摘するのを踏まえて、『紅梅千句』の振り仮名の実態を考察した。いくつかの条件を設定して調査を進めた結果、難読字だけではなく、易しい漢字にも振り仮名が付されているのが認められたが、その根拠は未解決のままである。そこで、より多くの俳諧集を取り上げて、振り仮名を付す条件を解明していく手が必要として、本節は『軒端の独活』と『江戸宮笥』での漢字使用の実態と振り仮名について考察していきたい。

【表一】（テキストの一〇俳諧集の概要）

俳諧集	底本	刊行年	刊行者・板下
正章千句	赤木文庫所蔵	慶安元年（1648）	不明（正章清書を覆刻）
紅梅千句	東京都立中央図書館所蔵	明暦元年（1655）	敦賀屋久兵衛 清書者：正章
宗因七百韻	柿衛文庫所蔵	延宝五年（1677）	寺田重徳（推定）
江戸八百韻	綿屋文庫蔵	延宝六年（1678）	寺田重徳
當流籠抜	柿衛文庫蔵	延宝六年（1678）	井筒屋庄兵衛
西鶴五百韻	国立国会図書館蔵	延宝七年（1679）	深江屋太郎兵衛 板下（序文）中村西園 （本文）水田西吟
江戸蛇之鮓	光丘図書館蔵	延宝七年（1679）	池西言水
江戸宮筋	国立国会図書館蔵	延宝八年（1680）	中田心友（本文板下）
軒端の独活	光丘図書館蔵	延宝八年（1680）	上村理右衛門 口代松意（板下推定）
七百五十韻	光丘文庫本	延宝九年（1681）	不明（編者：信徳）

を参照しながら、本節では各俳諧集の漢字数・振り仮名量・異なり漢字数などの調査結果を示し、俳諧での漢字

の使用状況を明らかにしていきたい。

【表二】

① 俳諧集	② 句数	③ 総漢字数	④ 異なり漢字数	⑤ 反復記号	⑥ 振り仮名付き漢字数	⑦ 振り仮名付記率（約）	⑧ 一句当りの漢字数
正章千句	一一〇〇	四二五八	一二二五	一六	四六〇	10.8%	約3.9
紅梅千句	一〇〇八	四〇九六	一〇九四	一三	九八六	21.1%	約4.1
宗因七百韻	六五五	二九二二	九〇五	一〇	二八一	9.7%	約4.5
江戸八百韻	八〇〇	四一九三	一一五一	一四	四二〇	10%	約5.2
當流籠抜	五〇〇	二五〇五	九二三	六	二八九	15.5%	約5
西鶴五百韻	五〇〇	二一九七	八五九	三	二二七	15.3%	約4.4
江戸蛇之鮓	四六五	二七一五	八五三	二	一三三	4.8%	約5.8
江戸宮筋	六三二	二四三〇	一〇四七	一〇	七七	2.2%	約5.4
軒端の独活	六四〇	二八〇六	一二九〇	一七	五二三	13.8%	約5.9
七百五十韻	七五〇	二八七四	一一八四	八	九六一	24.8%	約5.2

『紅梅千句』では三・七回使用することになる。延漢字数においては、一六四八年刊の『正章千句』や一

近世の資料における漢字使用の実態を数量的に言及した先行研究には、前田宮祺氏の『誹風柳多留』の漢字使用の計量的な考察³²がある。また、矢野準氏は、人情本・滑稽本・洒落本の漢字含有率・出現度数を調査し、「滑稽本や人情本ではおおむね漢字含有率と振り仮名付記率とに相関が見られるようである」（「人情本の漢字」一〇一頁）と述べる。さらに、洒落本の漢字の含有率や漢字の性格などを述べる彦坂住宣氏の「洒落本の漢字」³³がある。

上の【表二】は一〇種の俳諧作品集の延漢字数・異なり漢字数・振り仮名付き漢字数などをまとめたものである。

⑦振り仮名付記率は③総漢字数に対する⑥振り仮名付き漢字数の割合であり、小数点第二以下を四捨五入した数字である。⑤の反復記号は漢字に対応する反復記号であり、平仮名の踊り字は含まない。この表の俳諧集同士の異なり漢字数を見てみると、『軒端の独活』は異なり漢字数が最も多いけれども、総漢字数に対する割合は、『當流籠抜』が最も高く、『紅梅千句』は総漢字数に対して異なり漢字数の割合が最も低い。平均して考えると、『當流籠抜』では同じ漢字を二・七回使用するのに対して、

六五五年刊の『紅梅千句』などの貞門派の作品よりも、約二〇年後の談林派の『宗因七百韻』では、わずかではあるが漢字の使用率が上がり、『江戸八百韻』からは一句あたり五字以上の漢字が使用されるようになることが認められる。中でも『軒端の独活』は最も漢字の使用量が多く、一句全体が漢字ばかりで表記される例もある。漢字のみで一句を構成するのは『軒端の独活』以外にも『當流籠抜』『西鶴五百韻』『七百五十韻』にも同じような現象が見られ、乾裕幸氏が『軒端の独活』の解説で「当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて」と述べていることも関わっていること捉えることが出来る。振り仮名付記率については『江戸宮筥』は一句当り約五・四と二番目に漢字使用量が多いのにも拘わらず、僅か約二・二%にしか振り仮名は付されない。この数字は漢字の使用量がそれほど高くない『紅梅千句』の漢字付記率に対して、一割にも満たない数字を示している。表に現れた数字から、漢字含有率と振り仮名付記率の関係を次に示してみる。

【順位】	【漢字含有率】	【振り仮名付記率】
1	軒端の独活	七百五十韻
2	江戸蛇の鮓	紅梅千句
3	江戸宮筥	當流籠抜
4	江戸八百韻	西鶴五百韻
5	七百五十韻	軒端の独活
6	當流籠抜	正章千句
7	宗因七百韻	江戸八百韻
8	西鶴五百韻	宗因七百韻
9	紅梅千句	江戸蛇の鮓
10	正章千句	江戸宮筥

となり、矢野氏が述べる滑稽本や人情本のように、漢字含有率が高いから、振り仮名付記率が高いとは限らず、俳諧では、漢字含有率と振り仮名付記率の間には相関関係は成り立たないといえる。

次に、漢字の使用状況を調査した一〇種の俳諧集の中で、最も漢字使用度が高い『軒端の独活』と、最も振り仮名付記率が低い『江戸宮筥』を取り上げて、表記の特徴や振り仮名の様相を考えていきたい。

二 『軒端の独活』を中心にした表記の特徴

まずは資料とした俳諧集一〇作品の中で、一句あたりの漢字使用量が五・九と最も多い『軒端の独活』を取り上げて、漢字使用の実態を見ていくことにする。

『軒端の独活』は出代松意編であり、延宝八年十月の自序がある。松意は、寛文一三年神田に俳諧談林の結社を開き、談林十百韻を興行した江戸談林派の中心的人物とされる。当該集は『談林十百韻』の連衆は名を連ねることなく、松意一門の俳諧興行であり、守武・梅翁・兼豊・露沾・在色・不卜・松意・宗鑑・山夕・江雲・昨今非・暁夕寥・松花跡・白温虎・雅計・松水・松嘯・松律等が主なメンバーとして名を連ねる(『近世文学資料類従』の解説より)。また『軒端の独活』という題号は、『俳諧大辞典』に、定家卿の「忍ばれんものともなしに小倉山軒端の松で馴れて久しき」に因んでつけられたとある。

乾裕幸氏が『軒端の独活』(『古典俳文学大系4』)の上述の解説で

本書の俳風は当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて、佞屈贅牙破調の甚しいものであるが、俳諧態度は旧態依然として談林の滑稽主義に耽溺している。

と指摘するのを踏まえて、具体的に例を挙げると、次のような表記の特徴がある。

(一) 漢詩文調である。

1、笑止三界平等利慾 五四二 昨今非
 2、時寒 食 火消中。聞 掲焉 五五一 昨今非
 3、幽明録に日恋は寢覺の夜風ふく 三四五 松花跡
 4、袂焼飯素羹鳥の為行無^レ状 五五九 昨今非
 5、筋縮子の鬪へるは不^レ齋^ニ虹 五六二 曉夕寥

右の1の句は四つの漢語で構成され、仮名を使うことなく漢字だけで一句をなし、2も読み方を特定するための片仮名による捨て仮名は記されるが、基本的には漢字のみの表記による。3は「日く」、4・5は「無^レ状」「不^レ齋」のような漢文に使われる返詠が見える。また、一句中平仮名が一字しか使われない句が一八例あり、例えば次のような句がある。

(*()内の振り仮名は稿者が付した。)

- 6、御戸代幾重紫葳の袖 一三八 昨今非
- 7、拂ひ物所謂折琴継銅壺 一五九 雅計
- 8、大無盡紫磨黄金を 恭 三二九 昨今非
- 9、尖柱臙角根滑 三八四 松律
- 10、僻諧春に法麟鳳龜龍 五三一 曉夕寥

1・2の句、及び6から10の句を視覚的に捉えたときに、これがすぐには俳諧であると認識されないのではないだろうか。

次に漢字含有率が最も高い『軒端の独活』の平仮名の使用率を調査し、最も漢字含有率が低い『正章千句』の平仮名使用率と比較してみたい。漢字使用総数には踊り字を含まないので、平仮名の場合も踊り字を除外した。

右の調査によると、『軒端の独活』の平仮名使用総数は三二七四字で、一句当り約五・一字の使用となる。漢字の一句当りの使用数が約五・九字であるから大きな差異はないが漢字の方が多用されている。一句当り約三・九と

一〇種の俳諧集の中では漢字使用度が最も低い『正章千句』の平仮名延べ数は九〇〇七字である。一句当り約八・二字となり、漢字の二倍以上の平仮名を使用していることになる。『軒端の独活』の一句当りの平仮名使用数を平均五字として、一句中平仮名使用五字以下の句数を『正章千句』と比較すると

平仮名ナシ	二句 約 〇・三%	なし
一字	一八句 約 二・八%	一句 約 〇・〇九%
二字	四七句 約 七・三%	八句 約 〇・七%
三字	六六句 約一〇・三%	一二句 約 一・一%
四字	一〇二句 約一五・九%	五六句 約 五・一%
五字	一一一句 約一七・三%	五六句 約 五・一%

【正章千句】(一一〇句中)

となり、『軒端の独活』では六四〇句中一句での平仮名使用数が五字以下であるのは、一四六句で約五四%、『正章千句』では一一〇句中一三三句で約一一・一%を占める。

一作品全体の漢字含有率では、踊り字を除外した漢字と平仮名の合計で計算すると、『軒端の独活』は約五四%、『正章千句』は約二二%となる。この現象は彦坂佳宣氏の洒落本の六作品における漢字含有率の調査の数字と比べると、俳諧集の方が漢字含有率は高く、『正章千句』と洒落本の表に添えられた『奥の細道』の漢字含有率とは同率である。彦坂佳宣氏の論述の中で「現代の新聞・雑誌でも、三〇%台」とあるので、『正章千句』の三二%という数字は現代では標準的と言える。

前掲のような一句に漢字を多用し、奔放で自由な形式を持つ『軒端の独活』の作風は『七百五十韻』『當流籠拔』にも現れる。『當流籠拔』は、重頼門の宗且が木兵・百丸・鬼貫・鉄幽などの子弟と共に第一結集として、五吟五百韻を収めている書であり、本書名は最後の句「あうといふより籠ぬけの春」による。岡田利兵衛氏が『鬼貫全集』

に所収される『當流籠拔』の解説で

宗旦は重頼門下中でも磊落な性格と奔放な句風で知られる人であるから、それが伊丹風に一層拍車をかけたので、思い切って自由で異形な作風が本書にも行なわれ、独りよがりのもものも多い。(四五頁)

と記し、さらに、放埒を気取った付句のあり方が述べられている。自由で異形な点では、次のような句の表記形態にも現れていると言えよう。

(一) (内は前句)

- イ、(人形のとくろはげたる野人の色 七 木兵) 次郎太郎又吉桔梗刈萱 八 百丸
 - ロ、(時に西行宗旨帳かく 一四 鬼貫) 丁巳保延二年八月日 一五 鐵幽
 - ハ、(伊斐諾の尊已前の御剃刀 一五九 宗旦) 小間物所出雲八重垣 一六〇 百丸
 - ニ、(弦升も公義の掟花に風 二七七 宗旦) 江戸大霞樽屋北村 二七八 鉄幽
- 右の四つの句は、名前や干支・年月日・地名などの漢熟字を並べるだけで一句を構成し、平仮名が使われな句が見え、そのうえ振り仮名が付されない。振り仮名を付さなくても日常的に見慣れている語の集まりであり、視覚的に一つ一つの語のまとまりが判断できるからと捉える。また、『七百五十韻』では
- イ、一枚手形源空在判 二一〇 如風
 - ロ、志賀飯湯谷融祝言 五九六 春澄
 - ハ、榮螺鮑長辛螺 六二四 仙菴
 - ニ、柴積車千里一時 七一四 信徳

と漢字だけで一句を構成する例が四句あり、次の二句は一句中、平仮名を一字だけ用いる例である。

- ホ、加減幾度銀銅の霜 四六四 信徳
- ヘ、小板大板塩亀の浦 五六〇 正長

これらイからニの四句は、上述の『當流籠拔』のイからニと同様に、単語の羅列であり、助詞や動詞が使われ

ることがない。『當流籠拔』の四句は分かりやすい語で構成されているので振り仮名が付されることもないが、『七百五十韻』のハには全てに振り仮名が付され、ロ・ニも部分的に振り仮名を付すことにより、読みつかえを防いでいる。このように漢字だけで表記され、動詞や助詞を使わないで一句を構成するのは、貞門の俳諧集である『正章千句』『紅梅千句』、または談林初期の『宗因七百韻』では見られない作風である。

(二) 片仮名を用いる。(傍線は稿者付記)

- 11、月日妙アンヘンビル茶染にやる 一六五 白温虎
- 12、グルスイ躍友そゝるらむ 一六六 昨今非
- 13、幾ク何間 つもるスタメン猩々緋 五六一 昨今非

『談林俳諧集二』(古典俳文学大系4)の注では、「アンヘンビル茶」や「グルスイ躍」は未詳、「スタメン」は「オランダ語 Stament の訛。羊毛に麻を混ぜた織物」と記されている。

『七百五十韻』でも次のように片仮名を使う例が見える。

- イ、遥なるカピタン人の雲のぼる 一六七 正長
- ロ、テリ布しぼれば月かはくらん 一八四 如風
- ハ、世のかまひイクチ拾ふて居られけり 五九三 如泉
- ニ、ベウタレ青き苔の小莖 七三六 春澄

イの「カピタン」はポルトガル語で、『談林俳諧集二』(古典俳文学大系4)の語釈に「長崎のオランダ商館長。毎年三月江戸に参礼して物品を献納した。」とあり、一六七八年成立の『俳諧江戸通り町』に「かびたんもつくばはせけり君が春 桃青」と詠まれる例がある。

ロの「テリ布」は、乾きが速い上質の白い麻布のことであり、川例では「夏の月はさらしな山にててりふ哉 利正」と一六三八年刊の『鷹筑波』に見える。

ハの「イクチ」は『書言字考節用集』(六)には「黄草 イクチ(本草) 叢^ト 生山中^ト 黄色者」と記載があり、『炭依』(下)に「茸狩や黄草も児は嬉し兒 利合」と用例が見え、『蕉門俳諧集一』(古典俳文学大系6)では「黄草」は「黄色の毒茸」と注記されている。

二の「ベウタレ」は、『続無名抄』(下・世話字尽)に「米滴^{ベウツク}」とあり、雑炊のことを意味するようである。このように、13の「スタメン」や『七百五十韻』イの「カピタン」は外来語を表わす片仮名であるが、「テリ布・イクチ・ベウタレ」は和語である。漢字に振り仮名を付す、或は平仮名で表記するのではなく、和語が本行に片仮名で表記される。

(三) 送り仮名・捨て仮名を小さく片仮名で表記し、読みを特定する。

14、桐油張小^ツ 船一艘比は花 三五一 暁夕寥

15、同ク切^レ 売^リ 源太殿のほころび 一九〇 松意

16、奥だまし数度の名高^シ 弥生山 一九一 白温虎

17、秋蟲赤松の神^シ 天降 四六七 松律

14は「しょうせん」と読むために捨て仮名の「ウ」を小さく書き添え、15は「きれうり」と読むように送り仮名を、16は「たかし」と読むための「シ」、17は「神」を訓読するのではなく、音読み「しん」であることをそれぞれ示すものである。この表記法は複数の訓を持つ漢字の読み方を特定するためのものであり、振り仮名に類似する機能を果たしていると言えよう。同様の表記法が『七百五十韻』『江戸蛇の鮓』でも見え次のような例がある。

イ、歌屑や冬の存分を饒^リ 奏 一四 心色 (江戸蛇の鮓)

ロ、折帚や御麒麟一疋君か春 一六 幽石 (江戸蛇の鮓)

ハ、虫喰^ニ 柱三輪のさと山 二九八 春澄 (七百五十韻)

イは「饒」を「カザリ」と訓読することを、ロは「御」を「オン」、ハは「喰」を「クヒ」と読むことを指示する

ために送り仮名、或いは捨て仮名を小さく片仮名で記している。このような表記法について、前田富祺氏は「川柳の漢字」で次のように指摘されている。

川柳では、漢字平仮名混じり体ではあるが、漢字に振り仮名を付けることはないかわりに、送り仮名・捨て仮名を付けることよって誤読を避けるようにしていることには注意をしておかねばならない。(一四七頁)

(四) 漢字の左右両側に傍訓を付す

18、いき初の鈍^ン 客臆辱^シ にして 五一五 暁夕寥

このように、右に音読みみの振り仮名を付し、左に語の意義を振り仮名として付すのは、一〇俳諧集中右の18の句一例だけである。『正章千句』一五六番の「擲捕」に、左右両側に振り仮名が付されているが、右傍訓の「イケドラレ」は上に薄く墨で訂正の線が引かれているのが看取でき、後で左に「カラメトリ」と正しい読み方を付したものである。『正章千句』の七一九番には「イケドラレ」に「生捕」の漢字が当てられ、節用集では「擲捕」には「カラメトル」と訓が付される。

右の18の「臆辱」は、右に音読みで「ラクヂヨク」と付し、その下に文選読みみの「ト」を付け、左には語の意義からくる和訓「マジメ」を振り仮名として付し、『ラクヂヨクトマジメ』にして」と左右の振り仮名を読ませ、視覚的と同時に聴覚的にも音と意味を表わしている。「臆辱」は、古辞書類、『大漢和辞典』などには見えず、どこかに使われている可能性は考えられるが未だ探し出すことは出来ない。

このような漢字の左右の傍訓については、鈴木丹士郎氏の「近世文語の問題」(専修大学論集二)に論考があり、読本諸本から例を挙げ次のように述べる。(語例は一部省略する)

たとえば、「弓張月」をみると、

濫觴^{ハシ} 村落^{カクノカ} 郷導^{シヤウ} 誘引^{イダヒ} 新樹^{ニヤキ} 用意^{ヨウイ} 瀑布^{タビ} 経営^{ケイヤウ} 好意^{コウイ} 哀悼^{アイダウ} 集会^{ツギカイ} 恩恵^{オンケ}

のように、漢語につけられたヨミは意味を示していると思われる。さらに、右側と左側両方にヨミをつける場合もすくなくない。右側が音を、左側は訓(意味)を示すという場合が多いが、それだけにかぎらない。次にその類型を示すことにしよう。

a 右ルビに字音をあて、左ルビに和語をあてる。

―活路(弓) 噴飯(弓) 嘆賞(弓) 森然(弓) 秘策(犬)
ニツミナ ワラン ホメル シツル ヒメゴト

b 右ルビに字音をあて、左ルビに類義の字音をあてる。

―律(垣) 淫(英) 冤(垣) 賊(垣) 僕(唐) 官に送らん(唐)
ハツキ フギ ムジツ アフチキ クライ コウキ

b のルビが逆になる。―矮楼(犬) 鬪諍(犬)

ライロウ タウジヤウ

c 右ルビに和語をあて、左ルビに字音をあてる。

―躊躇(弓) 案内(弓) 相貌(犬) 長座(犬) 戦世(犬)
チウチウ アンナイシヤ オウバウ チャウゼ センセイ

c 右ルビに和語をあて、左ルビに類義の字音をあてる。―税斂(弓) 告訴けり(弓)

ネンシツ ソエンシ

d 左右のルビとも和語をあてる。

―館(弓) 砂(弓) 首級(弓) 不意(弓) 日本(弓) 獵人(弓)
ヤカク サゴ ツビ エクリオク ヒノキト カリビト

細川英雄氏は左ルビの問題について

こうした左ルビは、当時の節用集関係の諸辞書にも見ることができ、平安時代からの古辞書類の割注や下注に相当するものであるといえる。(「振り仮名―近代を中心に―」二〇九頁)

と指摘する。『正章千句』に振り仮名を左側に付す例が一句ある。しかし、それは前行との行間に松永貞徳の判詞が書き込まれ、右側に付す余地がないため左に付したものである。

上述の「臆辱」は鈴木丹士郎氏の分類では、類型としてはaに属するが、振り仮名の表記法が左右両側とも片仮名で記され、文選読みをする点では何れにも適応しない。

以上のように『軒端の独活』の表記における特徴を四つ挙げ、検討を加えてきた。その結果、(一)の漢詩文調であることが、漢字を多用することに反映していると捉えられる。

振り仮名に関しては、『軒端の独活』の振り仮名の中には、振り仮名を付す場合と付さない場合の両方がある漢字には次のような一六語がある。

鱸 乾かず 如 榮螺 三途河 隣 泥 灘 襪 初 恵み 萌黄 柳 鎗 粧ひ 律

前節の『紅梅千句』では、同じ漢字で振り仮名を付す場合と付さない場合が六三語あり、その例を挙げて差異を検討することを試みたが、明確な根拠は得られなかった。前節での調査と重複するけれども、確証を得るために簡単に触れておきたい。

一〇作品の中で、「鱸・乾・如・鎗(鑑は使用例あり)」は当該集にのみ出現する漢字である。出現頻度が低く、難読字であるから振り仮名を付すのかというところではない。もし難読字であるならば、初出のほうに振り仮名を付すはずである。四字の中では「乾」だけが初出に振り仮名が付される。このほかに初出に振り仮名を付す漢字には一六語中「恵み・粧・律・灘」がある。「灘」は同じ一句の中で「霧のたゞまひ遠江灘はいかなる灘ぞ」(五五五番)と使われ、前のほうに振り仮名を付せば、後ろはおのずと読みが判断できる。これは読みを助けるための振り仮名と捉える。

文頭である場合は一六語中振り仮名を付す例として「三途河・恵み・萌黄」の三語がある。「三途河」は『紅梅千句』で「三途河」と「途」にのみ振り仮名が施される。当該集での使用例は

イ、乗さがれ夕がほ馬を三途川 四 吟松

ロ、三途河の接木昌に来てみれば 四七三 松水

とあり、ロは「さんずがわ」ではなく、「サウツカ」と読ませるための振り仮名と考えられる。「恵み」は

イ、恵み雨深し独活の大木一夜松 一三七 松意

ロ、砥汁の恵み野らや下萌 二二六 暁夕寥

のように、文頭に位置し、初出語でもある方に振り仮名が付される。イの「恵み」は六儷第一の冒頭の語であり、それが振り仮名を付す重要な根拠になっていると解する。

「萌黄」においては、左に示すようにロに振り仮名が付される。

イ、桶ケ輪や萌黄匂ひの菖蒲の湯 一〇九 菅風

ロ、萌黄の夏野瑠璃紺の雉子 二二〇 雅計

これは単に読み方を特定するための振り仮名ではない。前句では「こび茶蛇びらうど蛇のまく所」(暁夕寥 二一九番)と詠まれ、黒ずんでいて黒に黄色を帯びた濃い茶色の媚茶色から、瑞々しい萌黄色に色が転換する重要な語句であるためと推察する。

文頭でも初出語でもない「隣」は、『軒端の独活』では三回出現し、一〇作品では一三回使われているのにも拘らず、左に例示するように一三回使用中、当該集のロの句にのみ振り仮名が付される。

イ、初ものくはする隣友猿 一九八 暁夕寥

ロ、秋更る隣の祖母の屢啼て 二二二 白温虎

ハ、冷々として夜るの隣の好ましき 五八九 松嘯

前掲の「萌黄」と同様に、文脈の中でその語が持つ環境により、たとえば前後の句との関係から、振り仮名を付す・付さないの差異が生じるのだろうか。『軒端の独活』では、初出の句に振り仮名を付す場合は五例、文頭である場合は三例に過ぎず、初出・文頭であるから振り仮名を付すと限らないのは、前節『紅梅千句』での調査結果と同じと言える。今回も振り仮名を付す場合と付さない場合の差異は、猶解明することが出来ず、推測の域を出ない。さらに今後の検討を必要とする。

もう一つ振り仮名に関して言うならば、『軒端の独活』六二七番に「帝の御Hに袍をなま疵の見立も今是皆松水」とあり、この句は背景に古今集仮名序があり、「秋のゆふべ、たつた河にながるゝもみちをば、みかどのおほんめには、にしきと見たまひ」を想起させるために、「御目」に「オホン目」の振り仮名を付したものである。つまり、古典文学を典拠にしていることを明示するための振り仮名の機能が存在すると言える。

三 『江戸宮筍』の振り仮名

『江戸宮筍』について、『近世文学資料類従』の解題(島本昌一)から要約すると、「伊勢の中田心友編の連句集で、一塵軒政義の序があり、曲言・心友・露言・調和・幽山・立詠・正友・閑友・宗也・言水・政義の句が収められている。立句の殆んどが伊勢に言及し心友の俳風を讃え、挙句も伊勢の或は江戸調和門の俳風を称えている。心友が延宝七年初旬、奥州下向の途に出、その往反、江戸滞在中に江戸調和一流と唱和した作品である。心友の句は調和系、神風館系の俳書に散見し、佶屈とした句風である」とあり、書誌では、本文は撰者中田心友の自筆板下であることも記述されている。

本書は前掲の【表一】で示したように、漢字使用率が一句あたり約五・四と高いのにも拘わらず、振り仮名を付す漢字数は、総漢字数三四一八の中七五字で、その割合は、約二・二%と非常に低い。この振り仮名付記率が最

も低い事象を踏まえて、『江戸宮笛』の振り仮名の実態を中心に考察を加えていきたい。その前に、まず前述の『軒端の独活』と同様に、表記の特徴を見てみると。

(一) 一句全体を漢字で表わす

1、在郷行郎等人形朝嵐	五三五	心友
「行」あたりに振り仮名がほしいところであるが、すべての漢字に振り仮名は付されない。漢字のみで構成された句はこの一句だけであるが、一句中平仮名が一字だけの句が一七例あり、例えば次のような句がある。		
2、不足奉公陰暗き萩	一三六	心友
3、履踏草履草鞋芝の片道	一五二	調和
4、文殊の浄土巻筆巻楊枝	一八四	心友
5、数月の寄合郭公呼	一九八	心友
6、王道仏道世は飛鳥川	三九〇	心友
7、真萩原風の朝立飛脚宿	四二五	宗也
8、萩の夕聲使番呼	四三六	閑友
9、御金荷岩浪越る大井川	四三九	閑友
10、白性清浄道人の菴	五四六	政義
11、餓鬼道に乗車善七	五七四	心友
12、種分る産神参H影山	六二三	政義

右の句のように、漢字が多用され平仮名が一字だけしか使われないのに、どの漢字にも振り仮名を付すことはない。『軒端の独活』と同様に、当該集の平仮名使用の様相を数量的に表わしてみると、平仮名総数は三五五六字で一句当たり約五・六字（『軒端の独活』は約五・一字）となる。一句中平仮名が五字以下の割合を平仮名数・句数・

割合・（）内に『軒端の独活』の割合の順に示してみると

平仮名ナシ	一句	約〇・二% (約〇・三%)
一字	一七句	約二・七% (約二・八%)
二字	四〇句	約六・三% (約七・三%)
三字	六六句	約一〇・四% (約一〇・三%)
四字	八九句	約一四・一% (約一五・九%)
五字	一〇三句	約一六・三% (約一七・三%)

となり、平仮名五字以下使用の句が六三二句中三二六句を占め、五〇%の割合となる。『軒端の独活』が約五四%であったので、『軒端の独活』よりも低い割合であるが、それほど大きな差異はない。

また『江戸宮笛』での漢字と平仮名の割合は、『軒端の独活』と同様に、踊り字を除外した漢字と平仮名の合計を総字数として計算すると、

漢字数	三四三〇字	約四九%	平仮名数	三五五六字	約五一%
13、イツとして貫錢唐織戴く	一六八	調和			
14、ホツハヒひやら翁さひけり	四五〇	心友			
15、蟬とんで口慰みにヒイくひ	二八五	幽山			

14の「ホツハヒひやら」は狂言のはやしことばであり、大蔵虎明本「鬼類・小名類」（鬼のまゝ子）に「ふえしやぎりにたつてほつはひうろ」と用例が見え、「ほつはいひうろ」は「シヤギリ留めの笛の譜」と注が記される。「シヤギリ」とは狂言で笛だけで演奏されることを言い、「ホツハヒひやら」はその笛の口拍子である。片

仮名は『軒端の独活』では外来語や物の名前を表わしていたが、『江戸宮筍』では状態・擬声などを描写するのに使われている。

(三) 一句の中で反復記号を多用する

16、山くく郭公くほとゝきす 五一 心友

右の句はたった二つの単語「山」と「ほととぎす」で一句が構成され、反復記号が三回使われている。

以上のように『江戸宮筍』の特徴的な様相を見てきたのに続いて、少数にしか振り仮名を付さない点に注目して、どのような漢字に振り仮名を付しているかを考察していきたい。振り仮名を付す漢字表記の語(延四九語)を次のような条件による類型別を試みた。(○の中の数字は回数を示す)

- (一) 一〇作品中『江戸宮筍』以外の他の九俳諧集には出現しない語 (延三二語「調市」のみ二回使用)
- | | | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-----|-----|-----|-------|---------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 鯛 | 大 吃 | 葛 西 | 鉄 床 | 寓 言 | 庫 裏 | 毛 兜 羅 綿 | 眩 暈 | 癩 癬 | 小 面 | 下 妻 | 樟 腦 |
| 上 紅 | 白 庭 鳥 | 真 紅 | 痰 持 | 苜 蓿 | 調 市 ② | 天 柱 | 土 砂 | 勿 馬 | 海 鹿 | 鼈 甲 | 斑 |
| 馬 刀 | 鬮 ひ | | 沐 浴 | 摸 様 | 蘭 溪 織 | 識 | | | | | |
- (二) 他の作品集でも使われているが、ア、表記する漢字に違いがある語、イ、同じ漢字表記であるが異訓の語に分類して次に示す。 (六語)

- ア、厄弱…大ぢやくく(軒①) 砂裏…砂利(江八①)
 家猪…猪(江八①) 和中…服巾(軒①)・服紗(西①)
 囉ひ…鬮ふ(正①)・(紅②)・貴て(西①)
 イ、癩病(カツタイ)…ライビヤウ(正①)

(三) 『江戸宮筍』では各一回に振り仮名が付され、他の九作品集にも出現する同じ漢字表記の語(一一語)

【表三】(当分類に属する一一語を表にまとめてみた。)

江戸宮筍で一回振り仮名を付す	他の九俳諧集で振り仮名を付す回数	一〇俳諧集中振り仮名なしで出現する回数
調(シラヘ)	3(軒)	
鹽(タライ)	1(宗)	
綴(ツマレ)	1(正)(ツ、(る))	
連(ツレ)	2(江八)・1(軒・西)	1(西)
女房(女ホ)	2(七)(女ホ)	2(江宮・正・江八)
剥(ハギ)たる	1(正)	1(宗・当・江蛇・軒)
筆耕(ヒツカウ)	1(七)	
干物(ヒ物)		1(軒)
糞(フン)	1(正)・1(江八)	
組(マナイタ)	2(江蛇)	
分(ワケ)	1(紅…副詞「分て」) 1(正…名詞「分」)	4(紅・江八) 1(正・西・七) 2(宗・当・軒) 3(江蛇) 5(江宮)

上の【表三】の「組」は『七百五十韻』で異表記「組板」が一回出現し、「マナイタ」と振り仮名が付される。

上述の分類の結果、振り仮名が付された語、延べ四九語中、(一)と(二)を合わせた三八語が『江戸宮筍』にのみ現れる漢字で表記された語(訓が異なる「癩病」を含む)であり、その割合は約七八%となる。他の九作品集には登場しないということとは、俳諧での使用度は低く、それが振り仮名を付す根拠であることは明らかだろう。問題になるのは「女房」「分」のように振り仮名を付さないで多用され

ている漢字に、なぜ振り仮名が付されるかである。「女房」は、当該集では振り仮名を付す場合と付さない場合があり、次のように三回使用されている。

イ、見入女房はテとれへ御座る 一五六 調和
ロ、女房かな袂のみどり松靡く 二五五 心友
ハ、月を露を女房心に乱れては 三一五 心友

右のハだけが「房」に振り仮名を付す。他の九作品集を見ると、『七百五十韻』に「女房」が二回使われ、二回とも同じく「房」にだけ「ボ・ホ」と振り仮名を付す例がある。ハは前句「儀理も外聞も萩も薄も 露言」の薄から、「徳が乱れる」への連繫を示すためかと推測するが、定かではない。

「分」は

ニ、水の月手にいれられぬ分もめて 二五七 心友
の一句にだけ「分」に振り仮名が付される。
ホ、局客嵩の細道袖分て 二七一 心友
へ、占やさん遠くは分し思ひ種 二八九 幽山
ト、砂裏付馬芦邊を分て露はこふ 三四一 立詠
チ、昼のことし大明松の籬分る 三五一 心友
リ、種分る産神参日影山 六一三 政義

右のホからリの五句には振り仮名が付されていない。この五句に使われている「分」は動詞であり、ニの「分」は名詞として用いられている。一〇作品中『正章千句』では程度を表す名詞「分」に振り仮名が付され、『紅梅千句』では、五回出現する中で、次の一句だけに振り仮名が付される。

又、近江でも分て品よき袖ならし 二〇九 季吟（紅梅千句）

と右の「分て」に振り仮名が付され、「分まひ」（四六）、「分いりて」（三三七）、「分かへる」（四九〇）、「分のぼる」（九五七）には振り仮名が付されない。この違いを見てみると、振り仮名のある二〇九番の「分て」は「品よき」にかかる「殊に」という副詞の役割を果たしている。他の振り仮名が付されない四句（一四六・三三七・四九〇・九五七）に使われている「分」を含め、一〇俳諧集中二五回振り仮名を付さないで使用される単純語「分る」は、すべて動詞としての用法である。

以上のことから勘案して、多用される動詞の用法とは異なり、名詞や副詞として使われている場合、つまり使用頻度が低い用法にだけ振り仮名が付される事が認められる。

次に、異なり語数四八（「調市」のみ二回使用）の振り仮名を付す語を古辞書での載録状況を見ると左のようになる。参照した古辞書は『節用集』のうち、黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集・書言字考節用集である。

②の（ ）内は『江戸宮筈』での用語であり、③の（ ）内は『節用集』での表記を示す

○載録あり

①『節用集』に語全体の載録がある―鯛・尪弱・葛西・癩病・庫裏・眩暈・痲癖・下妻・樟脳・調・真紅・鹽・芭・綴・連・天柱・女房・剥・海鹿・筆耕・家猪・糞・鼈甲・斑・馬刀・俎・酬・沐浴・模様・囁ふ・分

②熟字のうち振り仮名を付す漢字のみ載録がある―紅（上紅）・吃（大吃）・白（白庭鳥）・痰（痰持）・兜羅綿（毛兜羅綿）

③語の収録はあるが漢字の表記に相違がある―鉄床（鉄砧）・砂裏（小石）・刎馬（駢馬）・干物（乾魚）・和中（帛）・（襦袢・細席）

○載録なし―小面・調市・土砂・藪溪織・讒

『節用集』に載録がない「小面」は、能における女面の代表的なものであり、『わらんべ草』に「金春小面と同じ作」と用例が見え、能に関する特殊な用語である。「蘭溪織」は固有名詞、「土砂」は再考を要する漢語であり、稿を改めて検討したい。「讒」は文字要素の音を表わす「纒」が同じである「纒」として用いられている。「調市」は当て字と考えられ

あやめ草酒買調市デツチ今日もくれ

四三 幽水

下界の調市デツチあてかひ餌食成けりとして

一八九 調和

と二回使われ、二回とも振り仮名が付される。江戸後期刊『大全消息往来全』（続消息往来講釈）に

調市「正字は丁稚デツチ 商家につかふ小年のもの」

とあり、『江戸宮筈』が早い使用例なのかもしれない。文化一一年の『浮世床』には次のような用例が見える。

でつち「おめへの口はかりねへ ちやば「口の達者な調市だナ

以上、『江戸宮筈』の漢字量・表記の特色・振り仮名を付す語などについて考えてきた。

その結果、振り仮名を付す語の中で、約七八%が『江戸宮筈』にしか出現しない漢字表記の語であること、漢字と平仮名の使用数は、ほぼ同数であること、『軒端の独活』と同様に本行に片仮名を用いることなどが認められた。同時に、近世初期の俳諧に使われている「調市（デツチ）」のような漢字が、後の文学作品『浮世床』に受容されている例が見出された。

おわりに

俳諧は、平仮名のみで一句を構成する例、漢字のみで一句を構成する例など、多少の例外があるものの、概ね平仮名に漢字を交えた表記体であり、即興を本質とした音声言語を文字化したものである。

乾裕幸氏が『談林俳諧集二』（古典俳文学大系4「解説」三頁）で

既に早く慶長・元和の頃から營利を目的とする出版書肆が現れはじめ、需要の増大と共に、貞門派の抬頭する寛永期以後未曾有の活況を呈し、元禄期に至る約七十年間に毎年平均約百部（寛文十年から元禄元年までの二十二年間では毎年平均約百五十部）の書が刊行されたという（『日本書紀の歴史』巻一）

と述べているように、書記の目的には幅広い読み手が想定され、同一の場をもたない読み手が、文字化した音声言語を理解できることが必須条件であり、振り仮名を付すことには、読み手の位相的な要因が関与する。

前節での調査の結果、振り仮名のいずれの条件にも適応しない平易な漢字の語例として挙げた「買もの・栗・まん中」の内、「買もの」は、今回の一〇作品での調査では、『紅梅千句』で一回使用されるのみであり、「まん中」は『西鶴五百韻』で「真中」と表記され、一回用いられるが振り仮名は付されない。「栗」は一〇作品中、正章千句二回・紅梅千句二回・江戸八百韻二回・江戸蛇の鮓二回の合計五回使用されている中で、『紅梅千句』の一回にだけ振り仮名が付される。なぜ振り仮名が付されるのか、再度詳細な検討が必要であると考えている。

本節では、近世初期俳諧の中で二つの作品集を中心にして、表記の特徴や振り仮名の実態を考察してきたが振り仮名を付す・付さない場合の差異など、前節での問題点を解明できず、考察の経過をボサのに止まった。俳諧での振り仮名は、振り仮名を書記する段階で、誰が振り仮名を付したかにより目的に違いが生じてくる。それを特定しなければ文学的意図との関わりを論じることは出来ないだろう。なお課題は多く残され、引き続き究明していきたい。

注

- 1、前田富祺「国語文字史研究の課題」（『国語文字史の研究一』一九九二年 和泉書院）六頁参照
- 2、細川英雄「振り仮名―近代を中心に―」（『漢字講座4漢字と仮名』平成元年 明治書院）二二二頁参照

3、前田富祺「川柳の漢字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一四九頁参照
4、矢野準「人情本の漢字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院)

人情本では作品ごとのばらつきが比較的小幅で、概して漢字含有率が高いといえるだろう。…(略)…小松寿雄氏によつて指摘されたごとく滑稽本や人情本では、おおむね、漢字含有率と振り仮名付記率とに相関が見られるようである。(一〇一頁)

5、彦坂佳宣「洒落本の漢字」(『漢字講座7 近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一六二頁参照

6、乾裕幸『談林俳諧集二』(古典俳文学大系4 昭和四七年 集英社) 四八二頁

本書の俳風は、当時流行した漢詩文調の洗礼を受けて、佶屈聲牙、破調の甚しいものであるが、俳諧態度は旧態依然として談林の滑稽主義に耽溺している。…:

7、『遊子方言』『辰巳の園』『茶話道中粹語録』『卯地臭意』『茶話総籬』『傾城買二筋道』

8、「洒落本の漢字」(『近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一六二頁

この含有率の意味を考える比較材料は少ないが、表一に添えた『奥の細道』では二・〇% (この値は、岩波文庫をつかい各行の活字組面を一杯にしての算定なので、低めに出ている)、

注に「前田富祺『奥の細道の漢字』(『宮城学院女子大学研究論集』28を参照)」とある。

9、「洒落本の漢字」(『近世の漢字とことば』昭和六二年 明治書院) 一六一頁

明治以後の文学作品四六の調査によれば、三〇%を割るものは概してまれで、なかには四〇%強に及ぶものもあるという。現代の新聞・雑誌でも、三〇%台で、これを下回るものはまれなのである。

「国立国語研究所報告 22『現代雑誌九十種の用語用字』、同 56『現代新聞の漢字』(ともに秀英出版)による」と注がある。

10、岡田利兵衛『鬼貫全集 二訂版』 昭和五三年 角川書店

11、鈴木丹士郎「近世文語の問題」(一九六六年 専修大学論集 第三号) 五九頁参照

参考文献

* 赤羽学「俳諧の用字」(『近世の漢字とことば』漢字講座7 昭和六二年 明治書院)

* 赤羽学「俳諧・俳文の語彙」(『近世の語彙』第五卷 昭和五七年 明治書院)

* 阿部喜三男『蕉門俳諧集一』(古典俳文学大系6 昭和四七年 集英社)

* 飯田正一『貞徳紅梅千句』昭和五一年 桜楓社

* 乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』一〇〇二年 瑞書房

* 榎坂浩尚『談林俳諧集一』(古典俳文学大系3 昭和四六年 集英社)

* 小高敏郎他(『俳諧大辞典』昭和五一年一九版 明治書院)

* 『正章千句』『紅梅千句』『宗因七百韻』『軒端の独活』(古典俳文学大系1・3・4 昭和四五年〜四七年) 集英社

* 『江戸八百韻』『江戸蛇の鮓』『富流籠拔』『七百五十韻』(日本俳書大系七 大正一五年 日本俳書大系刊行会)

* 『江戸宮笥』(俳書叢刊第四卷 昭和六三年 臨川書店)

* 『浮世床』二編卷之下(新編日本古典文学全集 二〇〇〇年 小学館)

* 『古今和歌集』(日本古典文学大系 一九七九年 岩波書店)

* 『大藏古本能狂言』第一卷 大藏彌太郎編 昭和五一年 臨川書店

* 『炭俵』(『蕉門俳諧集一』古典俳文学大系6 昭和四七年 集英社)

* 『続無名抄』(近世文学資料類従 古俳諧編 47 昭和五一年 勉誠社)

- * 『大全消息往来』江戸後期刊（往来物大系三〇巻 一九九三年 大空社）
- * 『鷹筑波』（『貞門俳諧集上巻』俳書大系13 昭和四年 春秋社）
- * 『俳諧江戸通り町』（『談林俳諧集二』古典俳文学大系4 昭和四七年 集英社）
- * 『わらんべ草』（四）一六六〇年（『所収』第六巻 占本能狂言』第六巻 大蔵彌太郎編 昭和五十一年 臨川書店）

第三節 『正章千句』の振り仮名

はじめに

『正章千句』は、安原正章（後の貞室）三九歳正保四年に成立し、慶安元年（一六四八年）に刊行された俳諧集であり、独吟千句として公刊されたものでは最も古いとされる。¹⁾

今回テキストとした近世文学資料類従（勉誠社）所収の『正章千句』は、底本「赤木文庫蔵本」、内題「千句独吟之俳諧 判者 貞徳」、刊記「慶安元年仲冬吉日」とあり、千句と追加百句を収める。末尾には「：猶みつから後学のため清書して烏鶯のさかいを窺ふ此趣よろしう老師にうたへて良鷹の爪験をつけとりかひたうひよ」と独吟興行の経緯と貞徳の批評を乞う正章の正保四年の跋文が記され、正章独吟の俳諧を自ら清書しているのが窺える。書肆名は記されていないが、同書の解題で、安藤武彦氏は『古典俳文学大系』で底本とする「東京大学附属図書館酒竹文庫蔵・刊記慶安元年末秋吉日／柳馬場通二条下町／吉野屋権兵衛」を「ていねいに覆刻したものである」と述べている。

一節で『紅梅千句』を調査した結果、漢字の使用数は、『紅梅千句』が一句当り約四字となり、『正章千句』が約三・九字であるから略同じである。この現象は、一節の『紅梅千句』も跋文から、『正章千句』と同じ正章が清

書していることが判明し、清書者が共通していることによるものと言える。しかしながら、振り仮名に関しては、振り仮名付記率が『正章千句』約一〇・八％、『紅梅千句』約二・四％と大差があり、『正章千句』の方が振り仮名付記率は低いにもかかわらず、同じ漢字でありながら『紅梅千句』では振り仮名が付されず、『正章千句』だけに振り仮名を付す場合がある。このような振り仮名に視点を置いて、振り仮名を付す場面に、どのような傾向が見られるか、近世初期俳諧の表記形態を論じる一つの過程として、『節用集』・『倭玉篇』などの占辞書を参照しながら、考察を加えていきたい。

一 振り仮名の分類

考察を進めるにあたり、『正章千句』（句数一一〇〇）に用いられる漢字数を先ず呈示し、次に漢字表記の語数を語単位で音訓別に示すと次のようになる。

【漢字数】 延漢字数 四二五八 異なり漢字数 一二二五 一句当りの漢字数 約三・九
振り仮名付き漢字延数 四六〇 振り仮名付き異なり漢字数 三七七 振り仮名付記率約一〇・八％

【漢字表記の語】（漢字と平仮名で構成された語、及び訓読みには熟字訓を含み、③の（ ）内は、延語数①に対する③の振り仮名付き語の割合である。）

① 延語数	② 異なり語数	③ 振り仮名付き延語数（割合）	④ 振り仮名付き異なり語数
総語数 二九八〇	一八四六	二八九（約九・七％）	二八六
音読み語 六一九	五四七	一一九（約二〇・八％）	一二八
訓読み語 二二四七	一一九二	一四五（約六・五％）	一四三
音訓混交語 一一四	一〇七	一五（約一三・一％）	一五

右の結果から、音読み語は、訓読み・音訓混交読みに比べると振り仮名を付す割合が高く、振り仮名を付す語全体では、漢字表記の延語数中約一割を占める。それならば当該集では、どのような漢字に振り仮名が付されるのか、他の九俳諧集との比較を試みながら、一つは当該集にのみ出現する漢字表記の語、もう一つは当該集以外の九俳諧集にも出現する漢字表記の語の二つに大別し、さらに前者の振り仮名のヨミを音訓別に分類し、後者では他の九俳諧集での振り仮名を付す・付さないの状況を四項目に分けて検討していくことにする。四項目の中には、同義語であっても、表記が異なることにより、振り仮名を付す場合もあり、それも一つの分類の条件とし、『正草千句』の振り仮名の意義を考えていきたい。

(漢字表記の語には漢字と平仮名の混ぜ書きを含み、○の中の数字は振り仮名を付す回数を示す。)

【一】一〇俳諧集中当該集にのみ出現する漢字表記の語 延一七〇語(異なり語数一六八)

(1) 振り仮名部分が音読みである語(延八三語・異なり語数八二)

行脚 硫黄が鳴 姪女 淫乱 忠比須殿 黄疽 臍臍 会稽 家財 鞆鼓 果李 寒国 龕前堂 五調
 看病 几帳 擬文章 禁盃 虞氏 魏馬 結解 賢 後朝 矜迦羅 三皇 残暑 讚談 散葉 死骸
 醉世 司馬温公 四壁 錫杖 上客 請待 筭齋 小人 職 蜀江 隨身 水門 夕日 奏す 蘇生
 託宣 達磨大師 痰気 調業 追従 田家 毒 齧齧 難産 入室 配所 博多 崑崙樹 鬢水 譜 不孝
 諷誦文 不如歸 補陀樂 不動 不犯 無礼講 僕 凡夫心 讎訳 毎朝 謀叛② 牧溪 優な 洋中 礼盤
 卵塔 濫妨 臨時 淋病 灵文 録

右の語の中には当該集中振り仮名を付す場合と付さない場合がある語がある。「賢」(二二二番)「後朝」(三九五番)「毒」(八五番)「毒」(八番)「優な」(二五番)では振り仮名があるが、「賢」(二〇三番)「後朝」(一〇五七番)「毒」(八五番)「優に」(九五四番)では振り仮名は付されない。

(2) 振り仮名部分が訓読みである語(延七七語・異なり語数七六)

颯 履 尼衣 荒行 荒目 家産 生灵 十六夜 放會 厭ひ② 疣 家主 上宮 嘯け 疑がはで 蝎
 後妻 大原ざし 夥し 腕 奥とぞめ 奥ひそめ 薙蕨 畝 罇 擲捕 餉 繭繭 樵夫 甲子 葦
 角應 桐戸 柿 境日 摩れ 流石 狭間 尿 吭逆 皸 咳 雪ぐ 煤気 鈍 狭き 為方 勒め
 茅 謎子 四十九日 穠 窓清 刃 蠅虎 橋桁 機殿 挽 早 梟 衾雪 船遊び 密夫 藩架墻
 繖ふ 継子 圓裸 水棹 木菟 女 驛 股 弓懸 色めく 轍

○「色」は複合語や単純語として一〇俳諧集中七六回用いられる。その中で当該集二四番の「色めく賀茂の神主の袖」の「色めく」と、『七百五十韻』で「色・色人」各一回に「イロ」の振り仮名が付される。上記の二語と「色めく」は複合語として違いがあるので当分類に属するとした。「色めく」は、漢字で意味を示し、音韻変化した実際の発音「ゆる」を振り仮名で示している。六一四番の「色めく」には振り仮名は付されない。

○「女」は当該集では「才覚な女」(九六一番)、『宗因七百韻』では「はずは女」、『西鶴五百韻』では「戯女」とあり、それぞれ別の語とした。

(3) 振り仮名部分が音訓混交読みである語(一〇語)

閻伽桶 伯父者 鉄棒 故殿 塩垢雕 何本 人御々供 物怨じ 弓断 轆轤頸
 以上のように、当分類では一七〇語中、訓読みよりも音読みの振り仮名が多く見られること、表記と発音にずれがある「色めく」のような特殊な読み方に付される振り仮名があることに注意される。

【二】当該集で振り仮名を付す語が、他の九俳諧集にも出現する語(延語数一一九・異なり語数一一六)

(1) から(4)の「」内には俳諧集名を記す

(1) 他(九俳諧集でも振り仮名が付される語 延四七語(異なり語数 四六))

(漢字列の中振り仮名を付す範囲、及び訓が異なる場合、及び振り仮名を付す俳諧集名などは「」内に記す。)

泉郎〔紅①泉郎人〕 諍ふ〔紅①〕 穢多〔紅①江八①〕 跳〔紅①跳る〕 圍〔江八①圍〕
 蟪蛄〔江八①〕 粥〔紅①江八①〕 迦陵頻伽〔江八①〕 網〔紅①〕 狗品〔紅①〕
 罪障〔当①〕 月代〔江八①当①江蛇①七②〕 新羅〔紅①新羅〕 寶子〔七①〕 屢啼〔軒①屢啼〕 主〔紅①〕
 鉢②〔紅①〕 新羅〔紅①新羅〕 實子〔七①〕 隅〔紅①宗②軒①七①〕 鬪む〔紅①〕 突ならひ〔当①突出す〕
 洗濯〔紅①七①江蛇①洗濯物〕 知死期〔紅①知死期〕 投かへし〔当①投る・七②投つらむ／投られ〕 剥たる〔江宮①〕
 綴る〔江宮①綴・江八①綴〕 土鯨〔紅①〕 博士〔紅①〕 謀〔紅①〕 尾篋〔宗①〕
 滑〔軒①七①〕 面袍〔軒①〕 反魂香〔当①〕 萬歳〔江蛇①方歳〕 膝〔宗①当①〕 蜈蚣〔七①〕 无慙〔紅①无慙〕
 齒黒〔七①〕 招く〔江八①〕 弥勒〔江八①〕 嫂いり〔紅①嫂入〕 癩病〔江宮①癩病〕
 蓋〔紅②江八②当①〕 餅ふ〔紅②餅ふ〕 瘦る〔紅①〕 嫂いり〔紅①嫂入〕 癩病〔江宮①癩病〕
 厩〔紅②〕 悋氣〔紅②宗①悋氣〕

右の語の中には、和製漢語「尾篋・洗濯・悋氣」や、漢字二字以上の連続した熟字に付す特殊な訓「泉郎・蟪蛄・月代」などの語が含まれる。

○「泉郎」は『紅梅千句』『正章千句』に（傍線は稿者付記）

泉郎人までも祝ふとし越 三五六〔『紅梅千句』〕
 泉郎をよるべにしたる船頭 四二〇〔『正章千句』〕
 泉郎をよるべにしたる船頭 八八四〔『俳諧塵塚』〕
 海底にしも入し泉郎人 一二八二〔『俳諧塵塚』〕
 是ほどまでに泉郎のかかへ子 三九〇〔『俳諧中庸姿』〕

とあり、次のような用例が一〇俳諧集以外の俳諧集で見出すことが出来る。

『俳諧類松集』には「塩竈」の付合語に「泉郎のしわざ」、『詞林三知抄』には「泉郎 かつきのあま 潜夫共書也」とあり、俳諧では比較的定着した熟字表記であったと言える。

○「月代」は一〇俳諧集中五俳諧集に六回出現し、当該集では「そる月代は月をいたゞく 七四」と見え、他の九俳諧集では『江戸八百韻』（八一）、『當流籠拔』（三五七）、『江戸蛇之舂』（二〇）、『七百五十韻』（一九九・三〇九）に出現し、これら六句全てに振り仮名が付され、最も振り仮名を付す傾向が著しい漢字表記語である。節用集では『饅頭屋本節用集』に「坂池」、『書言字考節用集』には「月代」の記載がある。

（２）同じ漢字で表記されるが当該集にのみ振り仮名が付され他の九俳諧集では振り仮名が付されない

〔「」内に振り仮名が付されないで出現する俳諧集と出現回数を記す〕 延一七語（異なり語数一六）
 豈〔軒①〕 妹〔江八①江蛇①〕 黄鸝〔紅①〕 楽〔紅①当①〕 霞〔江八②当⑤〕 傘〔江宮①七①〕
 枯し〔宗①江蛇（枯る）①江宮①〕 愚癡〔江蛇①〕 薫ずる〔江宮①〕 夏〔紅③宗②当①江蛇④江宮②〕
 軒①七②〕 故郷〔江宮②七①〕 護摩〔紅①〕 御物〔江蛇①〕 身躰〔宗①江八③当①（身体）七①〕
 居る②〔紅④宗①当①西④軒①七②〕 仙〔紅①七①〕 對〔紅①〕 臺〔紅①江宮①〕 爪さき〔江八（爪先）①〕 抜し〔江宮②〕 根〔紅②宗②当②西①江蛇③軒①七②〕 腹ごゝる〔軒（腹心）①・西（腹心）①〕 半分〔江八①西①江宮①江蛇（半分道）①〕 掘ふ〔七（掘る）①〕 貞白〔当①〕 爐〔江蛇①〕

この類型で、「夏」は「夏」に入めるはきのふおとゝい 七八六」と、当該集でのみ「ゲ」の振り仮名が付される。これ以外には、当該集では「春夏（六七）・夏の夕ぐれ（七〇五）・夏の夜の（一〇九五）」など、「夏」は一〇俳諧集中熟語を除外すると合計一九回出現するが振り仮名は付されない。「げ（夏）」とは、僧尼が夏の三か月間安居を行い他出しないことをいう仏教用語である。単なる季節用語「なつ」とは語の意義が異なる。「故郷」は、『西鶴五百韻』では「古郷」とある。他の俳諧集では「ふるさと」に対応する漢字表記に用いられ振り仮名は付され

ない。「楽」は『西鶴五百韻』では「楽屋」とあり、「ラク」と読む例では「楽長老」（七百五十韻）「楽里」（軒端の独活）「楽寝」（紅梅千句）の熟語に「ラク」の振り仮名が見え、「楽」は「ガク・ラク」の複数の音を持つ。

(3) 他の九俳諧集では振り仮名を付す場合と付さない場合がある語 延・一九語（異なり語数 一八）

語	振り仮名あり	振り仮名なし
狭衣	江八①	江八①
冴還る	紅（冴還る）・宗（寒かへる）①	江宮（冴かへる）① 江八（寒帰る）①
來ざる	七（來ぬ）①	紅（來ず）①
格子	紅①七（御格子）①	七①
景	紅①	紅③宗・当①
崩して	江八・江蛇・軒①	江八①
門	七②西①	紅・宗・当・江蛇①
驕	七①	江宮①
縁	紅・宗①	江宮②
腕	宗・江八①	江八①
愛宕	七（愛宕講）①	紅（愛宕参り／まふで）② 江八・軒①

語	振り仮名あり	振り仮名なし
座	宗（座）①	当①軒①
実	宗（実）・江八・当①	七①
銭湯	紅①	軒①
豊	江八①	当①軒③
燕	紅①	軒②
出衆	紅①	当①
泥	江八・軒①	江宮・軒①
煎	紅②	江宮・軒①
磐石	江八（磐石）①	軒①
蕪	江八・江宮①	七②
分	紅（分て）・江宮（分）①	紅・江八④西・七①
文	当（文）①	宗・当・軒② 江宮⑤ 江蛇③ 紅⑤ 宗・江八・西② 当・軒・七① 江宮④

語	振り仮名あり	振り仮名なし
補薬	紅①	七①
鐘	江八①	紅② 江八・当・江蛇・江宮①
床	宗（床）・七（床）①	紅① 江八④ 当・七③ 江蛇⑤ 江宮⑥ 軒⑥
夜這	紅（夜這）・七（夜這）①	紅（夜這）・七（夜這）①
龍	江蛇（龍）①	当③ 西・軒・七① 江蛇②

ける」として多川され、『紅梅千句』では副詞、『江戸宮筒』と当該集では名詞としての用法に振り仮名が付される。振り仮名のない「床」は「とこ」の意として多用される。

「文」は単字で当該集では五回、『紅梅千句』五回、『宗因七百韻』『西鶴五百韻』各一回、『七百五十韻』一回出現する。当該集での「文」の用例では、振り仮名を付す①「文書くどく恋の玉章 九六〇」と、②文のとりやりに（九二九）・③そへてやる文（九九六）・④えよまぬ文（一〇一一）・⑤後朝の文（一〇五七）の五例がある。文脈から考えれば②から⑤は「ふみ」のヨミであると推定できる。『常流籠技』では「此文三遍空に聲して 三九八」と、「文」に「モン」の振り仮名が付され、「文」が表わす意味内容が、当該集とは異なる用法が見える。

(4) 他の九俳諧集にも出現するが、当該集で振り仮名を付す語と表記する漢字が異なる語 一六語

糖 飴（宗① 江宮（振り仮名なし）①）・〔江八①〕

表中当該集で振り仮名が付されない出現数は省略した。この分類に属する語の中には、振り仮名付記率が高い『紅梅千句』や『七百五十韻』でも振り仮名が付されない場合もあり、特にヨミが難しいとは言えない漢字もあるが、その文脈で語が持つ環境により振り仮名が付されると考えられる。そして複数のヨミを持つ「文・分・床」のような漢字では、読み分けによる意義の相違があり、「分」は前節の『江戸宮筒』で既述したように、動詞「分

煎菽 (イライマメ) 煎大豆 (正①江宮①)・煎豆 (軒①)
 夷 (ヒ) 蝦夷 (江八①)
 鹿驚 (カ、シ) 驚鹿 (紅①)
 塙 (カキ) 塙 (紅①江宮①)
 蟾 (カハシ) 蛙 (正①宗①当①江蛇①江宮①七①)
 假名月 (カシヤク) 神無月 (江蛇①)・神な月 (江蛇①)
 故郷 (コキヤウ) 古郷 (西①)
 物 (モノ) 事 (正①紅③宗⑨江八⑭当③西⑧江蛇④江宮⑨軒⑤)
 昆岩 (コンイワ) 蒟蒻 (江八②) 昆弱 (西①)
 玉札 (ツツサ) 時雨 (宗③江八③当②西②江蛇②軒①七③)
 露 (ツツサ) 玉章 (江八①)
 露時雨 (宗①西②江蛇①江宮①)
 斗鷄 (トウキ) 時 (紅⑥宗⑨江八⑤当⑨西⑦江宮⑤江蛇①軒②七⑦)
 時計 (トクイ) 時計 (七①)

化妖物 (バヤク) 化物 (紅①) 妖物 (七①) 化もの (江宮①) 化物 (江宮①)
 当分類では「鹿驚」のような当て字、「」のような難読字、異体字「」が特徴としてあらわれている。
 ○「鹿驚」：『書言字考節用集』巻一には「案山子(カ、シ)へ出傳(カ、シ)燈録(カ、シ)鹿驚」と載録がある。『正章千句』以後には『貞徳誹諧記』(巻之下 諸国作者の系図)・『滑稽太平記』(巻六 神川貞頼の事)に「春清撰 鹿驚集」の記事があり、その他芭蕉七部集『阿羅野』(巻四)・『其便』・『梅園日記』(巻二 案山子四)などに用例が見えるが、『正章千句』より前の用例を見出せない。「かかし」は、田畑が鳥獣に荒らされるのを防ぐためのおどしのもので

あり、表意的に漢字を対応させた用字である。『紅梅千句』では、字順の前後が逆の「驚鹿」の表記が見える。
 ○「」：『俳諧類船集』の掲出項目には「時雨」とある。『正章千句』では(傍線稿者付記)
 イ、降さうな雲こそたてれ露 一六五
 ロ、造宮をするや ふるみや 九一四
 ハ、霽雪にも舩をえわたさて 一〇〇三
 ニ、うそさむき時雨に秋の山こえて 一〇三九

と詠まれ、イの「露」は、『宗因七百韻』『江戸蛇之鮓』『江戸宮笥』での表記は「露時雨」であり、用字差が窺え振り仮名は施されない。『合類節用集』に「雨」(左傍訓シグレ)、『世話用文章』(『近世文学資料類従 参考文献編9』勉誠社)にも「雨」と二字での載録が見え、『倭玉篇』(夢梅本)には「(小雨也)コサメ/シグレ」と当該集と同じ漢字表記が見える(内割書き/は改行を示す)。「類聚名義抄」「伊呂波字類抄」にも一字での載録があるが、現段階では使用例を見つけないことが出来ず、難読字と捉える。
 ○「」：異体字「皆」は『節用集』に載録があり、「日」の上は「之」の古字である。『新撰万葉集』(寛文版)では「H」偏に「之」の漢字が見える。

以上の大別【一】の分類に属する一七〇語と【二】の(4)「他の俳諧集でも出現するが表記する漢字に相違がある語」に属する一六語の両者を合わせた一八六語は、俳諧での使用頻度が低いと考えられ、そこに振り仮名を付す理由が存在するのではないだろうか。また、【二】の(1)「他の九俳諧集でも出現し且つ振り仮名を付す語」の四七語は、振り仮名を付す傾向にある漢字と捉えられる。前述の一八六語とこの四七語を合わせた二二三語に「裾・夕日・毎朝・後朝」のような音読み語、「泉郎・家産・家主」のような熟字訓、「放會」のような一字に二字を分解した解字に振り仮名が付されるのが含まれ、これら二二三語の振り仮名は機能としてヨミを助けていると捉え、振り仮名を付す総数二八九語の約八〇・六%を占める。「放會」は『倭玉篇』(篇目次第)、及び『書言

『字考節用集』(巻八)に一字で「」とあり、『反故集』(『近世文学資料類従』古俳諧編47)にも一字で「」と記載されているが、「放會」のような二字での用例は見つけ出すことができず、「方」偏に「會」の字を二字に分解し、振り仮名を付したと考えられる。

【一】『正章千句』にのみ出現する漢字表記の語	【二】『正章千句』で振り仮名を付す語が他の九俳諧集でも出現する語	(一)他の俳諧集でも振り仮名あり	(二)出現するが振り仮名なし	(三)振り仮名あり・なしの両方	(四)同義語で漢字が異なる
いとふ⑤	あま①	かすむ②	かど①	かはづ①	
かいな①	はがれて①	かれたる①	なびかず①	こと④	
きぬぎぬ①		ね④		とき①	
しし①		ほる①			

それでは次に、漢字使用率が一〇俳諧集中最も低い当該集での平仮名使用の様相を見てみると、漢字延数四二五八字に対して、平仮名使用延数九〇〇七字で漢字含有率は約二二%となる。

上の表は、当該集で振り仮名が付される語が、仮名書きされる傾向にあるのか、振り仮名が付された漢字表記の語と仮名書きとの関係を、前掲の分類項目別に示したものである。○の中の数字は出現回数を示す。

この表から、当該集では平仮名の含有率が高いのにも拘らず、振り仮名が付される語においては、仮名書きと併用されるのはごく僅かである。「厭ふ」は漢字表記で二回出現し、二回とも振り仮名が付され、仮名書きでは五回出現することから、仮名書きが通用的であったと捉えることが出来る。但し、例えば表中「ね」は「根」と「音」、「かいな」は「貝」と「腕」のように、仮名表記の中には固定した概念を排除し、掛詞などの機能をもつものもある。また、「尿」の片言「しし」を、そのまま文字として書き表すのに仮名が用いられる。

次に、この表中の一五語の仮名書き語に対する漢字表記が、どれだけ出現するかを左の表に呈示してみた。

いとふ	厭ふ②		ね	根①	振り仮名有り	振り仮名
かいな	腕①腕①		ほる	握ふ①		
きぬぎぬ	後朝①	後朝①	かど	門①		
しし	尿①		なびかず	麻①		
あま	泉郎①	海士①	かはづ	鱧①		蛙①
はがれて	刺たる①		こと	物①		事①
かすむ	震①	震む⑦	とき	月①		時⑦
かれたる	枯らし①					

左の表のように、振り仮名を付す語の中には、同じ語が漢字で表記される場合もあれば、仮名で表記される場合もある。また、第一節・第二節

で見えてきたように、当該集でも複数回出現する語の中には、同義語・同表記でありながら、振り仮名を付す場合と付さない場合がある語がある。その二一語の中で、初出に振り仮名を付す語には「黄鸝・跳・蕉ずる・景・主・仙・疊・剛む・勒め・毒・投・膝・愷気・瘦る・嫂・俊」の一七語があり、「奏・震・賢・狭間」の四語は初出語ではなく、再出語に振り仮名が付される。「床」(品詞の相違)・「女」

(複合語と単純語の相違)・「色めく」・「後朝」(ヨミの相違)は除外した。

この結果二一語中一七語が初出に振り仮名を付し約八一%を占める。一節の『紅梅千句』の調査では、約三八%にしか満たなかったのに比べると、初出に付す傾向が大きいと言える。但し少数の中での結果であり、初出語に振り仮名を付すと結論付けることは出来ず、あくまでも初出語に振り仮名を付す傾向があることを示すに過ぎない。

前に述べたように、『正章千句』と『紅梅千句』の一句あたりの漢字使用数は略同じであるが、振り仮名付記率には『正章千句』は『紅梅千句』の約半数という差異がある。このように『紅梅千句』の方が振り仮名付記率が低いものにも拘らず、『正章千句』で振り仮名を付し、『紅梅千句』では振り仮名を付さない漢字表記の語に「黄鸝・愛宕・薬・門・物・護摩・對・臺・根・鍵」の一〇語がある。「黄鸝」は当該集巻頭の句最初の語であること、「物」は『倭玉篇』（慶長十五年版）に「物」の両側に「ブツ・モツ」の傍訓があり、下に「モノ・タグヒ・コト」と記されているが、「コト」と読むのは当該集のみであり、特殊であることなどが振り仮名を付す根拠と考えられる。

「根」は『正章千句』一回を含め、一〇俳諧集中一四回出現するのに、当該集にのみ「根から手折て送るしら菊 四七四」と振り仮名が付される。この事象は、暉峻康隆氏が『連歌俳諧集』（『日本古典文学全集』三一頁）の解説で、俳言の使用を条件とする貞門俳諧の付合の手法について、「物付」（詞付）、「見立付」、「本歌取り」、「心付」など、「要するに情よりも詞をもてあそぶ言語遊戯の域を出ていない。」と述べることに関連すると捉える。一節における『紅梅千句』の「栗」や、「栗」と同様に平易な漢字「森」に付す振り仮名と同じ現象と捉え、付合の手法などを考え合わせて、俳諧の表現方法により、前句からの約束事に關わる重要な語であると推測する。

前述の一〇語とは反対で、『紅梅千句』では振り仮名を付すが、『正章千句』では振り仮名を付さない語は異なり語にして九五語がある。この九五語を付表の【資料一】「紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係」と照合することを試みた。そこで、次に『正章千句』では振り仮名が付されないが、『紅梅千句』では振り仮名が付される語の中から、『はなひ草』『俳諧御傘』『俳諧類船集』のいずれかと一致する語を列挙して考察を加えてみたい。

(一) 内の表記は『正章千句』での用語、(二) 内は右の俳諧作法書三書での振り仮名を示す

坂	威勢	戴く	馳	語ふ	飢	運	酔	詠	奥	宮	鬼	佛	甲斐	竈	首途	瓶	河狩	具足	
栗	喰	乞食	木間	碁盤	衣	棧敷	座頭	時守	珠数	鍾馗	精進	(精進腹)	虱	新発意	神典	果			
透間	薄	節分	候	誰	(たれ)	薪	尋	珠	調菜	頭山	鼓	亭主	敵	照	齋	納豆	逃	場	盜
寐	軒	蜂	濱	拂	火事	人	踏	邊	坊	前	溝	宮筒物	(宮筒)	麦飯	胸	森	湯	夕立	(ユフ

右の七三語は三書いずれかに載録があり、『紅梅千句』で振り仮名を付す語の中には、付合用語との影響関係を否定することは出来ない。裏返して言うならば、『正章千句』では、右に挙げた語に振り仮名は付されず、付合用語と振り仮名の関係は成り立たないと言える。但し一節での検証の結果では、『紅梅千句』では必ずしも付合用語あるから振り仮名を付すとは限らず、振り仮名を付す総語数六五五語中、三書に収載があるのは二六一語で、同じ付合語でも振り仮名が付されない現象を説明できないままである。因みに前掲の七三語以外で『紅梅千句』で振り仮名が付され、『正章千句』では振り仮名が付されない語には次の二一語がある。(一) 内は『正章千句』での表記を示す。

崇め	蕪	哀れ	臆病風	(臆病)	落す	恩徳	駈かりし	兼	奇麗	碁	山莊	下をなご	尻	出た	泣い
若僧	煮る	齒	昼狐	程	稀										

おわりに

本節では、『正章千句』における振り仮名の分類と、『紅梅千句』との比較を通しての考察を試みてきた。同じ漢字で訓読みと音読みの両方が出現する場合は、読み分けによる意味の違いがある語もあり、使用される頻度が低い音読み語に振り仮名を付す傾向があることが認められた。同時に二節における『江戸宮筒』の振り仮名と同

様に、『正章千句』特有の漢字表記の語に振り仮名を付す割合が高く、振り仮名の多くはヨミを助けるための機能と考えられ、読み手の便宜を考慮して付した振り仮名である。

『紅梅千句』との比較では、『正章千句』と『紅梅千句』は同じ正章が清書したとは言え、書肆や筆跡に相違があることから、板下を書いた人は同じではないと推定でき、振り仮名を付す傾向にも違いが見られた。つまり、清書する事と板下を書く事は別の工程であり、板下を書く人は、清書者が付した振り仮名をそのまま書くのではなく、板下書きによって、それぞれ振り仮名を付す傾向が異なると言える。

以上のように、清書者が同じ二つの作品を比較する事により、振り仮名に関する問題点の一片を明らかにし、『正章千句』の振り仮名の実態の報告としたい。

注

1、亀井孝・堤精二・中村俊定・前田金五郎・宮本二郎『正章千句』研究(一)』(1970『文学38』 岩波書店)

参考文献

- * 『曠野』元禄二年成立(『芭蕉七部集』新日本古典文学大系 一九九〇年 岩波書店)
- * 『紅梅千句』『俳諧中庸姿』『俳諧塵塚』『正章千句』(古典俳文学大系1・2・4 昭和四五年〜四七年集英社)
- * 『滑稽太平記』一六八〇年直後成立 稿者不詳(『貞門俳諧集二』古典俳文学大系2 昭和四五年 集英社)
- * 『詞林三知抄』著者未詳(『連歌資料集3』昭和五二年 ゆまに書房)
- * 『梅園日記』弘化二年刊 北慎言著(『日本随筆全集 第十卷』昭和二年 国民図書)
- * 『俳諧類船集』一六七六年刊 高瀬梅盛著(京都市大学国語国文学研究室 昭和二〇年)
- * 『連歌俳諧集』(日本古典文学全集 昭和四九年 小学館)

第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記

―振り仮名の機能と表記形態の特徴―

はじめに

近世初期俳諧での表記について、これまでに一節・二節・三節で、『紅梅千句』『江戸宮筋』『軒端の独活』『正章千句』の、表記の特色や振り仮名に関する考察を重ねてきた。振り仮名についての先行研究は、近代についての研究が中心で、近世初期の俳諧における研究は未開拓分野と思われるからである。

本節では、俳諧の表記に関する一連の研究の一環として、調査資料に『宗因七百韻』と『七百五十韻』を取り上げる。『宗因七百韻』については、テキストとした『近世文学資料類従 占俳諧編28』所収、柿衛文庫蔵本の解題で、加藤定彦氏が、

書名『宗因七百韻』は内容を正確に表してはいず、宗因出座の百韻四卷(三吟・両吟・十吟・九吟各一卷)、独吟百韻一卷・三吟歌仙一卷・梅翁判歌仙一卷及び似春・幽山との三ツ物二組・発句十三を収録したものである。わざわざ書名に「宗因」の名を冠らしていることや、「イニ氷柱」「イニナガノ」と校注していることから、書肆の企画するところであったと見て間違いない―版下の筆蹟から書肆は寺田重徳と推定される―。刊年は、『故人俳書目録』の記述「延宝五」に従うべきか。

と述べるように、異なる興行での作品を収録した俳諧集である。つまり作品によって、それぞれの清書者が異なり、様々な読者層を想定して書肆により編纂された俳諧集である。

一方『七百五十韻』は、同じく『近世文学資料類従 占俳諧編33』所収、光丘文庫本(延宝九辛酉歳／青陽吉

談林末期の『七百五十韻』においても、漢字表記語の語数を示しておくこと次のようになる。

漢字表記語の延語数 一五〇八語

異なり語数 一六四八語

振り仮名付き延語数

六一一語

振り仮名付き異なり語数 五八〇語

振り仮名が付された語を前述の『宗因七百韻』と同様に分類し、類型別の語数を示す。

【一】『七百五十韻』にのみ出現する漢字表記語 延三四二語（異なり語数二二六）

相あひ浦川	相住	和物草	吉昆布	青苧	青駄	青丹	障泥	嵩	揚屋	揚代	網子	朝政	化
愛岩講	姊女郎	阿尔摩尔摩々	骨	膏	唾方	天の磐樺	鳥柿	編笠	天	如何	怒猪	幾億	幾夕
べ	五十／五十年	虎杖	齋宮	一轍	木	弥	煎綱	色人	岩城山	岩殿	印子	院殿	樹屋
後堂	後飛	梁	猿	鳥羽	産毛	海鬼燈	裏屋	上氣人	上棧敷	餌	忠心	餌釣	肢
縁覚の亮	鷺丹	大酒宴	大焼	置き鼓	噫	乙甲樺実	乙門	大臣	彼土	庚午	電風呂	紙袍袋	空車
廬	何億	搔餅	風折	鹿背山	片類	片肌	鉄火箸	カビタン	人	銀鍋	金蓋	喰さいて	銀
口真似	杏踏皮	轡	限	闇う	藏為替	水母	胡桃	繰臺	蛭	下踏袋	浩然	行年	肥肉
和綸子	小齋	越	小粒	泥鰻	每	粉棟寺	粉棟袋	古奴見	木皮	小袴	呉服店	胡麻餅	薦舟
笠屋	小草鞋	魂	金光寺	金翅鳥	紺瑠璃	開	珈琲樹	笹竹	座敷能	茶堂	結矢	鮫	鞘
晒	駱く	敷鯉	紫金錠	下枝	死出	篠薄	柴積車	時平	清水精舎	赤熊	邪見	秋長老	章歌
鉦鼓	肖柏	常舞臺	声聞	松柴軒	水腫	渚沙	須達	角縮綿	皇	説和管	泊門	建	谷上山
輝娟	善哉	禪山	蕪鉄	衣通姫	外露地	蕪摩那華油	反碗	椽	立游	橘	貴き	建	谷上山

玉輝	戲言	着到	茶縮綿	茶瓶	中興	造	黄楊	付階子	塊	包み箸	包み饅頭	角盤	唾
鈎薬鏡	出逢	手繰	手錠	方便	調布	鐵鐔	鉄鉢	蝸虫	テリ布	電光	蕃椒	道戯舞	徳屋
千貫日	土堤町	飛つく	富	豊	豊年	長辛螺	七面	名主	半酔	生壁	納屋	悪き	一夜
抜捨て	布小	塗出し	寢覚人	捻杖	捻箸	佞智者	妬み	根継	寝間	現	罵れ	延為替	貝
銀鉞	袴籠裏	箔椀	掃落す	楡紅葉	離れ屋	宇	嶋	半櫃	稗園子	曳窓	盪	一聞	一聞
天鵝毛	天鵝絨	天鵝綿	天鵝縮	舎で	籬	節穴	伏芝	憤鼻	夫人	冬脰	振鬮	諂はふ	干瓜
頭	焰	真瓜	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀	真銀
御もと	實	麦藁	菴	生	生	生	生	生	生	生	生	生	生
財布	樓船	疫病	八十瀬	屋鳴	山陵	行ずり	茹草魚	湯桶	湯谷	楊名	桑門	四隅	四つ手
裸形	楽長老	輪寶	籠輿	樽	滄海								

この類型の中には、節用集に収録がなく用例も見出せない語がある。例えば 骨・猿・實・猿・實・字などが該当し、その内、「骨」は節用集では「膈・肋・」、「アバラ」には「豁」と収録され、『続無名抄』（巻下）には「骸骨」の表記が見える。「字」については、『同文通考』（巻の一）に隸書と八分は字体が似ているから混同しているとの記載があり、混同の結果を如実に示す漢字表記である。『書言字考節用集』では「八分字」、「合類節用集」では「八文字」と収録がある。「實」については、『合類節用集』に「」に類似した漢字「」（左傍訓イ）が見える。には「シレヌモジ」と振り仮名が付され

乙角蜀魂音信て 二九七 信徳 虫喰柱輪のさと山 一九八 春澄
と詠む。辞書・用例などでは未だ探し出すことが出来ず、この語を構成する二つの漢字の一つ一つの部分を次のように分析してみた。前部の では

「竹」には「書き物」、「」には「石」、「斬」には「ほる」

鍼（針）（正①江八①）

火燧石（火打石）（江蛇①）

臆（腎）（紅①）

冷汁（寒汁）（西①）

蜀魂②（郭公）（正②紅②宗①江八②江蛇⑦江宮②）・杜宇（当①軒②）・子規（江蛇①江宮①軒①）・時鳥（江八①当③江蛇①七①）
組板（組）（江蛇②江宮①）

右の類型に属する「時計」について、『正章千句』では「枕上の斗鶏に夢をさまされて 七八一」とあり、『七百五十韻』では、「時計に四方の風をめぐらす 二二〇 仙菴」とある。「時計」の漢字表記は、一〇俳諧集中『七百五十韻』にのみ出現し、節用集にも収載がなく、節用集では「土圭・斗景・圖景」が見える。「時計」の生成については、田島優氏の『近代漢字表記語の研究』（一九九八）に詳細な論考があり、「物自体の形態が変化したために本来の漢字表記とは合わなくなり、意味的表記を用いる」と指摘する。元来の表記「土圭」は中国に由来するものであり、昔口かげの長さを計るのに用いた道具を指すものであった。田島氏は「とけい」の近世での漢字表記を江戸時代の小説から用例を挙げ、その中では『好色一代男』の「土圭」を最初とし、漢字「時計」は、一六八七年刊の『武道伝來記』『男色大鑑』を初出とする。『日本国語大辞典』では一六八八年刊の『日本永代蔵』が初出例であるが、一六八一年刊の『七百五十韻』での「時計」の漢字は、『武道伝來記』より六年早く使用される。『七百五十韻』と同じ年に刊行された『西鶴大矢数』では「計鶏」「土圭」と表記される。

【三】振り仮名が付される語の中で、他の九俳諧集にも出現する語

(1) 他の九俳諧集でも振り仮名が付される語

延七二語（異なり語数六五）

挨拶 銅（江八）銅 菖蒲 或 飯 衣桁 端籬 礎 一揆 巖 虚③ 乳母 簾 覆 伯父 負ふ 癩
箒 搔板 檜 銀 滑鋒 確 踵 椋橋山 強盜 牛頭 木玉 樵 逆 月代② 誤ぎ 懺悔 蜺 組

簧子 圖法師 須弥（西）須弥 隅 洗濯 店② 釧 唐柜 銅壺 渚 鉛 滑 脛 齒 齒 齒 運ぶ②
挟み 腹這（軒）腹這 額 筆耕 襖② 篋 湖 漲る 蜈 滅金 礪 礪 燃 守 葉鏤 夕榮 浴衣②
一分類では、「月代」が『正章千句』『江戸八百韻』『當流籠拔』『江戸蛇の鮓』に一回、『七百五十韻』に二回と一〇俳諧集中六回見え、全てに振り仮名が付され、最も振り仮名が付されて出現する回数が多い。続いて複合語も含め「隅・瘧」五回、「虚」四回、「挨拶・滑・乳母・洗濯・浴衣」三回、その外は一回であり、これらは必ず振り仮名が付されて出現する漢字表記語である。

(2) 他の九俳諧集では振り仮名が付されない語

延一一〇語（異なり語数一〇〇）

明 蛩 朝 穴 淡 行燈② 意趣 色 生 柄④ 生て 起て 男鹿 驚す 和尚 阿蘭陀 咳氣
梯 飴る 顔 交野 記念 合點 甲 釜 皮 神田 組 急 清 玉楼 着る 巾着 金殿 下す 朽
なむ 来 歛 氣 外科箱 化して 小督 御前 木葉 胡粉 覚て 三口 小夜 仕たい 鹿 下 酢
董 初て② 太夫 高き 焼② 磁 告て 豆腐 融 飛来り 屏 中 詠め 歎かし・き② 鍋 馴て
成 脱で 念佛 簪 早 比丘尼 髭 風蘭 占菓 降らし 経ぬ 馬子 間 柵 道人 緑 水上 簪
蒸 廻 食 面 求る③ 諸 山守 夢② 瑠璃
右に属する語の中で、「朝・着る・朽・来・淋しき・鹿・下・高き・成・歎」などは、他の九俳諧集で多用されるが振り仮名は付されず、『七百五十韻』においても振り仮名が付されない場合もある。「色」は『正章千句』に「色めく」とあり、「飛来り」は『飛次第』、「古菓」は同じく『紅梅千句』に単純語で「菓」とある。

(3) 他の九俳諧集では振り仮名が付される場合と振り仮名が付されない場合がある語

(一) 内に振り仮名が異なる場合は片仮名でボス。
延七〇語（異なり語数六四）

浅漬 或は 戴く② 馳 埋れ 栄耀 驕 蚊 楽屋 肩 帷 門② 鴨 問鋪 牙 口説 喰ひ 金

火燧^{コタツ} 来ぬ^ユ 木間^{コトマ} 衣^{コホモ} 榮螺^{ナマイ} 悟た^{オトツ} 淋しき^{ナシ} 死^シ 尻^{シリ} 既^{スズ} ② 雪踏^{セキダ} 雪隠^{センチ} 染る^{ソム} 誰^{タガ} 伊達^{イダテ} 千束^{チツカ} 塵^{チリ} 葛^{クワ}

② 躑躅^{ツツシ} 連る^{ツラナ} 筒^{ドク} 胴骨^{ドウボネ} 床^{トコ} 直す^{ナフ} 投つらむ^{ナゲ}・られ^{ナレ} ② (へ正) 投か^{ナゲ} (へし) 灘^{ナギ} 握る^{ウグ} 女房^{メボ} ② 歯^ハ 笄^{ハシ}

吐ん^{ハカ} 祖母^{ハバ} 蒲團^{フツダン} 隔つ^{ヘツ} 紅粉^{ベニコ} ② 神輿^{ミコシ} 土産^{ミヤヅル} 木綿^{キムネン} 指^{ササ} 粧ひ^{シヨホ} 夜這^{ヨバセ} 羅紗^{ラシヤ} 緑青^{キナンド} 賜^{タマ} (当) ハラワタ (軒^{ケン}ラワタ) 蕨^{ワラヂ} 草鞋^{フラスヒ}

当類型に属する「女房」は、他の九俳諧集中一一回出現するのにもかわらず、一〇俳諧集中『七百五十韻』と、振り仮名付記率が約二・二%と最も低い『江戸宮筈』でしか振り仮名が付されない。『七百五十韻』では一回出現し二回に振り仮名が付され、『江戸宮筈』では三回出現のうち一回だけに「女房」と振り仮名が付される。以上の振り仮名が付された六一一語の中で、音読み語は延一一一語で異なり語にして一〇八語がある。部分的振り仮名の場合は、振り仮名を付さない部分も音読みと推定でき、一語全体が音読みと認定できる漢字表記の語である。一節の『紅梅千句』では、振り仮名を付す語の中で、音読み語が占める割合が約三八%であったのに比べると、『七百五十韻』では約一八%であり、音読み語の比率は高くない。次に、表記形態の特徴の一つとして、漢字だけで一句を構成する例があり、それを列挙する。

- | | | |
|---|-----|----|
| ① 賦 ^ニ 日月明 ^{アキヨカ} 借 ^ン 樓船 ^{ヤカネ} | 八七 | 仙菴 |
| ② 一枚手形源空在判 | 二一〇 | 如風 |
| ③ 池田 ^{イカデルカゼン} 橘 ^{ナシ} 胡桃髭籠屋 ^{カヌシカケルヒシケ} | 四四四 | 仙菴 |
| ④ 如何禪山青 ^{イカニカゼン} 月白 ^{ツキシロ} 帰依和尚 ^{キイニョウ} | 五四二 | 常之 |
| ⑤ 志賀 ^{シハ} 飯湯谷 ^{イヒラユ} 融祝言 ^{ユキイハヒナガニシ} | 五九六 | 春澄 |
| ⑥ 咸進 ^{ケンシン} 榮螺 ^{エイロ} 鮑長辛螺 ^{ウミナガシメ} | 六二四 | 仙菴 |
| ⑦ 柴積 ^{シバツキ} 車千里一時 | 七三四 | 信徳 |

このような表記形態は、二節の『軒端の独活』では二例であったが、『七百五十韻』では七例ある。この七句以外の二一一番では「無御座候」のような漢文での返説用法が見え、右の七句と共に漢詩文調を指向している姿勢が窺われる。しかしながら、③⑥などは見掛け上漢詩文風であるが、漢字で表記された物の名前を羅列しているに過ぎない。因みに、『宗因七百韻』では漢字のみで書かれる句は存在しないが、仮名のみで一句を構成するのは三句あり、『七百五十韻』では一句全体が仮名書きされるのは二例ある。また、送り仮名・助詞を右寄りに片仮名小字で記す用法は、例えば「借^シ (四例)・借^ス・借^ル・世^ヨ・中^{ナカ}・聞^キて・偽^{イツ}・鳴^ネ」など、三六句に用例が見える。その中で送り仮名が最も多く付されている漢字は「借^シ」であり、「借^ル」「四例」「借^ス」「一例」「借^ル」一例が見え、「借^シ」は「かす」と「かる」の両者に使われていたために、その読み分けを指示していると捉えられる。このような表記形態は、一六四八年刊の『正章千句』、一六五五年刊の『紅梅千句』、刊行年は不明であるが一六七五年著の『花千句』^(下)には現れない。本稿での調査資料である一〇俳諧集中、『正章千句』『紅梅千句』を除いた一六七七年刊『宗因七百韻』から一六八一年刊の『七百五十韻』まで、七種の俳諧集には送り仮名・捨て仮名を片仮名小字で右寄りに記す用法が見える。

また、「おす多^{オス}人^{ヒト}」など「人」に三回、それ以外では「女草^{メクサ}」など合せて八語の漢字に濁点が付され、これもヨミを助ける振り仮名に類似した機能である。この現象は、『宗因七百韻』では借音仮名以外に、三五五番の「木戸^{キド}」に濁点が付されるのが一例だけ登場する。

さらに「いそじ」に「五十・五十年」の二種、「びろうど」に「天鵝毛・天鵝絨・天鵝」の三種による変字法と思える漢字の用法が見え、『七百五十韻』では『宗因七百韻』に比べると、様々な要素を含む表記形態の様相を呈している。

本節では『宗因七百韻』と『七百五十韻』の二つの近世初期の俳諧集を取り上げ、振り仮名の機能や表記形態の特色について述べてきた。

『宗因七百韻』は談林初期の作品である。振り仮名を付す二〇四語中同書にだけ見える語には七九語があり、約三八・七％を占める。使用される漢字には、偏が省画される「轉り」のような漢字は出現するけれども、どこにも見えない『七百五十韻』のような特異な漢字を使用することはない。

それに比べ、談林末期の『七百五十韻』では、振り仮名を付す漢字表記語六一一語の中で三四二語が一〇俳諧集中同書のみ使用される漢字表記語であり約五六％を占める。振り仮名を付す語を見ると、和訓に対して、口常的に定着していない漢字に振り仮名を付す傾向があること、既出例よりも早い「時計」の漢字の使用がみえることなどの特徴が窺える。また、節用集に収録がなく、未だ用例を探し得ない特異な漢字には、有意的に非口常的な漢字で書記しようとする、書き手の意思表示が見え、視覚的印象性を求めようとする漢字の用法の一面を窺う事が出来る。『七百五十韻』の振り仮名付記率は一〇俳諧集中最も高く、編者である信徳は「談林からの転向気運を作り出す一方の中心となり、新風展開のために積極的な活動を『し』と『俳諧大辞典』(二九四頁)に見え、『七百五十韻』は談林調から蕉風への過渡的様相をあらわし、俳諧史的価値は大きいとされる。清書した人や書肆は不明であるが、板下の筆者は一座の一員ではないかと想定する。

注

1、『七百五十韻』評釈―第一、江戸桜の巻―(近世文芸 研究と評論 第一号第二号 昭和四六・四七年 早大文学部 暉峻研究室)

2、『浮世鏡』(『片言 物類稱呼 浪花開書 丹波通辞』昭和六年 日本古典全集刊行会)

新村出の解題には「『片言』刊行後数十年経ってから出版されたもので、序言によって貞室の片言の補遺とし

て出来たことが明かである。」ということなどが述べられている。

3、『かたこと』安原正章著 一六五〇年刊(『国語学大系九卷 方言』昭和五六年 国書刊行会)
4、文字の使用数は捨て仮名・振り仮名・詞書を除き、句にのみ使用される数を示す。
5、一〇〇番に「めてたく頓而出る僧ワキ」と本行に片仮名が用いられる例が見える。

6、『統無名抄』岡西惟中著 延宝八年(近世文学資料類従 古俳諧編47 昭和五十一年 勉誠社)

7、『同文通考』新井白石 宝永二年頃成立 白石没後の宝暦一〇年新井白蛾により補校版行(『語源辞典 東雅』昭和五八年復刻版 名著普及会)

集古録アママリテ八分ノ書ヲ以テ隸書トハナセルナリトミエタリ(略)張邦基ガ説ニモ近世ノ人ミダリ
ニ八分ノ書ヲ以テ隸書トス隸書ハスナハチ今ノ正書ナルコトヲシラズト章子厚ノイヒシヨシミアタリ
(〇隸書 四二〇頁)

8、『浮世物語』浅井了意(前山金五郎校注『仮名草子集』日本古典文学大系 十一行本 昭和五〇年九刷 岩波書店)

9、『好色一代男』(大坂版)天和二年(近世文学資料類従 西鶴編1 昭和五六年 勉誠社)

10、『日本永代蔵』貞享五年(近世文学資料類従 西鶴編9 昭和五十一年 勉誠社)

11、『連歌俳諧集』暉峻康隆注解(日本古典文学全集 昭和四九年 小学館)

12、田島優『近代漢字表記語の研究』「とけい」の漢字表記をめぐって(一九九八年 和泉書院)

13、『西鶴大尺数』延宝九年(近世文学資料類従 古俳諧編31 昭和五〇年 勉誠社)

14、『花千句』は『貞門俳書集一』(天理図書館綿屋文庫 俳書集成 第十五卷 平成八年 八木書店)所収による。一六七五年北村季吟・湖春・正立父子著で刊行年は不明。

15、但し、『紅梅千句』では「ふためきてときにし帯を忘れ置_ま 季吟」(七五七)と右傍に送り仮名「キ」を記す

例が一例見える。『正章千句』では「無跡に一キの位てんぜられ」（四二七）と「キ」が右寄りに記される例があるが、「一キ」は二字で「一級」を表す自立語である。

結 語

第一章では漢字に関する問題として、振り仮名の機能を中心に検討を重ねてきた。振り仮名では、難読字は勿論のこと、当時通用する漢字に比べ非日常的な使用頻度が低い漢字に振り仮名が付される傾向があること、意味を弁別する機能が振り仮名にあること、音読み語と訓読み語では前者の方に振り仮名を付す割合が高いことなど、振り仮名には様々な機能があることを提示できたと考えている。しかし、同じ漢字表記語で振り仮名を付す場合と付さない場合がある語では、振り仮名を付す根拠を明らかにすることが出来ない語があり、引き続き検討を必要とする。

第一節では『紅梅千句』の漢字表記の問題の中で、主として、漢字と振り仮名の関係についての考察を試みた。音読みと訓読みの調査の結果では訓読み語が多用されているのにも拘らず、音読み語に比べて訓読み語に対する振り仮名の割合が低いことが認められた。この現象は、文芸作品に於いて出現頻度が高く、読み方が平易な漢字が多く含まれるからである。また、振り仮名を付す漢字表記の語と、『はなひ草』『俳諧御傘』『俳諧類船集』との関連、併せて、文頭・付合・字音語・『節用集』における収載の有無の条件を設定し、該当するかしないかの調査を試みた。その結果、総括して各条件との適応率は高いけれども、反対に振り仮名を付す語の中には、同じ語で振り仮名を付さない場合の方が、多くの条件に当てはまる事例が見られ、振り仮名を付す・付さないの差異を明らかにすることができないままである。振り仮名の機能の一つには、序章で述べた難読字・意

味を弁別するため・二重表現の効果をねらう・語形を示すなどの振り仮名以外に、一句に於いて、強調したい重要な語の存在があり、文学的意義の観点から、注意を引くための振り仮名があると想定した。

第二節では一〇俳諧集の中で漢字使用率が最多の『軒端の独活』と振り仮名付記率が最も低い『江戸宮筋』の二つの作品集を中心にして、それぞれの表記の特徴や振り仮名の実態を考察してきた。前者では表記法において様々な形式が見え、片仮名の使用場面、送り仮名を片仮名小字で書記する様式などを提示した。後者の『江戸宮筋』では多用される同じ易しい漢字でも、職能により振り仮名が付されることがあることを明らかにした。

第三節では一節の『紅梅千句』と清書者が同じ『正章千句』における振り仮名の考察を行った。両者には振り仮名付記率に大きな違いがあり、出版された目的の違いがあると推察する。

漢字と振り仮名の関係では音読み・訓読みのどちらに振り仮名が付される傾向にあるか、一節の『紅梅千句』と同様に調査をしたところ、ここでもやはり音読みの方に振り仮名が付される割合が高いことが明らかになった。また、「色」を「ユロ」と読むように、表記と発音にずれがある場合にも振り仮名が付されること、「夏」や「文」のように複数のヨミがある場合に、「夏」は「ナツ」、「文」は「フミ」が多用される中で、前者は「ゲ」、後者は「ブン」と読み、意味の弁別に重要な役目をはたす振り仮名があることを明らかにした。第四節では談林初期の『宗因七百韻』と談林末期の『七百五十韻』を取り上げた。前者はいくつかの作品をまとめた俳諧集であり、各作品により振り仮名の仮名遣、熟漢字のヨミの違いなどがあり、それぞれの清書の違いが窺えた。

『七百五十韻』では一〇俳諧集中『七百五十韻』のみに出現する漢字が多くを占め、振り仮名を付す漢字表記語の中には、偏の増画の漢字や節用集に見えない漢字がいくつか見える。それらは新しきを出すための工夫を凝らした漢字の用法であり、振り仮名を付さなければ読むことができない。このようなヨミを助ける

ための振り仮名、また意味を弁別するための振り仮名などの機能と同時に、振り仮名に類似する漢字に濁点を付す、あるいは送り仮名を片仮名小字で書記する方法など多種の表記形式があることを明らかにした。

以上本章では、俳諧における振り仮名使用の様相、及び表記形態の様相を述べてきた。最も振り仮名付記率の高い『七百五十韻』の編者は信徳であり、芭蕉と投合する所があつて、俳諧史の上で後の蕉風へと転向して行く重要な位置にある。同書は特徴の一つとして、奇警な漢字を使用する例があり、それが振り仮名付記率の高さに結びついている。一方、二番目に振り仮名付記率の高い一節の『紅梅千句』は、貞門の代表的連句作品である。貞徳は俳諧において当代の中心的人物であつたことから、俳諧を学ぶ人たちにとって同書は教科書的な要素を持つことが、振り仮名を付す割合が高いことに繋がっていると考えられる。同書もまた、上述の『七百五十韻』と同様に俳諧史上見のがすことはできない作品集である。

以上のような調査を通して、一つには俳諧では様々な振り仮名の機能があること、二つには漢字の用法の中には、ありきたりの漢字を用いるのではなく、音が共通する変え字、あるいは意味を考えての造字、あるいは既存の漢字の特殊なヨミ、同時に既存の漢字の組み合わせによる特殊な熟字などが特徴として認められた。

第二章 近世初期俳諧の用字考証

導言

前章では、漢字と振り仮名の関係において、振り仮名の機能・表記形式など、書かれたものに認められる諸現象の検討を重ねてきた。対象資料とする一〇俳諧集には振り仮名が散見し、振り仮名に関しては、同語で振り仮名を付す付さないの問題があるなど様々な問題が内蔵されているからである。

本章では、用いられている特殊な文字と、中国の字義に対応しない訓が見えることなどについて検討していきたい。例えば、前者では使用される漢字が一般的ではない、漢語の一字を置き換える当て字的用法に焦点を当て、後者では漢字とヨミとの関係で、常用されない特徴あるヨミが与えられる漢字について述べていく。

第一節では「やさし」に「婀娜・艶」を当てるのは、一〇俳諧集中『江戸八百韻』のみであることから、「婀娜」と「艶」はどのような場面を表現しようとしているのか、「婀娜」と「艶」には使い分けがあるのか、文脈での用法を考察し、この二語を用いる意図を考える。

第二節では『當流籠拔』において、「悶る」を「いきる」と読むことについて、「悶る」を「イキ(る)」と読むのは見かけない川法であり、辞書や用例を通して「イキ(る)」と読める道筋を明らかにする。そして、そこには、どのような振り仮名の機能があるのか、検討していくことにする。

第三節では「あつかひ」に「哆」の漢字を当てることについて、このように「アツカヒ」に「哆」を対応させるのは、当時通用していたのか、「哆」を「アツカヒ」と読めるのか、前節と同様に辞書類を参照しながら、用例を見出すことに努め問題を解決していきたい。

第四節では、一つは「いつぞや」に「口外」、「たなばた」に「織姫」のようなヨミと漢字の関係を検討する。今一つには「明星」に「明上」、「正体」に「性躰」、「丈夫」に「上夫」のように熟語の漢字列の一字を置き換える用法、または、「石の帯」に「胃糸の帯」を当てるような、意図的な借字の用法について分析を加えていく。以上のように、本章では、付された振り仮名と漢字の関係について、何故そのように読めるのか、意図するのは何であるかなどを明らかにしていくことを目的とするものである。

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法

―『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について―

はじめに

漢字の持つ義が、中国本来の義から離れ、日本で特殊な用い方をした漢字がある。本節では、漢字に付される特殊な振り仮名の一つとして、『江戸八百韻』の集中

相宿り天狗も婀娜アノナ郭公 青雲 (二〇一)

半分見えし姿艶アノナしき 来雪 (四四)

と詠まれる句の中に、「ヤサシ」に対して「婀娜」「艶しき」の漢字表記が見えることに着目して、考察を試みていきたい。両者は一〇俳諧集中『江戸八百韻』にのみ見える漢字表記語であり、「ヤサシ」に対して常用されていたとは考えられないこと、また「ヤサシ」に対して、この二種の漢字を用いることは、そこに何らかの表現意図を伝えようとしているのではないかと考えられるからである。

資料には天理図書館綿屋文庫蔵本の『江戸八百韻』(『天理図書館蔵俳書集成 第六卷『談林俳書集一』所収)を使用した。同書の解説によると『江戸八百韻』は延宝六年(1678)刊の幽山・安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳等八名が興行した百韻八巻を収めるものであり、幽山等著、幽山・言水共編、寺田重徳刊の作品集である。参照する『節川集』には、古本節川集六種・合類節川集・書言字考節川集に、適宜その他の古辞書をも使用する。また、本文中の傍線は稿者が付記したものである。

一 「婀娜」について

まず初めに当該集において、

ア、相宿り天狗も婀娜アノナ郭公 青雲(二〇一) 鬼心せよ五月雨の闇 来雪(二〇二)

と「婀娜」を「ヤサシ」と読むことについて検討していくことにする。古辞書類で「婀娜」を見ると、

『易林本節川集』―「ヤサシ・ナマメク・アダ・アナ」

『合類節川集』『書言字考節川集』―「ナマメイテ(ナマメク)・タラヤカ」

と訓が付され、『色葉字類抄』では「たをやか」と読む。また『倭玉篇』(慶長十五年版)には「婀娜アノナ タラヤカ」
「娜ナ ナマメク/タラヤカ/シナヤグ」の和訓が記される。それならば、実際にどのような場面に使用されているか、その実態を提示してみたい。

『江戸初期遊仙窟』に

「婀娜アノナ腰ウシ・支シ」―左傍訓「タラヤカナルコシハセ」

「婀娜アノナ菴アノナ・茸アノナ」―「娜」の左傍訓「トナマメキ」

「茸」の左傍訓「トサカリニシテ」

「華・容婀娜」——「容婀娜」の左傍訓「カタチタヲヤカニシテ」
「婀娜徐行」——「婀娜」の左傍訓「ナマメイテ」

とある。『玉造小野小町壮衰書』には、『遊仙窟』と同じ「婀娜腰・支」が見え、

婀娜腰・支 誤ニ楊柳、之乱ニ春風

と「婀娜」の左傍には「タヲヤカナル」、「腰支」の左傍には「コシハセ」と訓を付し「アタトタヲヤカナルヨウシノコシハセハ」と文選読みをする。この『玉造小野小町壮衰書』を典拠として、謡曲「卒都婆小町」に「ひすいのかんざしはあだとたをやかにしてやうりうのかぜになびくがごとし」という一文があり、さらに、「卒都婆小町」を典拠とする作品には、俳論書『評判之返答』や仮名草子『恨の介』がある。これらの文選読みの文例における和訓は、「ナマメク」或は「タヲヤカ」と記され、何れも「ヤサシ」ではない。『鶉衣』（寿光先生伝）には「げに先生や婀娜たる美少年なりし」とあり、これもヨミは「アダ」であって「ヤサシ」ではない。以上の用例で取り上げた「婀娜」は、美しい人を形容する語として使用されている。西鶴の浮世草子では、「やさし」と振り仮名が付される例が見えるので、列挙してみたい。

◇『男色大鑑』には

① わつかのうちに恋路はやるせなきに此事しらせてよと仰せけるは婀娜御心入と水桶捨て立出 (巻一・四)

② されども戀よりの患事なれば此上ながら御前世問をつつむと咄せば婀娜心入感して自然と沙汰して若道の随

一と申も戀なり

(巻一・五)

③ 年長たる女房の姿婀娜しかも面子のなるが鍋ひとつかざして是をさへ恥るも有に

*「」はママ

(巻二・一)

④ ひだり手に山吹の婀娜花をかざして静に豊なるを人間とは思はれず (巻三・五)

⑤ 思はずも悄然しに戀君も心にかゝり初しや千嬌ある御顔ばせにて婀娜も見かへし給へり (巻三・五)

とあり、「婀娜」は①②では「優しいお心遣い」と心づかいの細やかさ、③ではしなやかで美しい姿、④⑤では仕種の優美さを描写する場面に「婀娜」が用いられる。

◇『好色一代女』(巻三・二)では

⑥ 形を生移しなる女人形取出されけるにいづれの丁か作りなせる姿の婀娜も面影美花を欺き見しうちに女さへ是に奪れける

とあり、この場面では「婀娜」は姿の美しさを表し、『男色大鑑』③と同じ用法である。以上の用例から、顔かたち的美しさに対しては、③では「面子のなる」、⑤では「千嬌ある」、⑥では「美花を欺き」と「婀娜」では表現されず、別の言葉を用いる。このように①から⑥までの「婀娜」は、姿や態度の優美さ、或は対人態度や内面的な美の表現に用いられ、顔かたちの美しさには用いられない。

当該集アの句は「天狗がやさしい」ということが、この句のポイントであり、相宿りした郭公の鳴き声を聞いて天狗もやさしくなると、想像と実際のギャップの面白さを詠む。その意外性を表現するのが「婀娜」の漢字である。

二 「艶しき」について

前節の「婀娜」に続いて、もう一つの用字「艶」を「ヤサ(し)」と読むことについて考察していきたい。

イ、都也と有所の竹格子 安昌 (四三) 半分見えし姿艶しき 来雪 (四四)

と詠まれ、イの句の「艶しき」は、竹格子の間から半分見えた姿が、なまめかしく美しいと表現するための文字遣いである。「艶し」は、類聚名義抄・温故知新書・運歩色葉集・文明本節用集・伊京集・黒本本節用集・易林本節用集・書言字考節用集・和漢通用集・俳字節用集などに収録がある。「ヤサシ」以外の「艶」に対するヨミでは

『類聚名義抄』―「ウルハシ・ナマメイタリ・ナヨ、カナリ」

『易林本節用集』『書言字考節用集』―「ウルハシ」

などの訓が付される。

『倭玉篇』（慶長十五年版）では、「艶」に「ウルワシ・カヲヨシ・ハナヤカナリ・ミヤビヤカ」とあり、「ヤサシ」は見えない。同書での「やさし」に対応する漢字は「女十罌」であり、下に付された和訓は「ナマメイタリ・ヤスシ・アハス・ヤサシ」と記される。『倭玉篇夢梅本』では「ヤサシ」に「斉」、『篇目次第』では「公」とあり、節用集では、漢字「婀娜」「艶」以外には「優・有情・優美・迷美・幽美・詭・嬌・尋常」などの収録がある。「艶」を「ヤサシ」と読む用例を前掲の「婀娜」と同様、西鶴の浮世草子から取り上げてみると

◇『好色一代男』

⑦顔うるはしく生れつき艶しきをちいさき時より是に仕入てとりなり男のごとし（巻四・五）

◇『武道伝来記』

⑧尋常佛の艶きに付てもありし世を思ひくらべて母のなげき大かたならず（巻六・四）

と⑦⑧では、姿・容貌が美しい女性を描く場面に用例が見える。

◇『本朝二十不孝』

⑨みづから賤しき形ながらそれその勤もあれば傾城屋に身を売事はといふにそ心ざし艶しく（巻一・二）

⑩人の心のおそろしきに艶しき狼を恐れる（巻四・二）

⑪此里艶くも是をいたはり色々此子の人なる事を申ぬ（巻四・二）

⑫掛乞宵よりの事とも段々見て袖をしたしかかる艶しき女の有べきか（巻五・一）

とあり、⑨から⑫では、「婀娜」の用例①②と同じく心づかいの細やかさが描かれている。

西鶴の作品中、『男色大鑑』『好色一代女』では「やさし」の表記に「婀娜」を使い、『本朝二十不孝』『好色一

代男』『武道伝来記』では「艶」を用いるというように、同じ作者でありながら作品による用字差が見え、「やさし」の表記に、同じ作品中では「婀娜」と「艶」を混用することはない。この事象は、杉本つとむ氏が『西鶴語彙管見』で述べているように、一つには、西鶴自身が意図的に使い分けしていると考えられるが、それ以外に、作品による板下の筆者の違いなど、出版事情の関係も考える必要があるだろう。

一二〇〇年初めの歌論書では、『無名抄』に「艶にやさしく」「えんにやさしく」とあり、『後鳥羽院御口伝』には「やさしく艶なるあり」「やさしく艶に」「艶にやさしき」など「艶」は「やさし」とともに使われる。『角川古語大辞典』の「やさし」の項には、「特に中世和歌文学の世界において、艶（ん）（や優（い））同類の美的価値」とあり、歌論用語から「艶」に「やさし」の訓が施されるようになったと推察できる。

◇近世の俳文学作品での用例

⑬田地塞き吾妻も艶し花統 調管子 『誹諧坂東太郎』（九三）

と「艶し」が見え、校注者は「艶し」に「なまめか（し）」と振り仮名を付すが、「なまめかし」では字余りである。ここは「やさし」と読むのが順当だろう。また

⑭衣賦り艶しや遠きいとこ近 ひさ女 『俳諧難波曲』

⑮艶しさを後朝梅のおぼろく 素龍 『蕉門名家句集』

などに「艶し」が見え、この二句には校注者は「やさ（し）」と振り仮名を付す。⑬の花統は大唐米に似ていることから、田と花統は縁語であり、吾妻には吾妻琴と妻が掛けられ、貧しいながらも、狭い田地に花統が咲き乱れ、妻が奏でる吾妻琴のやさしい音が聞えてくると情趣ある光景を詠む。⑭ではいとこにまで衣服を与える心配りのやさしさを詠み、⑮では別れの朝の美しい姿に、梅がぼんやりかすんで見えると詠む。

⑯此句行脚轍士ニ対スル送別ノ吟ナリ。コレニ轍士ハ

ひかれぬ足に濁す夏川

・伊京集・優劣（左傍訓マサル ヲトル）
・天正十八年本・優（形一）
・易林本・艶優／勝優／優／優（左訓イウ）
・合類節用集・優（左訓ユウ）へ又有情○幽美○迷美 並同）
右のように「ヤサシ」は『易林本節用集』と『合類節用集』に見え、それ以前の古辞書では「マサル・ユタカ」などが和訓として記される。

○優美―上手ほど名も優美也すまひ取

『蕉門名家句集』其角（五九七）
『俳諧句選』（一三三）

など芭蕉以降の俳諧に見えるが、「優」と同じく形容動詞であり、音読みである。

○有情―有情かとみれば蜜はひ情かな

『崑山集』（三三二五）

と、「ひ情」の対語として用いられ、中興の俳諧集にも「有情」が出現するが、「ヤサシ」のヨミではない。

○尋常―『継尾集』には「皇后 尋常御肌にいだかせ給ふ干満の二珠によそへ」とあるが、「じんじょう」或は「よ

のつね」と読むか、それとも「やさしく」と読むかは明らかではない。

○幽美―『源氏鬢鏡』の序文に「言葉幽美にして」とあり、音読みであると判断できる。

○謙―次のように、たしなみが備わる様子を「謙く（やさしく）」と表現し、腕白者も髪置の儀式を行う年齢になると、おとなしくなると詠む。

⑱ わやく者も髪置といへば謙く成ぬ

『洛陽集』（一〇二一）

以上、節用集で「やさし」に当てる漢字を『古典俳文学大系』で調査した結果では、「迷美・嬌」の例は見られず、これらの漢字以外に、節用集では「やさし」として収録されていないが、『滑稽太平記』（巻三 新光寺の事）

に次のような例がある。

○甘身き

⑲ 近比、和歌の道甘身き物を、下劣に云下す事、沙門の身にて尾籠千万ならずやと、世人評しけり。

右の「甘身き」の注には、乾裕幸氏の「ヤサシ」のヨミとした経緯が記されている。「和歌の道」との関連からも、ヨミは「ヤサシ」であると認めることができる。

もう一つには、時代が下るが蕪村の発句集の句（明和八年以前）に「しぐるゝや嵐のわたる琴の上」の詞書に「賀越の際、婦人の俳諧に名あるもの多し。姿嫩く情の痴なるは女の句なれば也。」とあり、校注者は「嫩く」に「やさし（く）」と振り仮名を付す。しかしながら、「養虫説」（文章編 短編類四 明和八年）に同じ文の掲載があり、「姿嫩く」が「姿弱く」と「嫩」が「弱」に書き換えられている。一七二三年刊の『海音集』（海下一〇四九）には「嫩い思案はむらさきて書 青輔」とあり、「嫩い」に「ワカ（い）」と振り仮名が付されているのが見える。また「嫩」は辞書類においては、『倭玉篇』（慶長十五年版）・『節用集』（易林本・天正十八年本・明応五年本・黒木本・合類・書言字考）で「ワカシ」とあり、『合類節用集』『書言字考節用集』の「嫩」の下には（弱也／少也）と注記がある。これらのことから「嫩く」は「わか（く）」と読むと推測する。

以上のように、「婀娜・艶」以外の「やさし」を表す漢字について考察を重ねてきた。『古典俳文学大系CD・ROM』で「やさし」の表記を一覧してみると、仮名書きが句のみでは約一―三例、漢字表記が一例（句以外の⑲は除く）、この内、近世初期の『貞門俳諧集』（一）（二）『談林俳諧集』（一）（二）』だけを見ると、句のみの仮名表記が二六例に対して漢字表記は⑱の一例である。『古典俳文学大系』に所収されていない『江戸八百韻』を含めても、漢字表記は三例しかない。西鶴の前掲の五作品中では仮名表記が三九例、漢字表記が一二例と、何れも仮名表記が圧倒的に多い。

四 仮名書き「やさし」の用法

当該集では前掲のア・イの句以外には、用語「やさし」は、漢字の異表記や仮名表記でも出現する事がない。他の俳諧集での仮名書き「やさし」の用例では

⑳ 花ずきをするかやさしき心ばせ

『正章千句』(一〇九九)

㉑ 農人もするかやさしき方違へ

可頼

『紅梅千句』(八九七)

㉒ 糸ゆふといへばやさしき歌の道

『貞徳誹諧記』(卷之上)

㉓ やさしくも草花売て帰るらん

『新增大筑波集』(秋)

などがある。㉔の「やさしき」は、情趣を解するやさしい心を表現する。㉕の句は、前句に節分が詠まれ、飯田正一氏(『貞徳紅梅千句』桜楓社)は、「節分には、農民もするのだろうか、床しい方違えの習慣を」と解釈を施し、優雅な様相を「やさし」で表現したと捉える。㉖では幽玄・優美のような美の理念の表現に用い、㉗では控えめな様子を「やさし」で表している。近世初期の句のみの仮名表記二六例中、花鳥月と共に詠まれるのが八例、心と併用されるのが三例、和歌をやさしと詠む例が二例あり、人の姿のたおやかさ・あでやかさをやさしと表現する例は見出し得ない。

上述の「婀娜」と「艶し」の用例を引用した西鶴の浮世草子五作品において、「やさし」に対応する他の表記について調査してみると、漢字での異表記は出現せず、平仮名で表記される。そこで、「婀娜・艶し」と仮名書き「やさし」の表現する場面では、語としての使い分けがあるのか、五作品での「やさし」を文脈上の意味を通して考えてみる事にする。

「婀娜」を使用する『男色大鑑』では、「やさし」と仮名表記されるのが一七例見え、『好色一代女』では六例見える。「艶」を使用する『本朝二十不孝』では二例、『好色一代男』では八例、『武道伝来記』では六例出現する。

それらには次のような場面が表出されている。

1、心づかいのこまやかさ・対人態度において思いやりのある様を表す。(一五例)

2、美しい姿(優美、なまめかしさ、色っぽさを含む)を表す。(一二例)

3、風雅な趣がある様・言語や動作が優美である様を表す。(八例)

4、しおらしい情景を表す。(二例)

5、雨が降る情景(弱い様)を描写する。(一例)

右の五つの分類の中で、1に該当する「やさしき心ざしふかし」(『男色大鑑』卷五・一)などは、漢字の用例①②の「婀娜心入」と同様に心づかいの細やかさを表現するが、必ずしも漢字「婀娜」で表記されるわけではない。

4「しおらしい」に属する「薄縁敷きし奥の間に、やさしくも屏風引廻してありける」(『好色一代男』卷三の五)や「人の目をしのぶこころもやさし」(『好色一代男』卷三の六)の、控えめでしおらしい情景を描く場面、また、5の「雨が降る情景」に属する「雨はやさしく風はあられなく」(『男色大鑑』卷三の一)のように、雨の降る様が「さほどではない」と表現する場面では、「婀娜」「艶」は情景描写に適さないだろう。

以上が「婀娜」及び「艶し」の用語が見える作品での、仮名書き「やさし」の出現状況である。このように見ると、仮名書き「やさし」は、漢字「婀娜・艶」では表現できない幅広い場面に登場する。漢字で表記された場面では、漢字本来が持つ意義と、振り仮名「ヤサシ」を合わせて、同じ美しさの中でも、なまめかしさ・しなやかさなど、視覚的にその用語の環境を想定する事が出来る。前掲の『西鶴語彙管見』によると、『好色一代女』の「冒頭の構想は『遊仙窟』によるといわれる」(二六〇頁)とあり、『好色一代女』(卷一の一)や『男色大鑑』では「婀娜」以外にも、「調謔・面子・靨粧・透進」などが見え、『遊仙窟』に範を仰いでいる事が認められる。杉本つとむ氏は、また同書で

西鶴の場合は愛読書というか、ある特定のものによつたらしいことは推測される。しかしまた（婀娜）も上掲の辞書では（ナメク・ヤサシ）であり、慶安版の『遊仙窟』ではタヲヤカであつて、むしろ西鶴が特定のものに求めたというよりも、当時の用字として文章語（中国小説など、この種漢文訓読的なもの）から取り出したものである。（一六〇頁）

と述べ、続いて『節用集』などに見られる点から、日常的な語彙と考えるのはむしろ本末転倒である。『節用集』の語彙の性格は今後究明されるべきである（一六一頁）と説明が加えられている。節用集に関しては、安田章氏が『中世辞書論考』の中で、「節用集は和漢聯句のための用語辞典であると臆断する」、または「室町時代に成立の辞書は概ね韻事を目指したものであつた」と述べられていることに注意したい。

当該集で「婀娜」に「やさし」の訓が与えられるのは、西鶴の作品よりも早く、俳文学作品で「艶」を「やさし」と読むのも、当該集より後に用例が見え、当時の新しい表現として両者を取り入れていることは、俳諧における用字の観点から注目すべきだろう。

おわりに

当該集には、一つの和語に対して複数の表記がある語に三語があり、俳諧の表記の多様さを示していることに視点を置いて、「婀娜」「艶しき」について検討してきた。その結果次のようなことが明らかになった。

一、西鶴の浮世草子では、「婀娜」「艶し」の用字は、作品による両者の使い分けが看取でき、「婀娜」には「艶」のように、顔の美しさや和歌の美を表現する場面には例が見えない。

二、『江戸八百韻』の「婀娜」は、「天狗」と対立的な語「婀娜」を取り合わせる事により、意外にも天狗がほととぎすの声を聞くとやさしくなると句の面白さを効果的に表現する。「艶」は竹格子の間から見えた美しい女

性の姿を表現し、両者は表現性を重視した漢字の用法である。

三、「婀娜」を「ヤサシ」と読むのは、現段階では、『易林本節用集』と西鶴の浮世草子以外では用例を見出すことが出来ず、また「艶し」も「やさし」に対して頻出する漢字ではない。これらは当時の「やさし」の和訓に対して、一般的に常用されていたとは考えられない。

四、俳諧及び西鶴の浮世草子での「やさし」の表記には、漢字よりも仮名で表記される方が多い。

五、「婀娜」「艶し」は、節用集に「やさし」に対応する漢字として収録があることから、幽山等の文字意識は、節用集の教養の世界と共通していると言える。

俳諧に新鮮味のある用字で書き表そうとする傾向があることについては、第一章第四節で『七百五十韻』において、既出の用例よりも早い「時計」を初めとして、辞書にも収録がなく、且つ用例も見出せない漢字表記語がいくつかあることを述べた。「婀娜」を「ヤサシ」と読むことにおいても、現段階では『江戸八百韻』より早い例を探し出す事ができず、著者高野幽山等の創意工夫を凝らした漢字の用法が窺える。

注

1、「婀娜」の「」は『大漢和辞典』に、「或は婀娜に作る」と記されているので、本節では「婀娜」を用いる。
2、『江戸八百韻』には同じ語に対して複数表記される語が次のように三語ある。

（○の中の数字は二回以上の出現回数を示す）

・一方は漢字二字での表記、一方は漢字一字のうち一字を仮名表記する複数表記（異なり語数一一）

朝かすみ／朝霞　大かた／大方　こと葉／言の葉　住よし／住吉　立わかれ／立別れ

取たて②／取立　野へ③／野邊　松むし／松虫　タぐれ／夕暮⑤　ゆく衛／行衛②

よし野／古野

・使用漢字が異なる複数表記（異なり語数 二〇）

明ほの②／曙② うき世／浮世／憂世 大觥／大盃 面影／佛 親仁・親仁／親父 兒／顔
 着更衣／衣更着② 駕／駕籠 皮／革 葎／葎 前／先⑥ 既に／已に 蕙／蕙②
 啼④ ①／鳴たる② 乗物／駕 一人／独り 郭公②／時鳥 村柅／村紅葉 婀娜／艶しき
 棟棠／山茨

3、日本古典文学大系（『謡曲集上』昭和三五年 岩波書店）所収の「卒都婆小町」の頭注には、「壮哀書に「婀娜腰支誤ニ楊柳之乱ニ春風」とある腰つきの形容を、髪形容に転用した。」とある。

4、『西鶴語彙管見』（杉本つとむ著 昭和五七年 ひたく書房）には、次のように述べられている。

一つのコトバがいろいろに表記されていることである。たとえば、ササヤクはつぎのように見られる。（略）これに、かな表記を加えれば十一種類となる。これは一人の使い分けか。このうち真性の西鶴のそれはどれなのか。（略）一個人の幅として、十種はユレがありすぎる。だからこそ板下も数人というか、いろいろの人物を仮定することになるのである。（略）板下の複数、さらには西鶴作か否かの作品論へも発展するのではないかと思っている。（一九四頁から一九五頁）

5、「吉田肥前カラ／＼ト笑テ、哀廿身ヤ、敵ノ種ヲバ此ニテ尽サスベシ」とあり、『太平記鈔音義』『和漢合類節用集』『反故集』等に、アサマシと付訓する。しかし、本書に出る用例はすべて意味上ヤサシと訓むべきであり、なかならず巻七「高島及加撰集の事」の「老後の思ひ出、是に過じ、御免あれと望しかば、あゝら廿身やとて、皆感涙をぞ流しける」が、謡曲「実盛」「あらやさしやとて皆感涙をぞ流しける……老後の思出これに過ぎじ御免あれと望みしかば」を踏むものであることから、ヤサシに決定すべきである。なお本書の作者は、アサマシには浅間しの漢字を当てている（巻四「雛屋立圃手柄の事」等）。『滑稽太平記』（注 六五五頁）

6、『中世辞書論考』安田章著 昭和五八年 清文堂（五から六頁参照）

参考文献

- * 『鶉衣』『源氏鬘鏡』『滑稽太平記』『崑山集』『蕉門昔語』『蕉門名家句集』『新增大筑波集』『継尾集』『貞徳詠諧記』『誹諧句選』『誹諧坂東太郎』『俳諧塵塚』『俳諧難波曲』『評判之返答』『蕪村発句集』『洛陽集』（古典俳文学大系 昭和四五～四七年 集英社）
- * 『恨の介』（日本古典文学大系『仮名草子集』昭和五〇年九刷 岩波書店）
- * 『海音集』方設編 享保八年刊（『池西言水の研究』宇城由文著 二〇〇三年 和泉書院）
- * 『玉海集』（『近世文学資料類従』古俳諧編41 一九七五年 勉誠社）
- * 『後鳥羽院口伝』（『歌論歌学集成』第七卷 平成一八年 三弥井書店）
- * 『好色一代女』『好色一代男』『男色大鑑』『武道伝来記』『本朝二十不孝』（『新編西鶴全集』第一巻・第二巻本文篇 平成一二年一四年 勉誠社）
- * 『玉造小町子壮衰書の研究』（松平文庫本）平成三年 臨川書店
- * 『貞徳紅梅千句』飯田正一 昭和五一年 桜楓社
- * 『無刊記本 無名抄』（和泉書院影印叢刊48 第三期 昭和六〇年 和泉書院）
- * 『遊仙窟総索引』（康永二年書写）平成七年 汲古書院
- * 『遊仙窟本文と索引』蔵中進編 昭和五四年 和泉書院

第二節 『當流籠拔』における「悶る」について

近世初期俳諧集の『當流籠拔』には、次のような句が所収されている。

(本節中、句番号及び傍線は稿者が付記したものである)

鬢先に雪を残して一文字 五一 宗旦

假契買のくせ春雨悶る 五二 木兵

右の五二番の句に見える「悶る」は、近世初期の俳諧集において例を見ない用法であり、古辞書には「いきる」に対応する漢字として「悶」の漢字は収録されていない。それならば、何故「悶る」を「いきる」と読めるのか、そこに問題点が見出される。

そこで、本節では、この漢字「悶」と振り仮名の結び付きを、多角的な視点から検討し、「悶る」を「いきる」と読む道筋を説明していくと同時に、「いきる」の語の表記に「悶」を採用した意図を探っていくことにする。

『當流籠拔』について簡単に述べておくと、延宝六(1678)年に板行され、宗旦・木兵・百丸・鬼貫・鉄幽による五吟五百韻が収められた俳諧集である。『鬼貫全集』(岡山利兵衛/昭和五三年訂版/角川書店)の解説には、「本書は伊丹風俳諧を公式にはじめて世にとり意欲的な書」とあり、一句あたりの漢字数は貞門俳諧の『正章千句』(約三・九)『紅梅千句』(約四・〇)に比べ、約五・〇と多くなり、使用延漢字数二五〇五字中三八九字に振り仮名が付されている。この振り仮名が付される漢字の一つが「悶る」である。

なお、テキストには柿衛文庫蔵本(『近世文学資料類従 古俳諧編36』所収)を使用した。

一 古辞書類における「悶」と「いきる」

最初に、古辞書類における「悶」の収載の実態を提示し、「悶」の訓について確認していきたい。(本文中「熱」の漢字に関しては、下の部首が「火」で表記されるものも「…」とする。またへゝ内は割書を示す。)

平安末期から室町時代の辞書、『色葉字類抄 二巻本』/『色葉字類抄 三巻本』(尊経閣本)・『類聚名義抄』(図書寮本/観智院本)・『字鏡集』(白河本)、及び慶長十五年版の『倭玉篇』では、「悶」に対して次のような訓が与えられる。

* 「イキトホル」―『類聚名義抄』(図書寮本)

* 「イキドラル」―『字鏡集』(白河本)・『倭玉篇』(慶長十五年版)

* 「ウレフ」「ウラム」―『色葉字類抄 二巻本』(尊経閣本)・『字鏡集』(白河本)

(『色葉字類抄 三巻本』(尊経閣本)には「悶絶」とある)

* 「モダユ」―『色葉字類抄 二巻本』/『色葉字類抄 三巻本』(尊経閣本)・『倭玉篇』(慶長十五年版)

* 「イキタエ」「マドフ」―『字鏡集』(白河本)・『類聚名義抄』(観智院本)

これを見ると、「イキル」と「イキ」を同根とする「イキタエ」「イキドラル」などの訓は、『類聚名義抄』『字鏡集』『倭玉篇』に収録されているが、「イキル」の訓は見えない。

中世末期から近世の節用集『伊京集』『明応五年本節用集』『天正十八年本節用集』『饅頭屋本節用集』『黒本本節用集』『易林本節用集』『合類節用集』『書言字考節用集』においては、共通して「悶」に「モダユ」の訓が付され、『合類節用集』『書言字考節用集』では「煩も同じ」と記される。このように、近世では、それまでの多種の訓が収束されて、「モダユ(へゝ)」のヨミが定着するようになる。

中国の辞書では

* 『大廣益會玉篇』(巻五 寛永八年)―「悶」(モシムル) 也(左訓:イキトホリ)ゝ、懣(煩也) (同上)ゝ、

「煩」(左訓:ボン)ゝ煩也(左訓:ヤク)也

・(手水鉢)の水はかはれども

五二五 素玄)

谷のながれをたつる假契り

五二六 利方 『天満千句』 (*振り仮名「ちぎり」はママ)

・(兼言に秤をかりて妹と我

八六七 夕鳥)

けちぎり狂ひ水茎の岡

八六八 素敬 『大坂檀林桜千句』

・(湖水青ふして太布の風

三二四)

金輪際より独の假契問湧出る

三二五 『投盃』

・(雲をつらぬく摺鉢の山

五二六 加藤鶴道)

さびしさまさるけち部屋の内

五二七 『雲喚集』

などと「假契」の用例が見え、假契自身や假契部屋の様相を詠むが、当該句では、前句との関係で、春雨を擬人化し、假契買を見た春雨がいきっているのであって、假契買自身の行動ではない。

さて、本題の「悶る」については、近世の俳文学作品での「悶」の用例を挙げ、使用実態を調査・検討していくことにする。

ア、茶能散^{ハ、テノクサ} 悶^{モト}といふも人事をいひ婢^{ヨメ}をそしるわざなるにや 『俳諧類船集』

と「悶」に「イキドマリ」の振り仮名が付される。「茶が心の憂さを解きほぐす」という意と解し、「悶」は心の憂さを表現している。これは平安後期の『本朝無題詩』(七六四番)に「午茶散悶功猶少 宿釀破愁醉半酣 (午茶に悶りを散かんとするも功猶少なく 宿釀に愁へを破らんとするも酔ひ半ば酣なり)」とあるのと、類似する用法と言える。

「いきどをる」について少し考えてみると、仮名書きの例では、『誹諧初学抄』に

・黎倩^{ハ、レセン} 宋ノ胡胆菴^{コタンカン}が妾也^{セウ}。こたん菴、秦檜^{シンノウ}がまつりごとの要をいきどをり侍て、秦檜をきらんと言訴状を天子へ捧奉るによりて、海南へ十年遠流せらる。

とあり、『滑稽太平記』の「池山正式の事」では、正式と重頼の採め事の場面に、そして「安原正章・松江重頼確執の事」では、正章が重頼に腹を立てる場面に、それぞれ漢字「憤り」が見える。これらはアの「悶^{モト}」とは異なり、単なる心の憂さを表現しているのではない。「いきどをり(憤り)」は心中の不満や怒りを意味する語として用いられている。

イ、喫^{スル}ストキハ茶則破^テ悶適^ト情^ニ

『まつのなみ』(序)

『淡々文集』(巻第一 第十五 寢覚)にも、これと同じ「破悶」が見え、アの用例と類似する。

ウ、知雨亭の秋日にふかく、川崎やが酒日々^ニに厚し。訪れむこといづれの口ぞ。又一飲に相笑ひて、三秋の悶^{モト}を解むのみ。 『鶉衣』(与有功子書)

以上のアからウの「悶」は、何れも「心の憂さ」を意味するものである。

エ、況^シやその上の風・流。山を見て後^{ツシ}むきに跨^カり。句を鉢^ハて手^テ悶^{モト}をなしぬ。

丈艸『本朝文選』(巻之九 詩哥誹諧弁)

この文では、手の入り乱れる動きを「悶」で表現し、アからウまでとは用法を異にする。

オ、悶^{モト}くまいと背中をたく酒のむせ

米仲『かなあぶら』(鯉鱗吟)

右のオの「悶」には、校注者により「せ(くまい)」と振り仮名が付される。「そんなに焦らなくてもいい」と解釈するのだろうか。それであるならば、この「悶く(せく)」は「悶(いきる)」に似た雰囲気を感じていると言える。「悶」を「せ(く)」と読むのも、「イキル」と同様に古辞書では見出せないヨミである。

このように、エ・オではアからウの用例とは異なり、意味範囲が広がり、「悶」は焦る情景を表現している。これら以外には『俳諧其傘』に「悶^{モト}」とあるが、「悶」を「イキル」と読む例は見出せなかった。しかしながら、ヨミには違いがあるが、用例オの「悶(せ)く」と、当該句での「悶(いきる)」の用法と類似するところがある。「悶(せ)く」も、心情が高ぶって興奮している情景が思い描かれるからである。

それでは、『俳諧其傘』や節用集でのヨミ「もだゆ」は「いきる」の意に通じるのか、次に、仮名書き「もだゆ」について考えていくことにする。

三 仮名書き「もだゆ」の用法

『俳諧類船集』では、「かく」の付合語に「蚊もだえ」の収録がある。「もだゆ」にはどのような意義が与えられているのか、『大言海』（大槻文彦著）には

(一) 思ヒワヅラフ。ワヅラヒ苦シム。

(二) 悶絶ス。ヂレル。詞ニハ出サデ、底ニハ絶エ入ラムバカリニ、イキドホル。
と記載がある。

俳文学作品での仮名書き「もだへ」の用例では、俳論書『誹諧初学抄』（第二巻 好色のおとこ）に

・待に久しく帰らざれば、もだへかねてみづから難波の浦より舟出して、「たつにあふまで」と、爰かしこを漕渡りける。

と『竹取物語』の一節を取り挙げた文で、龍の頸の玉を、早く持ち帰ってほしいと待ちわびる場面に「もだへ」を用いる。また、

・尻もかしらも叩く蚊もだへ

柴零『末岩葉』（第二）

・起兼る蟬のもだえや石の上

冬市『陸奥衛』『むつちどりニ 夏部』

や土芳著の『簞虫庵集』（一の詞書）にも「蚊もだへ」が見え、これら以外に、「羽拔鳥」（菊句『其袋』『夏之部』）、
「獅」（木導 一『蕉門名家句集』）などの、生き物が焦りもがく様子を「もだへ」と詠む。

『崑山集』には

・灰もだへするやいそげばまはり炭

良次『崑山集』（卷十三 冬部）

と、灰は生き物ではないが、早くまはり炭をと、やきもきしている情景を拡張的な用法で「もだへ」と表す。一茶の『父の終焉日記』では、四月二十五日の記事に「もだへくるしみもがき」とあり、五月十五日の記事には「一人もだゆるとも」と、病のために苦しむ父親を描写する場面に「もだゆ」が用いられる。これらの作品の中では「仮名書き「もだへ・もだゆる」は、「いきる」とは異なる用法である。

以上のように、前項では、「悶」がどのような場面で使われるかを検証した結果、「心の憂さ・思い悩む・焦る」を表す場面の表現として使用されていた。それに対して、ここでは仮名書き「もだゆ」の用法についての検討を試みた結果、「待ちわびる様」、あるいは「あがき苦しむ様」を描写する場面に用いられている。それならば、「悶」あるいは「もだゆ」と、「いきる」の用法とは相違があるのかを、次に検証していくことにする。

四 「いきる」の用例

『江戸時代語辞典』（頼原退蔵著）には「いきる【熱る】」の語釈に「熱くなる。いきまく。息を荒くして怒る。」とあり、『大言海』では次のように記されている。

いきる【熱】 「氣ヲ活用セシム、（息む、蔭る、雲る）倭訓栞、いきる「鬱蒸ノ氣ヲ、いきるト云フハ、氣ヲハタラカシタルモノナルベシ」

(一) 熱クナル。ホトボル。イキレル。

(二) 血ヲ沸シテ、息マク。カミタツ。噪氣

「いきる」の意味を確かめた所で、近世の俳文学作品には、当該集のように春雨を「いきる」と描写する例があるのか、『古典俳文学大系CD・ROM』による検索を試みた。その結果、「春雨がいきる」と詠む例は見えな

ったが、春雨と限定するのではなく、「雨がいきる」と描写する例は一例見える。因みに、一〇俳諧集中、当該集以外の「春雨」を詠む用例を挙げてみると、『正草千句』では

・(鶯の羽うかぶ谷の雪汁 八八)

魚躍る淵の春雨しよぼ降て 八九

・(すつきりと朝の原は雪消て 五七九)

宵よりつよく降りし春雨 五八〇

とあり、八九番は前句「雪汁」、五八〇番は前句「雪消えて」からの付合語として用いられ、春雨が降る状況を「しよぼ降りて」「強く降りし」と表現されるが、「いきる」とは表現されない。『宗因七百韻』では

・(うぐひすもりとなるほととぎす 一〇三 西翁)

春雨の布留の杉枝伐すかし 一〇四 西翁

・(雲雀の声もすたく口上 五三三 以仙)

半疊を打こむ斗春雨に 五三四 旨如

などと詠まれ、五三四番では、春雨が強く降る様子を「打ち込む」と表現する。

次に「いきる」の用例を挙げて行くことにするが、その中で、「雨がいきる」が

ア、五月雨や合羽の下の雨いきり 北枝 『蕉門名家句集』

と『古典俳文学大系』所収の句に見える。

右の句では、雨が勢いよく降る状況を「雨いきり」と表現される。しかし、合羽の下で雨が悶えるような様は表出されていない。その点で、漢字「悶」と振り仮名「イキル」で表す、当該集の「いきる」とに差異が見られる。雨のほかには、どのような場面で「いきる」が使用されているのか、いずれも仮名表記ではあるが、次に用例を列挙して「いきる」の用法を検証して行くことにする。

イ、ばか踊歌やいきとしいきりもの 池島成之 『時勢粧』(追加秋部)

右の『時勢粧』は寛文年間の作品集であり、当該句よりも前に「いきる」が見える。

ウ、だかれてもおのこどいきる花見哉 斜嶺 『炭依』(春之部発句 花)

エ、いきりし駒に鞍を置かね 望翠 『芭蕉集』(連句編 松茸や)

オ、番羽織きていきるくみつき 去来 『ありそ海・となみ山』(となみ山)

カ、盆徳で寺方いきる椀の音 緑水 『二えふ集』(種)

キ、西は尾花川よりぜぞかけて数十人、手に余りて足までくじき、にがくしき顔つき、火燵に酔たるやら何に酔たやらむせうにいきり申候。 『枇杷園隨筆』

ク、露は芹の香の佛を残し、雉子はむかしなつかしき匂ひをとどめり。瘦て小兵とはいへ共、雲雀のいきりもの、水無月の露・尸とほこりける。 『篇突』

以上のイからクは、物事に熱くなつて、興奮している様子を表す「いきる」の例である。自然の風物や現象が張り切つて、威張っている様を表す用例には

ケ、よいぞ嵐竿のいきり肩の花 調試 『坂東太郎』(巻之一 花)

とあり、この句は『當流籠技』板行の翌年に、才磨により編集された作品集に収載されている。ここでは、嵐の勇ましさを「いきり」と表現するが、アの用例と同様に、「悶」が持つ語義は有していない。

コ、かぶるゝなけふの細道草いきり 濫吹 『泊船集』(夏 旅行)

右の句以外に、桃妖・史全(『蕉門名家句集』)にも「草いきり」と詠まれる句がある。「草」のほかには

サ、初霜や橋杭かくす水いきり 一村 『泊船集』(冬 こがらし…霜…)

シ、若草にかすみわたるや地のいきり 東白 『続有磯海』(上 四季部立 霞)

ス、青梅やくもつて出る風いきり 呂風 『蕉門名家句集』

のように、草・水・地・風などが擬人化されて、勢いがある様子を「いきり」と表現される。また、何かが元気よく頑張っている様子を表す例には

セ、道端にいきりたちたる馬の糞

貞恕『歴代滑稽伝』

ソ、いきりたるやり一筋に挟箱

及肩『ひさご』(雑)

タ、庭火たくやあめ輪巻のいきり者

卓志『曠野後集』(第八)

など、他にも「鶴鶴」(『国の花』第五)、「小鳥」(杜若『蕉門名家句集』)、「井戸」(自笑『作者小伝』)、「兵法」(李由『宇陀法師』)、「いきり者」(後清『後の旅』)、「小坊主」(米仲『江戸廿歌仙』第七)、「蟹」(巢兆『曾波可理』)など幅広いものを対象として「いきり」と表現する例が見える。

一八世紀初めの浄瑠璃には

チ、是日那さま上物のうらがね二千足とだなに有ふ取出しくださりませとぞいきりける

『心中対は氷の朔口』(10ウ)

ツ、かごとばせて西口よりおろせがいきつて旦那お出といふより家内こりやめでたいとはだしでとんで門口

『山崎与次兵衛寿の門松』(14ウ)

迄福の神のおむかひ

と、「いきる」は大変な勢いでまくしたてる情景を描写する。

因みに、「いきる」と語根を同じとする「いきどおり」については二節で触れたが、今ひとつ、語根「いき」が共通する「いきだはし」について用例を通して考えてみたい。『當流籠拔』に、「いきだはし」が変化した語「いきどし」が、次のように、息苦しうに鳴く蛙の表現として用いられる。

・(間歩がさかりて山吹の月 四七八 宗旦)

中戸にて息どしさうに蛙鳴 四七九 鐵幽

『おくのほそ道』(六月八日)では

・氷雪を踏でのぼる事八里、更に日月行道の雲関に入かとあや生まれ、息絶、身こぎえて頂上に臻れば、口没て月顯る

と、疲れて息苦しい状態を「いきたえ」と表現する。

また、『けいせい伝受紙子』(二の巻)には「息だはしく申ければ」とあり、『浮世風呂』(前編 卷之上)では「息がせかく」といきだはしいものでござるから」と、動作において息切れがする様子を描写する場面があるが、これらは「いきる」とは異なる用法である。

以上のように、「いきる」について用例を挙げ検討してきた結果、物事に熱くなって興奮している様子、勢いがある様子を表現するのに「いきる」が用いられていたが、いずれも「悶」の漢字が持つ意義とは相違点がある。

五 「煩」と振り仮名の関係

次に『饅頭屋本節用集』で「イキル」の訓を付す「煩」について考えてみたい。俳文学作品に

ア、哀れ小猫の疲て煩ふ

政信 『紅梅千句』(一九〇)

イ、気煩ひの風いたづらにふく

安呂 『江戸八百韻』(七八八)

ウ、露ときえむ覚悟は隔の煩に

貞室 『俳諧之註』(六七)

エ、一夜ふた夜のちはたんぼも煩し

『しら雄句集』(巻四 冬の部)

オ、昼は猶腹痛煩の暑サカナ

芭蕉 『芭蕉集』(旨原百歌仙)

カ、冷る手を煩く迄とる別れ哉

志良 『末若葉』(別恋)

などと「煩」の用例が見える。ア・イには振り仮名が付されないが「わづらふ・わづらひ」と読むと想定できる。ウからカでは「煩」に「わづらふ」「ヤミ」「ホメ」の三種の振り仮名が付され、カの「ほめく」は『天正十八年

本節用集』に「燥」^{サマシ}とあり、『言海』では「イキル」と同じ「熱」の漢字を当てる。また、『言海』には「火めくノ意」ホトボル。ホテル。赤クナル。熱ス。」と語釈が施され、「煩く」^{イダ}には「いきる」と意味領域を同じとする部分がある。

このことから、「煩」を「イキル」と読む例は見出せなかったが、「煩」が「いきる」の意味を持つことは確認できたと言えよう。

また、『天水抄』では

・賈島が、「鳥は宿す池中の樹、僧は敲く月下の門」といふ詩を作り、「敲くと云字、おすと作べきか、いかゞ」と思案し煩ひて、乗たる車の板を、たゞきてみつをしてみつ、千度百度吟じわづらひて

とあり、ここでの「煩ひ・わづらひ」は「病」の意ではなく、「思い悩む」意である。『伊京集』の「悶絶」^{イダ}の下注に「マトウ」の記事があること、並びに『合類節用集』の「悶」の下に記される「コ、ロマドヒ」と同意を表すものとして、「悶」の用法に相当するものである。

さらに、「煩」と「悶」が共通する訓として、『漢和三五韻』（一六八六年刊 元69オ）には、「煩（ワツラフ イキトホル イタハル）」とあり、『字鏡集』（白河本）・『倭玉篇』（慶長一五年版）の「悶」に付される「イキドヲル」の訓と一致する。時代が下るが、もう一つ加えれば、『雅言俗語 俳諧習檜』（一七七九年刊）に掲載される、『男節用集如意宝珠大成』（一七一六年刊）との本文対照表では、前者の「悶」^{イダ}に対して後者では、『合類節用集』『昔言字考節用集』と同様に「悶（イダ）」^{イダ}（言語）と記されている。

したがって、右のような事例から「煩」は「悶」の語義とも通じ、ここでも「悶」を「イキル」と読む道筋が成立する。

ただ、これまでの考察を通して、仮名書き「もだえ」と「いきる」の用例から考えてみると、両者が用いられる場面には違いがある。例えば前掲「四 いきるの用例」ウの『炭俵』所収の句「だかれてもおのこどいきる花見哉」の「いきる」を、「もだえる」に置き換えた時に、男の子が熱くなって興奮している状況が苦しみ悩む意となり、花見にもだえ苦しむのでは、句として内容に差異が生じ好ましくない。故に「悶」は個々の意味を持つ漢字「悶」と、振り仮名で示す「イキル」の二語を一体とした用語であると言える。

おわりに

本節では、『當流籠拔』所収の句で、「悶」に「イキル」と振り仮名が付されることに注目して、考察を進めてきた。

考察の進め方として、第一に古辞書類や中国の辞書による「悶」のヨミと、「いきる」に対応する漢字を調査した。その結果、「悶」に「イキル」の訓が与えられる例を見出すことはできなかったが、「悶」の漢字に「イキル」の振り仮名を付す道筋は解明できた。

第二では「悶」の用例を挙げ、第三では仮名書き「もだゆ」が、どのような場面で使用されているかを調査した。また、第四では、「いきる」が使われる場面の考察、第五では、節用集で「イキル」の訓が付される「煩」の用法を検討してきた。これらの用例から、「悶」に「せく」を表現する用法があること、そして「煩」に「悶」と同義を表す用法があることと同時に、「ホメ（く）」と振り仮名が付される例があることが出来た。

以上のような考察の結果、用例に見える「悶く（せく）」「煩く（ほめく）」は、「いきる」の意に通じる部分があり、当該句では文脈での表現効果を高めるために、「いきる」に「悶」を対応させたと考えられる。

俳諧では、一句の限られた字数の中で、俳諧が目標とする、滑稽や諧謔を表すための工夫が見られ、そのひとつが本節で問題とした「悶る」の用法である。当該句では、前句を「鬢先を一文字にして気取っている」と捉え、それに付けて春雨を擬人化し、春雨が「高が假契買のくせに」と、假契買を非難する気持を「悶」で表現し、同

時に、いきまぐ様相を振り仮名「イキル」で表現している。このように、仮名書き「いきる」だけでは表現できない部分を漢字「悶」で補い、「悶」の漢字と「イキル」の振り仮名により、二つの映像を取り合わせた、独創的な表現法を採用していると言える。

注

1、江戸時代末の『魁本大宇類苑』には「悶死」に「イキレジニ」と振り仮名を付す例が見えるが、この「イキレ」と『當流籠拔』の「悶（イキ）る」には意味的にずれがある。

・中国の『孔子家語』（巻三 弟子行 第十二）では「悶」の下注に〈悶／憂〉と記す。

・『楚辞』（九章、惜誦）には「悶（イキ）して」とあり、注には「悶」に「もだえわづらう」、「啓」に「心が乱れる」と記されている。

・『文選』では「文章編二（巻十八）」や「詩騷編三」に思い悩む意として「悶」が見える。

・『菅家文章』では、校注者により「悶」に「うれふ・もだゆる・いきたゆる・うらむ」などの振り仮名が施され、何れも思い悩む、或は憂鬱な心情を意味する語として用いられ、中国の用法に倣うものである。

以上のように、漢籍及び日本の漢詩『菅家文章』での検索結果も、「いきる」の語義に相当する用例は認められなかった。

2、『遊仙窟』（五四ウ）に「少時眼華耳熱（右傍訓）シハラクアリテメカ、ヤキアツクシテ、熱の左傍訓イキリ」とあり、『日本霊異記』（中巻序文）には「睇俛忝慮 顔酡耳熱（睇みて婢ち、慮に忝ク 顔酡リシ耳熱し）」とある。「熱」は感情が高まって、耳がほてり熱くなる状態を表わし、これらは「煩く」と同意と捉えられる。因みに俳諧集では、「イキル」に「熱」の漢字を当てる例は見えず、「熱」は「江戸糍食して熱る粟のごとし 秋風」（『洛陽集』雑秋）で「ムセ（る）」の振り仮名が付される。

参考文献

- * 『浮世風呂』（日本古典文学大系 一九八二年第二二刷 岩波書店）
- * 『江戸時代語辞典』頼原退蔵著 二〇〇八年 角川学芸出版
- * 『魁本大宇類苑』（一八六三、一八六六年頃成立 谷口松軒著）平成六年 雄山閣
- * 『雅言俗語 俳諧翌檜』（古辞書研究資料叢刊 第十卷 一九九五年 大空社）
- * 『菅家文章』（日本古典文学大系 一九八二年第十一刷 岩波書店）
- * 『漢和三五韻』木村晟編（古辞書研究資料叢刊 第五卷 一九九五年 大空社）
- * 『けいせい伝受紙子』（新日本古典文学大系 一九八九年 岩波書店）
- * 『孔子家語』孔子文化大全編輯部編輯 山東友誼書社 一九八九年／新釈漢文大系 第五十三卷 平成八年 明治書院

- * 『古今和歌集』（新日本古典文学大系 一九八九年 岩波書店）
- * 『心中刃は水の朔日』（『近松全集』第五卷 一九八六年 岩波書店）
- * 『楚辞』（新釈漢文大系 昭和四五年 明治書院）
- * 『當流籠拔』（日本俳書大系 7 大正一五年 日本俳書大系刊行会）
- * 『日本霊異記』（日本古典文学大系 一九六七年 岩波書店）
- * 『俳諧類船集』京都大学国語学国文学研究室 昭和三〇年
- * 『本朝無題詩全注釈 三』本間洋一 平成六年 新典社
- * 『文選（詩騷編）三』（全釈漢文大系 第二十八卷 昭和六一年五刷 集英社）
- * 『文選（文章編）一』（全釈漢文大系 第二十七卷 昭和五二年二版 集英社）

* 『山崎与次兵衛寿の門松』(『近松全集』第十卷 一九八九年 岩波書店)

* 『江戸乱舞』遊仙窟本文と索引』歳中進編 昭和五四年 和泉書院

* 『飛騨年』遊仙窟総索引』康永三年書写醍醐寺宝蔵本 平成七年 汲古書院

* 曠野後集・時勢粧・鶉衣・宇陀法師・末若葉・江戸廿歌仙・大坂櫻千句・おくのほそ道・かなあぶら・国の花・雲喰ひ・滑稽太平記・崑山集・作者小伝・蕉門名家句集・しら雄句集・炭俵・続有磯海・曾波可理・淡々文集・父の終焉日記・天水抄・天満千句・となみ山・泊船集・投盃・二えふ集・後の旅・俳諧初学抄・俳諧共傘・俳諧之註・芭蕉集(発句編・連句編)・坂東太郎・ひさご・枇杷園随筆・篇突・木朝文選・まつのなみ・歴代滑稽伝以上『古典俳文学大系』一巻く一六巻 昭和四五年く四七年 集英社

(検索は『古典俳文学大系CD・ROM』集英社による。)

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて

はじめに

第二章では漢字とヨミとの関係など特殊な漢字を取り上げて、第一節では『江戸八百韻』の「婀娜・艶」について、第二節では『當流籠拔』の「悶る」について用字考証を行ってきた。本節では、一節と同じ『江戸八百韻』の中に、前句「爰に烏おどし強弓を引(幽山 五八八)」に続けて

哆トの中もはなれし庵の月(言水 五八九) 隣のかゝも世をうらむ露(如流 五九〇)

と「哆」を「アツカヒ」と読む句が見えることに注目して、考察を加えていきたい。

右の句は、伸直りをさせようと取成している間に庵に差し込む月影はどこかに行ってしまったと、「哆」は仲裁

の意で用いられる。この「哆」の用法について、様々な辞書を参照しながら、「哆」を「アツカヒ」と読めるのか検討して行くことにする。現在では「あつかい」には「抜」の漢字が与えられ、「哆」を「あつかい」として使用されることはないからである。

今回資料とした『江戸八百韻』は『俳諧大辞典』や『日本俳書大系』の解説によると

(略) 幽山編。延宝六年(一六七八)刊。幽山の発起で江戸の新しい俳諧師八人、すなわち幽山・安昌・来雪・青雲・言水・如流・一鉄・泰徳らが興行した八吟八百韻を収めて一集としたもの。既に談林調にも嫌らずして更に何らかの新句境を開拓しようとする要求が表に発し、俳風革新の第一声を挙げたものとして俳諧史上注目すべき作品である。作者のうち一鉄は『談林十百韻』の一党であるが、他は宗因の直系ではない。

(『俳諧大辞典』明治書院)

貞門の無気力にいや気がさして、談林風と同じ、それにも亦嫌焉たるものがあつて、新風體にあせつてみた時代的煩悶が、この八百韻にも反映してあるように思はれる。(『日本俳書大系 七』日本俳書大系刊行会)と述べられ、談林派の俳諧では一節の「婀娜」、二節の「悶る」の用法とともに、語と漢字との関係にも新句境を開拓する様相があらわれていると言えよう。

テキストには、天理図書館綿屋文庫の『江戸八百韻』を使用し、『江戸八百韻』以外の九俳諧集は、『近世文学資料類従 古俳諧編』(勉誠社)所収を使用した。なお、用例の傍線は稿者が付記したものであり、俳諧の句番号は、便宜上、その俳諧集での通し番号を示すものである。

一 辞書類での「哆」と「アツカフ」(七)

「哆」に関しては、日本の辞書では以下のように収録されている。

○漢字字書

ア、新撰字鏡（天治本）…哆（丁羅反張口也緩唇也 又丁佐反言猶唇垂也）
イ、類聚名義抄（觀智院本）…哆（陟加反 張口 又多音 又昌者反 唇下 オホクチ 禾クシ 處昏反）（仏中
四二・四）

ウ、白河木字鏡集（一一卷）…哆（左訓シ）（ハホクチ ハタカリテ ワタ、シ）

エ、倭玉篇（夢梅本）…哆（左訓シヤ）（張口也（左訓クチヲハルナリ） 唇下垂兒（左訓…クチビルシタニタル、）
オ、倭玉篇（篇目次第）…哆（處紙切 シ反 ヲホクチハタカリ 皮墮唇垂）

カ、倭玉篇（慶長一五年版）…哆（ハタカリテ ヲホクチ）

○国語辞書（節川集など）

キ、運歩色葉集…哆（一人）

ク、伊京集…哆

ケ、合類節用集（巻八下）…扱（左訓サウ）（又捫同取扱） 暖（左訓アイ）（又哆（左訓アツカヒ）同）

コ、書言字考節川集（第十一冊 言辭門九）…扱・和論・哆（俗用 此字…或用 暖字…於…義未詳）

サ、俳字節用集（上九）…哆（口を）（節用集大系 六〇巻 大空社）

シ、漢和三五韻（坤巻 麻 17才 一六八六年板）…哆（クチハル ヲホクチ） 上聲舒韻 口又麻韻張口也

（古辞書研究資料叢刊 第五巻 大空社）

ス、雅言俗語 俳諧翌檜（言語 一七七九年刊）…哆（すかすなり）（古辞書研究資料叢刊 第一〇巻 大空社）

この『雅言俗語 俳諧翌檜』に掲載される『男節用集如意宝珠大成』（二七一年刊）との本文対照表には、「（男）
哆 すかす也（言語）」の収載が見られ、「哆」のヨミと意味は両者とも同じであることを示している。
また、中国の辞書では以下のような収録が見える。

○中国の辞書

セ、説文解字注…「哆」張口也（小雅哆兮哆兮毛曰哆大兒）（中華民国六五年 全國各大書局）

ソ、字彙…「哆」（馬昌者切車上声張口詩小雅哆兮哆兮又大、口貌又唇下垂貌又衆意左傳於足哆、然外齋

侯也又紙尺切音恥義同又禡正亞切音咤義同又禡丁可切多上、聲義同又叶語敵呂切音杵韓昌黎元和聖德詩紫

焰嘯呵高靈下墮、星從、坐錯、落侈哆墮音吐（和刻本辞書字典集成 第三巻 汲古書院）

タ、大廣益会玉篇…「哆」（左訓シヤ）（處紙尺高一一切張口）（和刻本辞書字典集成 第二巻 汲古書院）

これらに『異体字研究資料集成』所収の『古俗字略』（二期八巻 巻三・二七）と『五経文字』（別巻一 下三

六）を付け加えておくと

哆（大口）禪 檮參（並同上） 『古俗字略』

哆（昌志反昌也反大也見詩大雅） 『五経文字』

と収録がある。

以上のようにセからタの中国の辞書では口を張る、唇下がりに垂れる、大口の貌という義であり、右の『古俗字
略』『五経文字』と共に、いずれにも「アツカヒ（フ）」に対応する義は見られない。「江戸八百韻』五八九番の「哆」
は、同じ字形であっても中国の字義とは対応しない日本独自の用法であると考えられる。

日本においても、アからカの辞書とシ『漢和三五韻』の「哆」に対する義では中国の辞書と一致する。「哆」を
「アツカフ（ヒ）」と読むのは、近世期に入ってからであり、一六八〇年成立の『合類節用集』と一七一七年成立
の『書言字考節川集』に「哆」に「アツカフ」の訓が見え、当該集の成立が一六七八年であるので、それ以後の
辞書ということになる。

それならば「アツカヒ（フ）」に対して、辞書ではどのような漢字が当てられているかを次に示してみたい。

チ、新撰字鏡（天治本）…喝（於月反 傷熱也阿豆加布）

ツ、類聚名義抄（観智院本）…徳（多勤反）ノリ サイハイ メクム トル ヲクル アツシノホル アツカフ（佛上三六）・念熱（アツカフ）（法中八八）

テ、色葉字類抄…青（アツカフ）・囑（同）（前田本 下三〇ウ／黒川本 下二五オ・ウ）

念熱（アツカフ）敦養（同）（前田本 下四〇オ／黒川本 下三三オ）

ト、温故知新書…機・熱・囑・馮仙・嘔・厭・礼（以上態藝門）

念熱（復用門）

ナ、運歩色葉集…扱・嘔・操・大事・念熱

ニ、倭玉篇（篇目次第）…熱（如折切）セチ反ネチ反 アツシ アツカフ アタ、カ タクマシ 温盛也 熱

（在火見 如雪切 トモス アツカフ）（イコフ ヨテ アツカフ イ 馮同共）

又、倭玉篇（慶長一五年版）…扱（左訓サツ）（トル アグル ヒク ヲサム ウルサシハサム アツカウ）

ネ、伊京集…扱・擋・囑・宰・捫

ノ、明応五年本・易林本…扱

ハ、天正十八年本節用集…扱・宰・擻

ヒ、饅頭屋本節用集…扱・嘔

フ、黒木本節用集…扱・宰・捫

ヘ、俳字節用集…和論（嘔／扱）

「チ・ツ・テ・ニ」の漢字辞書以外では共通して「アツカヒ（フ）」に「扱」の漢字の収録が見え、「ツ・テ・ト・ナ」などに収録される「念熱」または「チ・ト・ニ」の「熱・囑」などは熱くて苦しむ様を表し「仲裁する」とは意味が異なる。しかし、次の『日本国語大辞典』の「あつかい」の語誌には以下のような記事があり、『角川古語大辞典』にも「熱かふ」と「扱ふ」の関係の記事が見える。また、『大言海』でも「悶熱」から他動詞に転じ

たのが「扱ふ」であると記す。

古辞書での「哆」の収録状況や「アツカヒ」の漢字表記を見たところで、国語辞典での「あつかい」に対する語釈、また、古文書辞典などでの記事を、次に紹介しておくことにする。

ホ、日本国語大辞典（第二版二〇〇一年 小学館）

あつかい【扱・嘔】（名）

（一）あれこれと世話をする。（二）あれこれとうわさをすること。（三）両者の間に立って争いをとりなすこと。訴訟や紛争の仲裁。調停。示談。（四）かしらとして人々を取り締ること。（五）人の相手になって話したり、もてなしたりすること。（六）あれこれと操作して動かすこと。（名詞の下に付けて接尾語的に用いる。）事物の取扱い方。（七）あておこなうこと。支配すること。（八）物事の処理。…

あつかう【扱・嘔・刷】（他）

右の名詞とほぼ同じ意が記され（一）から（五）を省略する。（六）両者の間に立って争いをやめさせる。仲裁する。

語誌（一）もとは自動詞「あつかふ（熱・暑）で、熱・病・心痛など「事態に対して身をもって苦しみ煩う」ような意であったものが、「身を煩わせて事態に対処する」意に転じ、他動詞に変わっていくのにもなっており、「身を煩わせる」ことよりも「事態に対処する」ことの方に重点が移り、やがて前者の意味特徴は忘れられ、単に「物事进行处理する」意となったものか。

（二）中古から中世前期の物語などの例では、何に対処するかによって、さまざまな文脈的な意味が見られるが、かわりを持つ事態のためにあれこれ心を尽くして身を煩わせる点では共通している。中世後期から多く見られる（六）の用法も、他人のもめごとに対して身を挺して処理するところから生れたものと思われる。

【語源説】(1) アツカフ (悶熱) が本義の病悩する意から、気づかう意に転じ、これを他動詞に用いた語。モテアツカフというのが正しいか(大言海・日本語源・賀茂百樹)。(2) アテツガフ(宛番)の約転(言元梯)。(3) アシツカフ(足使)か(和句解)。(4) アツマリクハフ(集加)の略(紫門和語類集)、(5) アヅカリオフ(預負)の義(日本語原学Ⅱ林堯臣)。(6) アヤツル、カナハムの反(名語記)

マ、角川占語大辞典(一九八二—一九九九年 角川書店)

あつかひアツカイ【扱】名①世話をすること。②協定・裁判。また、仲裁示談。

あつかふアツカウ【扱・繕】動ハ四 その場その場の状況に即応しながら対象を処理する意。①あれこれと面倒を見る。②看病する。③取り沙汰する。④お相手をする。⑤処置に困る。⑥物品を操る。⑦中に立って争いの調停に当る。仲裁する。補動ハ四 動詞の連用形に接し、上の動作を苦心しながら行う意や、重荷に思いながら事をなす意を添える。平安時代にはこの用い方が多い。

あつかふアツカウ【熱かふ】動ハ四 「あつし(熱)」の語幹からの派生。熱さに苦しむ。熱がる。暑さのために悩み煩うところから、処置に窮する意に転じうる契機を持ち、てこずる、もてあます意の他動詞「扱ふ」との交渉が考えられる。

ミ、時代別国語大辞典室町時代編(一九八五年 三省堂)

あつかひ【扱】「扱・宰・捫」(黒本節用)「取り扱うこと。または、交渉すること」(H葡)①人や事物を対象としてあれこれ働き、何らかの処理をすること、また、その処理。①人の相手になって、その人に対する評価に応じた対応、取扱いをする事、もてなし。「あひしらひ」。②ある人や事柄を話題としてあれこれと各自の意見を述べる事。③特に、世間を騒がしたずらな取沙汰。④めんどろな事柄や複雑な事態をとりさばいて処理すること、⑤意見や立場を異にするもの間に立って事態をとりまとめ、また、妥協・和解するようにとりなすこと。調停。仲裁。⑥一群の人人の長として監督し、物事を取締ること。または、その役、

その役をする人。「宰物のかしら」(和漢通用)①意図どおりに事物をあやつり、処理するために、身体の一部などを用まく使ってすること。①身体の一部や道具などの機能を活用して、事物を意図するとおりに使ったり、働かせたりすること。また、そのやり方。「捫手にて物をなす也」(和漢通用)②多く「あつかひ」の形で、そのものにふさわしい、しかるべき使い方、取扱い方をいう。

あつかふ【扱ふ】(動四)「扱」(易林節用)「扱・捫」(正宗節用)「扱・暖」(饅頭節用)「宰・扱・撫」(天正節用)「手、言葉などで処理する。口、手、足などで処理する」(口葡)

語釈は名詞とほぼ同じ。

ム、大言海(昭和七年 富山房)

あつかひ(名)一扱(一)アツカフコト。アツカフ仕方。待遇(二)戦争、争論、訴訟ナドノ仲裁。和解。

調停

あつかふ(他動、四)一扱(一)モテアツカフ。(二)計ラヒ行フ。取りサバク。(三)モテナス。(四)戦争、争論ノ間ニ入りテ、中直リセシム。仲裁ス。媾和 和解 調停 …。

右の『大言海』の「扱」の語源には

「あつかふ」(白動四)「悶熱」の(一)火ノ熱キニ告シミ悩ム。(二)思ヒヲ焦ス意ニ転ジテ、悶ユ。焦慮

(三)轉ジテ、心シラヒス。氣ツカフ。懸念ス。

ノ(一)ノ意ノ、他動に轉ジタルナリ、もてあつかふト云フガ正シキナルベシ:

とある。

メ、古語大辞典(一九八三年 小学館)

あつかひ【扱ひ】アツカイ(名)①世話をすること。②交渉や訴訟などの斡旋・調停をすること。

あつかふ【扱ふ】アツカ(コ)フ(他ハ四)①世話をやく。②取り扱う。③もてなす。④噂する。⑤処理に苦

しむ。⑥中に立って事を治める。調停する。仲裁する。

以上のホからメの国語辞典の用例では、「アツカヒ」に「扱・曖・刷・繚・拵」の漢字は見えるが、「哆」を用いる例は示されない。

○古文書辞典

モ、古文書古記録語辞典：曖 あつかい 哆、扱とも書く。①世間のうわさ、評判。②支配、領知。③紛争解決のための仲裁、調停。紛争当事者がその解決を第三者に委ね和解する制度（中人制）。貸借、売買、土地争いなどの民事と、刃傷、殺人などの刑事、また合戦などの仲裁にも及んだ。その裁決は折中の法、中分の法により、両者に不満や遺恨を残さないようにする点に眼目があった。（東京堂出版 二二頁）

ヤ、古文書大辞典：あつかい 曖・哆・扱・刷 ①扱いと同じ。あれこれと世話をすること。紛争などの調停をすること。②近世用語では仲裁、調停人などをさし、訴訟などを内済し和解させること、また、その人の意。取扱ともいう。（柏書房 八頁）

ユ、国史大辞典（一・三・一〇・一二卷）（吉川弘文館）

・「扱」（あつかい）…江戸時代における内済（ないさい）、すなわち第三者たる私人が介入して争いの当事者間に和解を成立させること。曖とも書き、取扱ともいう。…

・「曖」（あつかい）…鹿児島藩の地方職制の一つ。外城における最高の郷役人…（略）…合議によって事を決し、地頭の指揮を仰ぐ。…

などであり、「鹿児島藩」及び「麓」の項にも「外城内行政には衆中から曖（あつかい、郷土年寄）・組織・横日の所（ところ）三役以下の役職を地頭が任命し」など、職名として「曖」が登場する。

ヨ、日本難訓難語大辞典（井上辰雄監修 雄子館）

哆 あつかい・あつかう・たらず

あつかい―「曖・扱」とも書く。①評判、調停。近世ではとくに訴訟の仲裁。②薩摩藩の地方職名。

あつかう―「扱う」に同じ。

たらず―女を言葉たくみにだます。

哆状 あつかいじよう―「曖状・扱状」とも書く。近世の訴訟で、調停で和談が成立したことを証明する文書。

以上のような辞書に、「あつかい」に関する記事があり、『近世古文書辞典』（国書刊行会 一〇頁）でも、前掲のモ・ヤの古文書辞典と同様に「曖」以下同じ漢字が掲載され、語釈もほぼ同じである。しかし、これらの古文書辞典に示す用例での漢字表記は「曖・刷」であり、見出し語の漢字に「哆」があるのにも関わらず、「哆」の使用例は示されない。

二 「哆」の用例とヨミ

前掲の古文書辞典での「あつかい」の項では、「曖・哆・扱・刷」などの漢字が見出字として当てられている。そこで、古文書における「哆」の用例を探すことを試みたが、「哆」の用例は見出せず、「曖」と「刷」の漢字表記による用例のみである。「哆」の用例では、時代が遡るが『本朝続文粹』（巻第一 雑詩）に

門熟安木梗 挟箭共哆爲（門熟安木梗を安んず 箭を挟み共に哆爲たり）

と見える。「哆爲」は『文選』にも「哆爲顛頰」と見え、唇の垂れ下がって正しくない様を意味し「仲裁」の意味ではない。それならば、近世初期の俳文学作品では「哆」が見られるか、『古典俳文学大系CD・ROM』により、「哆」と同時に『節用集』に収録がある「アツカフ」に対応する漢字を検索してみると、その結果「搦・観・宰・捫・撫・和諭」などの漢字は「アツカフ」としての使用が見えず、「曖」または「扱」が当てられている。

『古典俳文学大系』所収の句では、ただ一例次のように「哆」の漢字表記が見えるが、「哆」に付される振り仮名は、「アツカフ」ではなく、「タラス」と記される。

①あたくかに哆トラスといふが小春哉 白雪『蕉門名家句集』

右の句意は、暖かいので春のようだと騙されそうであるが、季節は小春（十月）である、と解釈するのだろう。「哆」に付された「タラス」のヨミは、第一項に掲載した『運歩色葉集』に「哆トラス（一人）」、『伊京集』に「哆トラス」と見え、少し時代が下り、一七七九年刊の『雅言俗語 俳諧翠槍（言語）』にも、上述の『運歩色葉集』『伊京集』と同じ訓が記され「哆トラス（すかすなり）」とある。

「哆トラス」は中国での字義、或は古辞書での「哆」の注に記される「唇が垂れ下がる」の「垂れる」から、「垂らす」と「誑す」が混同して、たぶらかす・子どもをすかしなだめるなどの義を表すようになったのではないかと推測する。これまでの調査結果では、「哆」は「哆爲」と①の「哆（タラス）」の用例しか見る事が出来ず、「アツカヒ」に「哆」を当てる例がない。前掲の用例「モ」「ヤ」の古文書辞典では「あつかい」の見出し語の漢字に「哆」が当てられ、その記事中「哆」以外の用例は見えるのに、何故「哆」の用例が示されないのか、そこに疑問点が指摘される。そこで、少々付会の感を免れないが、「哆」を何故「アツカヒ」と読めるのか、以下のように分析を試み、推測してみることとする。

一つには「曖」の崩し字からの誤用ではないか。一つには『大言海』に「扱ハ、手及ノ合字、手ノ及ブ意、古写本節用「扱ハ」曖ノ字ハ、親愛ノ口入ノ合字、玉篇「曖、曖気也」ノ義ニハアラズ」とあるのに倣えば、「哆」は多くの口入るの合字となる。「モ」の「曖」の項に「合議によって事を決し」とあり、調停はことばで処理するから口偏を用い、複数の人が関与するから旁には「多」を付け、意味を考慮した「哆」の漢字が選択されたとも捉えられる。二つ目には「多口」という漢語があり、『大漢和辞典』での訓義には「口数が多い。多言。」などと記される。また『唐話辞書類集 第二集』（唐語爲文箋）には「多口トラス（ヲウモノイフ）」、同書第三集（忠義水滸伝

鈔譯）には「多口人（クチマメナル人）」とある。この「多口」の二字の合字として「哆」を転用したのかと様々な仮説を立ててみたが、いずれも確信をもって、その傍証を固めることができない。

そのような中で、「哆」は『白河木字鏡集』『倭玉篇』（慶長一五年版）の下注に記される「ハタカリテ」の意味を持つことに注目してみた。『日本国語大辞典』での「はだかる」の語釈には、「聞き広がる。相手の前をふさぐようにして立つ。立ちほだかる。騒動が起きる。」などと記されるが見える。五人九番の句を争いの当事者の間に立ちほだかって、揉め事を解決すると解釈し、「哆」を「立ちほだかる」と「あつかふ」の情景描写の表現に用いたとするのが、最も妥当であると考えられる。

参考までに『唐話辞書類集 第九集』（徒杠字彙）に見える「哆」の用例を記しておくことにする。

那哆トラス（船ノ主）（卷之二） 哆口横議トラス（大言ヲ吐コト）（卷之五）

以上のように、現段階では、「哆」を「アツカヒ」と読む事例を見出す事が出来ず、『江戸八百韻』での用法は、個人的な用法なのか、今後用例を探し出し検討する必要がある、なお究明するには至っていない。

齋木一馬氏の『古記録の研究』（上 齋木一馬著作集1）には、既存の辞書は「収録されている語辞について、訓みと語義とが必ずしも明瞭・的確には示されていないものが多いこと」、また「語辞の実際の用例に接し得なかつたこと」に基因する不備があると指摘がある。さらに既存の辞書が「古文書・古記録を解説する上に十分に用を便じないとすれば、どうしてもわれわれ自身が直接に採集し」「訓みと語義とを解明する努力を払わなければならぬ」と述べる（二四二頁）。齋木氏が近世初期の武家記録の特殊な語辞を『上井覚兼日記』に見える語と他の古文書・古記録から若干援用して例解が示されている中に、「アツカヒ アツカフ」があるのでここに示しておきたい。

曖（扱）アツカヒ アツカフ うわさ、評判、支配、領知、調停、仲裁、和議、講和、とあり、次のような用例が挙げられている。（例文は省略した）

『上井覚兼日記』(天正二・八・十六)(天正三・四・九)(天正十・十一・廿)(天正十二・十一・十五)(天正十四・八・廿四)、『細川向家記』(天文廿四・九・廿七)(弘治元・正・十三)、『大友史料』(永祿十一・正・十三・久我晴通書状)(天正八・二・十六・立花道雪書状)、『上杉家文書』(元龜三・六・十八・直江景綱書状)(元龜三・十・六・上杉謙信書状)、『家忠日記』(天正十六・閏六・十)、『和良家文書』(文祿一・七・十九・小西末郷書状)、『慶長日記』(慶長十一・十二・十二)(『古記録の研究』二四九・二五〇頁)但し、これらに使われている「アツカヒ アツカフ」に対する用字はすべて「曖」である。

三 「曖」について

齋木一馬氏の前掲の書では「記録・文書の大部分は、その全文を真字書きにすることを原則としているために」「和製漢字・和製漢語の類が少なからず混在する」(三三〇頁)と述べ、原義と異なる特殊な用い方をした漢字の中に「曖(アツカイ)」がある。

前項での『古典俳文学大系CD・ROM』の検索結果で、俳文学作品に「アツカヒ」に対応する「曖」の用字が見えることから、ここでは「曖」について考えていきたい。

節用集では『合類節用集』に「曖」と収録が見え、『異体字研究資料集成』所収の『和字正俗通』(九卷 4才言詞)にも「曖・扱」と見える。しかし、『色葉字類抄』(黒川本)では「曖ナクサム」、『白河本字鏡集』「曖(ナクサム ヲウ)」、『異体字研究資料集成』所収の『倭字攷』(九卷 15才口部)にも「曖 今昔物語廿六第五條」とあり、これらには共通して「ナクサム」のヨミが与えられる。また『倭玉篇(篇目次第)』には「曖(烏蓋切 アイ反 氣也)や『大漢和辞典』には「【曖】アイ・ガイ いき。あたたかい気。おくび。歎詞。いたみをしむ情を表はす。」とあり、「あつかふ・なぐさむ」の訓義は見えない。中国の辞書では

『字彙』曖(秦於蓋切音愛曖氣也)

『大廣益會玉篇』(第五)曖(烏蓋切曖氣也)

と収録があり、どちらにも「曖氣」の注が記される。ちなみに『説文解字注』には「曖」の漢字の収録が見られない。

辞書類での収録状況に続いて、次に「哆」と同様に「曖」についても『古典俳文学大系』で用例を検索した結果を以下に示しておきたい。

② 此曖は浪の声々(二一六) とても損大かたにして捨小舟(二一七)

『俳諧大句数』(第三)

前句「八百日ゆく浜つたひにも牛に乗」の浜から浪を付け、「紛争を仲裁する声は波の打ち寄せる音のようである」と詠む。

③ 町中をよべばこそ爰に來りたれ(均册 八七一) よい曖のかかる公事宿(西鶴 八七一)『大坂榎林桜千句』右の「曖」の語注には「仲裁」と記される。句意は「訴訟事件で地方から出て来た人たちが泊る宿では、よい和策が示される。」と解する。

④ 談合して曖やうがあらふ物(一一七七) 欲をはなした京中の匠者(一鶴 一一七八) 『二葉集』右の句は「話し合えば仲直りの方法があるだろうに。」の意と捉え、③と同様に「曖」は「仲裁」を意味する。

⑤ 曖衆網礎にてかかる露(五二六) 無常の敵はよせつけぬ床(五二七) 『阿蘭陀丸二番船』(梅翁独吟)これらの句以外に俳諧論書『ふたつ益』では、高政と随流の論争を奉行所に差し出した訴状の形式で両者の主張を述べさせ、それに判を下すという趣向の中に、⑥のような例が見える。

⑥ 曖を仕りまして、占風を畏敬する処の眸をやぶらせ

・前句何様のうつりにても、ひぐりかへさず。「さゝめ」の山「曖」の山、高政きこゆるか。(「曖」の振り仮名「ア」は校注者が底本の脱字を補ったものである。)

・「噎」に入て真中に真直に立、「此様にめされよ」といふたれば

⑦松二有情トハ夫婦ヲ云ヘルニ、畢竟ハ有無ト姿情トニ文字ノ噎ノ自在ナル、言ハマ互照ノ絶妙ト称スベシ。『和漢文操』(△『文選』「冊類二」…)

右の⑦の引用文献である『和漢文藻』は、②から⑥の作品集より時代が下り一七二三年に成立した詩文を集め注を加えたものである。⑦では前の②から⑥の用例とは「噎」の用法が異なり、これまでのような調停や仲裁を意味するものではない。ここでは「口」には関係なく、言葉を表す文字をうまく工夫している様を表現している。

今ひとつ『古典俳文学大系』に所収されない西鶴の『大矢数』での用例を次に挙げておくことにする。

⑧秋の風あらくな吹そ噎に

第二卷・一一

⑨此噎はのけて置しやれ

第二卷・一九

⑩噎きかすにいかなるか末

第二卷・二一

⑪噎ふからは爰をせにせよ

第三卷・三一

『大矢数』では「アツカヒ」の漢字表記には「噎」のみが与えられ、すべて「仲裁する」の語義として使用され、調査資料とした俳諧作品集では、「噎」を「ナグサム」と読む例は見えなかった。俳諧以外の例として、西鶴の浮世草子での「噎」の用例を次に挙げ、その用法を検討していきたい。

(解釈は『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』などを参照した)

⑫藤六申は、ふたつに分たる家を出、皆藤七にとらすべしと申せば、やうやう噎ひ済て、藤六は刀ばかりとつて

家を出、向後百姓をやめると、都にのぼり

『西鶴諸国はなし』巻二 神鳴の病中

⑬両町きゝつけさまぐに噎へどもきかざれば、やうぐ四人につくり髭をさせ

注「噎へ」は和解させるために仲裁を試みることに
『西鶴諸国はなし』巻三 お霜月の作り髭

⑭いかにしても、女郎の裸はと尻からげに噎ひ、作り髭のかはりに眉鬘を一方おとさせ

『諸艶大鑑』巻八 終には掘ぬきの井筒

⑮金銀の欲にふけて噎にして済し手ぬるく命をたすくるがゆへに

『好色五人女』巻二 こけらは胸の焼付さら世帯

⑯は、長男と次男の刀の相続をめぐる争いに対する親戚の人たちの調停、⑰は、いたずらをされた男が住む町の人たちと、いたずらをした男達が住む両町の者が間に入り、和解させること、⑱は、女郎の裸はと仲裁して許すこと、⑲は、金銀で示談にすること、などを「あつかひ」と表現し、「噎」の漢字を用い、「噎」以外の漢字表記は見られない。右の②から⑤と⑧から⑱の用例は西鶴作、或は西鶴編など西鶴に関する作品での用字であることには注意される。

古文書においては、「噎」の用例は探し得なかったが、古文書辞典の見出し語に対する漢字表記の中に「噎・刷」も見えるので、両者の用例を提示しておきたい。

⑩十月十六日、當地江戸罷立、中途へ打出候處、御同名新五郎方藤田右衛門佐、小幡其外和談取刷由申来候(略)

遂對談候間、定當座之刷計儀存之候處 (北条氏綱書状・上杉家文書 大永四年)

⑪一 塚原陣之時、以駿河之噎無事、既驚神慮、以誓詞申合、翻翌日事 (上杉家文書 永祿七年)

上杉家文書にはこれら以外にも「噎」(永祿十年十月六日など)や「刷」が使用されている。「刷」は必ずしも「仲裁」の意として見えるのではなく、「所々御料所へ御年貢御催促候、御刷之御年貢義も」と年貢の催促の場面で「取り計らう」の意味を表している。

⑫今度秀吉其国鉾楯之段、無心元候、然者、和睦儀是非共噎度候(足利義昭御内書・島津家文書 天正十四年) など義久・義弘に秀吉との和睦を促す「足利義昭後内書」や、伊集院忠棟に宛てて使者を薩摩に下す「足利義昭後内書」などに「噎」の用例が見える。

⑬御折昏披見申候、仍源二郎噎之儀、表裏之由曲言候、委細從兵庫頭殿可被仰候之間、令省略候、恐々謹言

などであり、これらの「あつかふ」は、²⁸は面倒を見る、²⁹大切に取扱い、³⁰³¹もてあます・取扱いなどを表現し、³²から³³における「扱」の用字、或は仮名書き「あつかふ」は「哆」や「唵」より幅広い場面の表現に使用される。

おわりに

以上のように、「哆」を「アツカヒ」と読むことについて検討してきたが、『合類節用集』と『書言字考節用集』の辞書以外では「哆」に「アツカヒ」のヨミが与えられる例を探し出す事が出来なかった。「アツカヒ」は、当該句の「哆」、或は同じ「アツカヒ」に当てられる「唵」などは、中国に漢字が存在するけれども、その字義と異なる特殊な用法によるものであり、中国の字義とは対応しない日本で与えられた訓である。これは、第一節での『江戸八百韻』の「婀娜」に類似する用法といえる。「婀娜」も調査した限りでは、中国では容姿の美しさの表現に使用されていたものが、日本では心のやさしさの表現にまで汎用される実態が認められた。本節の「哆」に関して、当該集以降でも「哆」を「アツカヒ(フ)」と読む例が見出せない。このことから、漢字「哆」とヨミ「アツカヒ」との結び付きが特異であり、後の俳諧の用字に影響を与えることもなく、そして、現在の種々の国語大辞典の見出し語「あつかひ」に漢字「哆」を採用されることもないことから、一般に流布しなかったことは確かである。『運歩色葉集』や『伊京集』に見える「哆」に与えられた「タラス」のヨミでは用例が見え、中国での「唇が垂れる」の語義を、日本では「誑す」に誤用されたのではないかと考えるが、憶測の域を出るものではない。

『江戸八百韻』では、「アツカヒ」に「哆」を対応させること、並びに「ヤサシ」に「婀娜」を対応させることなどから、用字の採択にも新句境を目指す創意工夫が窺え、新鮮味のある漢字を用いることが、新句境開拓において重要な意義を持っていたと考えられる。

これまで研究対象資料としてきた一〇俳諧集中、年代の古い順から言えば、貞門俳諧の『正章千句』・『紅梅千句』、そして談林俳諧の『宗因七百韻』があり、その次に位置するのがこの『江戸八百韻』である。当該集以前の三俳諧集では「鹿驚・驚鹿」を「かかし」と読むことのように、語の義から漢字を連想して表記する熟語や、「泉郎(あま)」のように、典拠や用例を把握できるヨミを持つ漢字は出現したものの、漢字とヨミとの関係があまり明瞭でない用法は見られなかった。

それに比べて、当該集以降、前節の『當流籠扱』における「悶る」のような用字、また、談林から新風展開への作風を見せる、いわゆる談林俳諧末期の『七百五十韻』では、振り仮名がなければ、容易にその漢字のヨミを理解できないような漢字が出現する。³⁴

当該句の作者言水は、元禄俳人中卓越する一人で、芭蕉らと共に最も早く覚醒した俳諧者である(俳諧大辞典)。『江戸八百韻』は句風だけではなく、このような漢字の用法の面でも編者言水・幽山(共編)の意図するところであり、革新の兆しが現れる俳諧集である。但し、これがそのまま、後の詰屈贅牙な漢詩文調に繋がったわけではない。後の談林末期の漢詩文調の俳諧では、俳諧師による創作された漢字を用いるのが見えるが、本節の漢字とヨミとの関係と『七百五十韻』に見えるような造字では、漢字による表記に違いがある。

今後、古文書辞典類で「あつかひ」に「哆」の漢字が収録されているにもかかわらず、未だ用例を探し得ていないことを含め、さらに、多方面に亘り調査・検討する必要があると考えている。

注

(1) *相良家文書之一(『大日本古文書』家わけ第五 大正六年 東京帝国大学)

*沢氏古文書第一(続群書類従完成会 平成元年)

- * 地下文書（『史料纂集 古文書編』二〇〇九年 八木書店）
- * 『改編 匠材集』小林洋次郎編 平成一三年 勉誠社
- * 益田家文書三（『大日本古文書』家わけ第二十二、二〇〇〇年 東京大学出版会）
- * 歴代古案 第一（『史料纂集（古文書編）』平成五年 続群書類従完成会）
- * 『近世の古文書』荒居英次編 昭和四六年 小宮山書店
- * 『島津久光公實紀一』（續日本史籍協会叢書 昭和五二年 東京大学出版会）
- （2）齋木一馬『古記録の研究 上』齋木一馬著作集1 平成元年 吉川弘文館
- （3）第一章第四節を参照

参考文献

- * 上杉家文書（『大日本古文書』家わけ十二、ノ一 昭和五十六年覆刻 東京大学出版会）
- * 『西鶴大矢数』（近世文学資料類従 古俳諧編31 昭和五〇年 勉誠社）
- * 『西鶴諸国はなし』（新編西鶴全集 第二巻 平成一四年 勉誠出版）
- * 『諸艶大鑑』（近世文学資料類従 西鶴編3 昭和四九年 勉誠社）
- * 島津家文書（『大日本古文書』家わけ第十六 昭和一七年 東京帝国大学）
- * 『唐話爲文箋』渡邊約郎編 唐話纂要の焼直し（『唐話辞書類集 第二集』昭和四五年 汲古書院）
- * 『忠義水滸伝鈔譯』陶山本の刊本及び續稿の写本を影印（『唐話辞書類集 第三集』昭和四五年 汲古書院）
- * 『徒杠字彙』安政七年刊本（『唐話辞書類集』第九集 昭和四七年 汲古書院）
- * 『ありそ海となみ山』『渭江話』『大坂檀林桜千句』『阿蘭陀丸二番船』『其角十七回』『金龍山』『草むすび』『崑山集』『蕉門名家句集』『宗因七百韻』『蒼虬翁発句』『続境海草』『天満千句』『梨園』『俳諧大句数』『芭

蕉集連句編』『ふたつ盃』『二葉集』 以上『古典俳文学大系』一巻く一六巻 昭和四五年く四七年 集英社
 （検索は『古典俳文学大系CD・ROM』集英社による。）

第四節 西鶴五百韻の用字考証―熟字訓と当て字―

はじめに

西鶴の浮世草子での語彙に関しては、杉本つとむ氏の『西鶴語彙管見』に詳しい論述があり、同書（一頁）の序章には、以下のように西鶴の人となりを書き記す一節がある。

西鶴の（新しがり）を指摘しておきたい。もつともそれがただちに軽佻浮薄などというのではもちろんない。むしろ進歩的で積極的ないわば進取の気性に富む大阪商人の血が五体をめぐっている。その端的ならわれが（阿蘭陀流）西鶴の出現と存在である。

また、同書の「西鶴、ことばのスタイル」では、西鶴の文体を考える一つに（諺）があるとし、談林の俳諧について次のように記す。

文学史的にも、貞門では実現しえない諺と文学表現、すなわち緊密なことばと思想の不可分な姿が談林俳諧にあるし、西鶴文学の中に躍動している。（一四九頁）

さらに、新しいことばを使つての表現と俳諧でのヌケの方法、つまり、ずばり言わないで、それと示唆するものを言う方法が、新しい表現力を作り出し、軽妙で機知滑稽に富んでいるのが談林の俳諧であるとも記されている。（一五一―一五二頁）

本章一節では、「婀娜」を「ヤサシ」と読むこと、一節では『當流籠拔』における「悶」を「イキ(る)」と読むことなど、俳諧での特殊な漢字の用法を論じてきた。

本節では、「いつぞや」に「日外」、「たなばた」に「織姫」、「正体」に「性躰」、「明星」に「明上」、「丈夫衆」に「上夫衆」、「石(の帯)」に「胃糸(の帯)」などの漢字を当てるなど、現在では使われない熟字が見えることから、「日外」を中心にそれぞれの考証を行うことを目的とした。

本文中傍線は稿者が付記し、句の番号は各俳諧集での通し番号を示す。また、()内は読み下し、及び割書きを示すものである。

一 熟字訓

漢字一字と訓が対応しないが、表記された漢字列に日本語のヨミを与えるのが熟字訓であり、当該集には次のように「日外」を「イツゾヤ」と読む句が見える。

のへをまくらに戀はもみくしや (一一〇 西友) よめもせぬ御文殊に日外は (一一一 西六)

右の句では、「日外」に振り仮名が付されないで、音読みであるか、訓読みであるかには問題が残るが、杉本つとむ氏の前掲の書(一九五頁)では、西鶴作品の漢字を用法上から分類した中の「義訓一(熟字訓・当読みをふくむ)」に属する語に「日外」があり、『定本西鶴全集』の注では「日外」に「イツゾヤ」と記される。

一・一 辞書における「日外」

○『大漢和辞典』には

【日外】グワイ (一) 日の照らす外。王化の及ばない地。(元勰、聯句) 願従・聖明・分登・衡會・萬國馳・誠

と記述が見えるが、(一)の意味での漢籍の用例はない。

○『日本国語大辞典』(以下第二版・二〇〇一年を使用)には

いつぞや【何時―】(副) (代名詞「いつ」に係助詞「ぞ」および「や」の付いてできた語) 過去の時に
関して「いつであったか」の意を表わす。いつか。また、このあいだ。先日。

とあり、「日外」と表記される初出例には、当該集の三年後に成立した『好色一代男』から引用されている。

○『稿本日本書言海 第一巻』大槻文彦著 明治二四年完結 (昭和五四年 大修館書店)

いつぞや(副) 一日外一(何時ゾヤ、ノ意) サキツコロ。過ギシ頃。

○『大言海』(昭和七年 富山房)には、

いつぞや(副) 一日外一(何時ゾヤノ義ニテ、やハ、不定ノ辞、過ギシ何時ノ頃ナリシカ、ノ意ヨリ転ズ) サキツコロ。過ギシ頃。

と見える。『大言海』の凡例によれば、「日外」に付された二重線は和漢通用字を示すものである。しかし、『新編大言海』(昭和五七年新編版初版発行◎)では

いつぞや 一日外一(以下語注は右と同じ) /じつがい 一日外一イツゾヤ

とあり、「日外」に付す傍線が二重から一重になり、「和漢通用字」ではなく「和ノ通用字」に変更されている。

また、古辞書類には、当該集以降成立の『合類節用集』『書言字考節用集』、一八二七年刊『大全早字引節用集』(節用集大系六四巻 平成七年 大空社)に「日外」とあり、一八二三年刊の『俳字節用集』(節用集大系六〇巻 平成六年 大空社)では「イツゾヤ」に「過日」を当てる。

○『合類節用集』…日外(又曩昔又/向去同)(巻八上 言語部)

○『書言字考節用集』…日外(第二冊 時候門)

○『俳字節用集』…過^{イツゾヤ}H(上) 四)

○『大全早字引節用集』…日外(左傍訓「ヒホカ」)(六)

向去(左傍訓「カウキヨ」)(十一) **増字**

このように、辞書類では当該集成立の翌年に刊行された『合類節用集』に初めて見え、伊京集・明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本木・易林本などの古本節用集には収録が見られない。

それならば、唐話における用例があるのか、『唐話辞書類集』での収録状況を確認してみることにした。その結果を次に示しておきたい。

日外 イツゾヤ 第四集『色香歌』(丹行藏の著と思われる)

日外 五老集 第十二集『應氏六帖』(伊藤東涯の著作であるといわれている)

乃者(又乃者猶言彼時) 第十二集『應氏六帖』(右に同じ)

乃時(又乃時向時) 第十二集『應氏六帖』(右に同じ)

那指H 左傍訓…イツゾヤ 第八集『両国譯通』卷上 十(享保頃の刊行)

一遭子 イツソヤ 第十八集『譯通類畧』(岡「井」孝祖 写本)

前遭 イツゾヤ 第十九集『譯通類畧』(異本：長澤本 明治年間写本)

右に同じ

右のように「イツゾヤ」には「H外・乃者・乃時・那指H・一遭子・前遭」がある。右の『應氏六帖』に収録される「H外」の出典注記には「五老集」と記され、同書には次のような「日外」を用いる文が見える。

日・外郊・行見^レ有盤^ニ、點草^一、中^ニ疑爲^レ怪物^ト徐而視^ル之則暗香^一、根耳^ニ…

(『五老集下』十八 柳南先生盧公小簡 送枯梅)

同書に関しては、長澤規矩也氏が『和刻本漢籍文集』(第二十輯)の解題に

上は東坡先生蘇公小簡(蘇軾)・仲益尚書孫公小簡(孫覿)、下は柳南先生盧公小簡(盧某)・秋崖先生方公小簡(方岳)・清曠先生趙公小簡(趙某)からなる。序跋が全くなく、編纂の次第未詳。古活字印本があるので、それに據ったか。…

と述べる。また、駒澤大学古典籍書誌詳細(www.elib.komazawa-u.ac.jp/retrieve/.../02-frame.html?tm)には、長澤氏の解説を受けて、柳南先生盧公・清曠先生趙公の二人は共に伝記は詳らかではないとし「編者は邦人の可能性があるとされる」と記される。「那指日」のように唐音が示されていれば信憑性があるが、『五老集』は『色香歌』と共に中国の書からの引用であると断言できるのか疑わしい点があり、精査を必要とする。

また「イツゾヤ」に類する語として

日外 センジツ 第十六集『學語編』(釋顕常 明和九年刊本)

外日 センジツ 第十六集『中夏俗語藪』(岡崎元軌(鶴亭)撰 天明三年刊本)

日前 先口ナリ 第二集『語録譯義』(延享五年頃作)

義時 昔口也 第二集『語録譯義』(右に同じ)

があり、そのほか時を表す語には、『唐話爲文箋』(第二集 唐話纂用の焼直し)に「起先^{キイノシ} サキホド・先前^{キイノシ} 同上・前日^{センジツ} センジツ」などが見え、『譯通類畧』(第十八集・十九集)にも「口前」に「マヘカト」などの語が収録されている。また「口者」では第二集『語録譯義』(延享五年頃作)・第十五集『訓義抄録』(明治初年成立 未完成の稿本)に「コノゴロ」の和訓が記されていて、後者には「後漢」の出典注記がある。

さらに、時代が下り『明治期漢語辞書大系』(全六五巻・別巻三 平成七年 大空社)における「イツゾヤ」に対応する漢字を以下に示しておく事にする。

○『明治期漢語辞書大系』()内の算用数字は巻数を示す)

◆日外(右傍訓ニニチグハイ・ニチグワイ・ジツガイ/下注ニイツゾヤ)

大增補漢語解大全 191丁ウ (12) 読書白在 38丁オ (29) 初学必携大全漢語字書 24丁ウ (29) 訓訳考訂音画
両引明治伊呂波節用大全 187丁オ (35) 新撰歴史字典 21頁 (48) 明治漢語字典 43頁 (49) 漢語故諺熟語大
字林 1235頁 (54) 新編漢語辞林 149頁 (55)

日外 にっげい いつしか 雅俗節用 3丁ウ (28)
いつぞや 日外 (副) 先きつ頃、過ぎし頃。作文新辞典 335頁 (61)

右のように、「いつぞや」を意味する語として『明治期漢語辞書大系』所収の一四〇種の辞書中一〇種に収録が見え、右の『初学必携大全漢語字書』(土居清喜編 明治九年一月刊)の解説には「銅版印刷で収載語も多く、発売書肆も多く、全国的に売られたのではないかと思われる。」と記され、『作文新辞典』(中村巷(静斎編)明治三九年一月刊)には「作文と読書のための辞書であり、現行の国語辞典の形式である。」(稿者要約)と解説がある。『明治期漢語辞書大系』には「日外」以外に「イツゾヤ」に当てる漢字表記があり、参考までに次に提示しておきたい。

◆日前 (右傍訓:ジツゼン・ニチゼン/下注:イツゾヤ)

いつぞや 日前 にっげい

『明治期漢語辞書大系』所収の辞書一四〇種中、漢語註解 49丁ウ (10)・開化新選字引 63丁オ (18)・広益熟字典 仮名引部 190丁オ (19) など、三一種の辞書に「イツゾヤ」に対応する漢字として収録され、「イツゾヤ」以外に「サイツゴロ」で一回出現する。

◆日者 (右傍訓:ジツシヤ・ニツシヤ/下注:イツゾヤ)

大余漢語解 83丁オ (6)・漢語註解 49丁ウ (10) など、約一〇種の辞書に「イツゾヤ」の訓注が見え、それ以外では「日者 (下注:センジツ スギシヒ)」・日者 (日猶:往日也) など約八回の記載が見える。漢語故諺熟語大辞

林 1235頁 (54) では「ニツシヤとヨム。日のヨシアシをウラナフ人。」とあり、訓訳考訂音画両引明治伊呂波節用大全 187丁オ (35) では「イツゾヤ・ウラナイシノコト」と記載がある。

◆曩時 (右傍訓:ノウジ・ナウジ・ソウジ/下注:イツゾヤ)

当該語は、大增補漢語解大全 198丁オ (12) など、約一二種の辞書に「イツゾヤ」に対する熟字としての収録がある。それ以外では、下注「サイツゴロ・サキゴロ サキノヒ サキノトキ」で約一一回出現する。『大漢和辞典』に「曩時 ノウジ さきのとき。むかし。往時。曩日。」「ノウジ 曩日」は同じと捉えられるが、『明治期漢語辞書大系』では「曩日」に「イツゾヤ」と訓注を記す辞書は見えない。

一・二 「日外」の用例

「日外」の使用実態を示し、その用法を検討していきたい。以下『古典佛文学大系』(集英社)での検索はCD-ROMを使用した。

① 貴人 (上) に対して

・ 去比御出之處他出仕不得 キョウシツノミデノトコロニタラシメテモシラサズ 不 ム 得 ズ 貴意 キイ 残念 ゼンネン 奉 ホウ 存候 ゾウケン …

○ 去比 以前 此前 先度 先口 兼口 …… 日外 …… 他

卷二 九 「留守江來人に進状」(一七丁ウ・一八丁オ)

② 同輩 (中) に対して

・ 内々御約束仕候通明日於ニ下屋敷一鹿和の御食進上申度存候 ……

○内々 …… 此間 日外 以前 最前 先H 口比 常々 …… 他
卷一五 「人を振廻書状」(一九丁オ・ウ)

③ 下の人に対して

・ボ之通日外は初而参会申如一年來名染一存候…

卷二二 「同返事」(初而知人ニ成度思遣状)(二五丁オ・ウ)

右の書簡の手本では、貴人・同輩・下輩に用いられ、上・中・下により差別される語ではない。『書札調法記』は元禄八(1693)年初版によるものであり、『西鶴五百韻』の一六年後、『合類節用集』の一五年後の刊行となる。いまひとつ、手紙・文章の手引書である『新撰用文章明鑑』には次のように手紙に用いることばの意味や用法を解説する記事がある。

イ、口外 大方用るといへども是も女文章也。尊貴之方公界之は出されずによく也先H或去比など有べし先度右に同じ 日外とは程近をいふべし一月二月又は百日斗前をいふべし。年数へたよりをいふは僻事也

『新撰用文章明鑑』(卷中五丁ウ六丁オ)

右の書は前掲の『書札調法記』と同年(元禄八年)に刊行されているが、ここでは貴人には適さないといい、『書札調法記』とは違いがある。

ウ、先以、貴老弥御無事ニ御座候哉、承度存候。然は、日外ハ貴札、殊更西行谷・惠亭興行之連歌之懷紙、清書被成被下、誠御事繁候ハん処ニ、忝存候。

「新編宗因書簡集」(延宝二年四月二日 内宮長官荒木田氏富から宗因宛)

「ウ」の書状は、前年の一月一日に宗因が発した書簡に対する返書であり、四ヶ月前の口を「日外」と表現する。一方、宗因が荒木田氏富に宛てた寛文一二年七月四日付の書簡に対する八月四日の返書では、「先日ハ御発句早々被下、過分至極候。」と一ヶ月前の口を「先日」と言い、今日に近い口では「一昨日者八彌宜方迄之御状、

忝存候。」(寛文一三年 八月二日 荒木田氏富から宗因への書簡)と「一昨日」を用いる。

エ、十日斗有て、両巻を持参し、玄札に向て云、「日外」両度御無心忝存候。然れば、以前御添削被下候巻、反古に紛れて候を見出、引合候に、御添削相違し侍る。…(以下略)

オ、日外、此歌ども、御状被下候へ共、疾したゝめ置ながら、此方より便無之、御報延引、背本意候。『滑稽太平記』(卷之七 蝶々子・季吟子贈答歌の事 延宝八(1690)年頃成立)

カ、先以、口外於ニ御山ニ御懇情之事共、難レ忘奉レ存候。『芭蕉集 全』(書簡編 九九 曲水宛 元禄五(1692)年二月十八日付)

キ、将又日外御申被レ成候絵、御心隙に被レ遊可レ被レ下候。『芭蕉集 全』(書簡編 一三 木節書簡 元禄七(1694)年七月二十二日付)

ク、予、日外かた田舎の老夫の語りしを聞に、「わさびうへ置かしこに、必蟹来てこれを喰ふ」と。『芭蕉集 全』(句合・評語編)「常盤屋之句合」(第五番 詞書)

ケ、日外の鯉でも酔はず老の春 『蕉門名家句集 一』「作者小伝」自笑(宝永六年歿)

コ、日外は御状被下候處、御答も不申上無頼之至、御免可被下候。『蕪村集 全』(書簡編 一七〇 安永七(1778)年九月十一日付)

サ、日外(左訓…コノゴロ)〔五老集〕蘆一柳一南小一簡日外郊一行見有ニ盤ニ躡ニ草一中〔又〕外一日入下

シ、然ば日外噂致候通、惠勝様廿七回忌、来る十月取越和勤中候

『本居宣長翁書簡集』(一七九 寛政五(1793)年九月二十六日小西春村宛) 「シ」の「本居宣長書簡」の用例は『日本国語大辞典』では「いっぞや」の用例として掲載があり、次の「ス」

は「じつがい」の項での用例である。

ス、十四日、二條殿使菅秀長送一緘來、其詩叙曰、謹依來韻、奉答建仁義堂和尚座石、致日外垂訪之謝云
〔二條殿菅秀長をして一緘を送り来らしむ。其の詩叙に曰く、謹んで來韻に依り、建仁義堂和尚の座石に奉答し、日外垂訪の謝を致して云ふ。〕
*日外〓先日。日外をさす。〔訓注 空華日用工夫略集〕

『空華日用工夫略集』康曆二（1380）年八月一四日

右に提示した川例の中で、書簡では「いつぞや・先日」の意味で多く用いられているが、振り仮名が付されない句のヨミは不明であり、「日外」は必ずしも「イツツヤ」のヨミではなく、「ニチガイ」あるいは「ジツガイ」のヨミである可能性は考えられる。蕪村は「コ」の安永七年の書簡では「口外」を用い、安永末・天明頃と推定される「書簡編（三〇〇 金篋宛 一月二七日付）」では「日外」ではなく

・まことに過日は御馳走に罷成辱奉存候。

と「過日」を用いる。その後の一茶の書簡でも

・秋冷候へども、弥御安清被成候や、奉賀候。されば、過日は別してありがたく、御蔭にて天窓の寒さを助かり申候。
（二八 文虎宛 文化一〇年九月）

・陽炎ばつば立、片道かたまり、漸心暖ニうつり申候。弥安清被成（候）哉、奉賀、されば過日は参り、長々御坐敷ふさげ、ありがたく奉存候。
（四八 希杖宛 文政元年二月）

・過日、御見廻の品ありがたく、御礼申上度、外は春迄と。
（一〇六補遺 呂芳宛 文政三年一月）
と見え、蕪村を境にして「日外」から「過日」に推移する様子が窺える。

続いて、『日本国語大辞典』の「日外」で表記する初出例が『好色一代男』から引用されていることから、西鶴に関する作品の中で「日外」の用法を提示してみたい。

せ、同じ心の水のみなかみ清水八坂にさし懸り此あたりの事ではないか。日外物がたりせし歌よくうたふて酒飲て

然も憎からぬ女は菊屋か参河屋蔦屋かと搜して細道の萩垣を奥に入れば 『好色一代男』巻一の七（19ウ）
ソ、知ぬ事か小川の糊屋の娘日が今天神兒をしをつてとにくさげにそしる。さては日外ふられたか。

『諸艶大鑑』巻一の二（11才）

夕、濁水大かたかすりて真砂のあがるにまじり日外見えぬとて人うたがひし薄刃も出昆布に針さしたるもあらはれしが是は何事にかいたしけるぞや
『好色五人女』巻一の二（3才）

『好色五人女』巻一の二（3才）

チ、空寝入をして見るに大吉が手をしめて日外の所は今に痛ますかといふ。『男色大鑑』巻一の二（8ウ）
ツ、奥右衛門飛出るを兵之助引とぞめ宇右衛門片手なき者をそなたの御手にかけるゝもおとなけなし。爰は私に給はれとはしり寄奥右衛門打せらるゝ汝なれ共日外の遺恨あれば命を我ら申請て打事なり。

『武道伝來記』巻一の二（12才）

テ、今一たびの命を諸神に立願せしに不思議に快氣して手もはたらき足も立程になりぬ。時に日外の遺恨やめがたく段々筆に残し具足甲を着ながら鑑取まはして
『武家義理物語』巻三の二（9ウ）

『武家義理物語』巻三の二（9ウ）

ト、そのちまた此宿へ通りがけに立よりけるに人うつけたりとて鬨まじき事とて亭主のかたりけるは日外女房よびし男は中世古といふ所に松坂屋清藏とて身過にかしこき世間思なる男なりしが

『懐視』巻一の二（1才）

ナ、さても臆病なる大臣かな太夫本の湯の子くはれた物てあらう口外長町の若き者共今宮の神前にて百物語したれば少人か出たといふ
『難波の兒は伊勢の白粉』巻二「松玉小大夫若女方」（16ウ）

ニ、日外炭木屋の茶づけめし勝手のいそくにやすくし茶のぬるきやうにおもはれて今一はいといふ時。其盆に小判十兩入て内證へおくられしも此道の帥めきておかし。
『西鶴俗つれづれ』巻一の二（9才）

ヌ、日外の生加賀のひとへ羽織すこし長く候。小男のおかしく候。忒寸四五分切申度候
『万の文反古』巻一の四（17ウ）

『万の文反古』巻一の四（17ウ）

右のほかに、『好色一代男』巻三の二（8ウ）巻八の二（5オ）、『諸艶大鑑』巻六の四（16オ）巻七の三・五（13オ・19オ）、『好色五人女』巻四の四（15ウ）巻五の二（7オ）、『男色大鑑』巻一の五（24ウ）、『武道伝來記』巻四の二（9ウ）巻八の一（6オ）、『武家義理物語』巻三の二（8ウ）にも用例があり「いつぞや」と振り仮名が付される。この振り仮名に関して、杉木氏は前掲の書で

難読のためのふりがなは、おそらく西鶴個人というよりも、書肆が主體的に付したと思う：（一）内省略：。ともあれ、西鶴がふりがな（大和詞）を与えた漢語は、多分に意図的であるといえよう。（一七九頁）

と記す。その漢語の中に、一節の「婀娜」などともに今回の「口外」があり

右はいわゆる宛字と區別して、私は宛読みと呼ぶ。：（略）：日本語に不足している部分を、漢字を素材におくことによつて幅と奥行をもたせるのである。（一七九頁）

と、西鶴の漢字による表記には漢語と読みがなの独特な用法があることを述べている。「口外」を何故「イツゾヤ」と読めるかを考えたときに、「今日以外のH」と解釈するならば、今日Hを軸として過去のHのみではなく前後の口を意味する事になり、義訓とするには理に適わない点がある。しかし、文脈上過去の事象と併用されることにより「イツゾヤ」の熟字訓が成立する。西鶴に関する作品の「いつぞや」に対する表記には仮名書きと漢字の二種があり、漢字では「口外」のみが用いられ、それ以外の漢字は使用されない。西鶴が「いつぞや」を漢語化したようにとしたときに、筆にのぼったのが「日外」であり、西鶴の中では「いつぞや」の漢語として定着するようになつたと言える。これらの「日外」は昨日や一昨日ではなく、それより少し前の日を意味し、いづれも漠然とした表現法を採用し、そのHがいつであつたかよりは、下接される事柄に重点が置かれる。この漢字表記は、一連の研究対象とする一〇俳諧集には出現せず、ここに挙げた用例の中で、「ス」以外は、延宝二年（1674）を初めてして近世での作品である。しかし、「ス」の『空華日用工夫略集』のような例があるのなら、すでに近世以前に用いられていて近世へ引き継がれた語であることは言うまでもない。

当該集では、以上のような熟字訓に、いまひとつ、「織姫」に「タナハタ」と振り仮名を付す例がある。

腰もとの亀がとゞじやと夕月に（三六三 西六） のつてまいつた織姫の牛（三六四 西鶴）

右の三六四番の句は牛を牽牛と見立て、それに「織女」を対応させて「たなばた」の漢字表記に「織姫」が選択されたと見る。『大言海』には「たなばた 一棚機」に「機織ル女。転ジテ、七夕ニ祭ル織女ト云フ星ノ稱。又、オリヒメ。」などの語釈が施され、『日本国語大辞典』でも「特に、織女星をいう。」とある。『節用集』では、明応五年本・天正十八年本・饅頭屋本・黒本本・易林本・合類節用集・書言字考節用集に「織女」の収録があり、『書言字考節用集』の「ヲ」の項（第一冊36）では「織女」と見える。これらを考え合わせて、「たなばた」に当てる「織姫」の表記は、語の本義から大きく外れてはいない熟字訓であると言える。

二 当て字

さらに、熟字訓以外に、当て字では、「正体」に「性躰」、「明星」に「明上」、「丈夫」に「上夫」、「石（の帯）」に「胃糸（の帯）」のような用字が出現する。前項の熟字訓は漢字一字にヨミが対応することなく、表記された漢字の義によりヨミが与えられるが、当て字は義に直接的には関係なく、漢字の音訓を利用して構成された表記を言う。上記の四語の漢字表記は節用集に収録がなく、『古典俳文学大系』、あるいは西鶴の作品でも用例を探し出す事が出来ない。

◆ 「性躰」

月の影落て行とものかすまい（一六三 西鶴） 瘡の性躰風の夕露（一六四 西花）

と当該集に見え、前句の「落て」は瘡が治ることを意味し、「落て」から瘡（マラリア）の正体が「風に吹かれた夕露」のように消えたと付ける。表記する漢字は異なるが、「正躰」では次のような用例が見える。

- ・正躰もならもろはくのやよひ哉 親重 『犬子集』巻第二 六一七
- ・月の劔二尺斗を落し指 正躰すさまじ尻声かない 『西鶴大矢数』第三八・横何(31才)
- ・いざ正躰見せ給へど。蒲團をまくれば 『武道伝来記』巻五第四(19才)

これらのほかに「正躰」の用字は、俳諧では『鷹筑波』(三八八四番)、『犬子集』(一一〇〇・一九八六番)、『崑山集』(二〇〇二・六四〇二番)、『玉海集』(二八四二番)、『ゆめみ草』(二五四〇番)、『投盆』(四一六番)、『金龍山』(二五七〇番)などに出現する。また、俳諧以外の西鶴に関する作品では、『武道伝来記』巻三の三(13才)・巻一の四(24ウ)、『新可笑記』巻一の六(24ウ)・巻四の二(11ウ)などにも見えるが、「性躰」の用字を見出すことはできない。『大漢和辞典』には「性體」の漢語の収録があり、「性體クセイ」とあり、北史『杜弼傳』から「若論性體、非シ恢非シ寛」の用例が示されている。「正體」では「正體ケイ」正しい姿。本體。正しい血すぢのもの。太子。ただし書体。」などの語釈が見える。「シヤウタイ」は日本特有のヨミであり、語意には「こころ。正気。本當の姿」などと記され、『日本国語大辞典』でも「そのもの實際の姿。本体。正気」などとある。『大漢和辞典』の「性體」の意とする「心の本体」と、『大漢和辞典』『日本国語大辞典』での「正体」の意にある「正気」とは無関係ではなく、右の『犬子集』六一七番の句を例にとつて見ると、お洒を飲みすぎて正気を失った状態を「正体」から「性躰」に置き換えても、あながち間違いとは言えないだろう。当該集一六四番の句では、「癪の性躰」を比喩的に用いていると考えられなくてもないが、真意は不明であり憶測に過ぎない。

◆「明上」

当該集には次のように詠む句が見える。

明上メイジョウや石火の影の莫若盆ツケバシ (一九五 西友) 局のそけは玉津ひめ (一九六 西六)

右の一九五・一九六番の句では、明星の輝きでタバコ盆が見え、端女郎の部屋をのぞくと美しい女郎の姿が見えたと、空が明るくなりかけた明け方の情景の描写に「明上」と表現している。これは新しい表現を指向した結

果の「明星」の当て字である。したがって、意図的な文字遣いであり、誤用ではない。

- ・明星メイジョウか市立跡のあれ屋敷 『大坂独吟集』巻上(1.25才)
- ・作り声阿漕アウカウか浦へ廻つたか 月に鼠鳴明星メイジョウか茶屋 『西鶴大矢数』第八・何牧(31ウ)
- ・そのまま腰こしより矢立やたての筆染ふでぞめて明星メイジョウが茶屋のびくに七八丁もつきてさまさま口をたたき 『西鶴織留』巻四の二(18ウ)

「明星」では以上のような用例があるが、これら三例はいずれも地名を表すものである。

◆「上夫衆」

是は又旅行の暮の自身番 (八三 西花) 都へのほりたまふ上夫衆 (八四 西友)

『定本西鶴全集』の注釈によると、八四番の「都へのほりたまふ」は謡曲「松風」の「行平都にのぼりたまひ」を典拠としてしていると記され、「上夫衆」には「用例を見かけない。身分の高い人の意であらう」と注が施される。辞書には「上夫」はないが「丈夫」には名詞と形容動詞の二通りがあり、当該句の意と名詞の意が一致する。

○『日本国語大辞典』

じょうぶ **【丈夫】**〔名〕(「じょうぶ」とも、昔、中国の周の制で、八寸を一尺とし、一〇尺を一丈とし、一丈を男子の身長としたところからいう)(1)一人前の男子。(2)心身ともにすぐれた男子。勇氣ある立派な男子。大丈夫。ますらお。(3)夫。良人。

じょうぶ **【丈夫】**〔形動〕(1)身に少しの疾患、損傷もなく、元氣であるさま。すこやかなさま。壮健。達者。(2)しっかりとっていてこわれにくいさま。堅固。(3)たしかなさま。確実なさま。

○『大漢和辞典』

【丈夫】 フヂョウ (一)をとこ。ますらを。(二)才能の衆に過ぎた人。(三)をつと。夫。(四) フヂョウ 健康。強いこと。◎堅固。かたいこと。

「丈夫」には以上のような意味があり、「松風」に登場する在原行平を「心身ともにすぐれた男子」と見て、八四番では、都へ「上る」との関連から、「上る」と「普通の人よりも上の尊貴な人」という意を懸けて、或は形容動詞の「丈夫」と区別するために「丈」に「上」が選択されたと解釈できる。

○『文明本節用集』(1475頃)：丈夫(「丈」の左訓「ハガル」、「夫」の左訓「ソレ・ヲツト」)(173態藝門)

○『合類節用集』(1680)：丈夫(巻三・人物部) 丈夫(強云)(巻八上・45 言語部)

○『書言字考節用集』(1717)：四・15 丈夫(句會周、制八、寸、為尺、十尺、為丈、人、長八尺故曰丈夫、論衡入形以「丈」為正故名「男子」為丈夫、尊翁、為丈人、出未)

「丈夫」は中国本来の漢語であり、古くには『齊策遺文』(文字編・人々傳・家伝上)に「或語云、雄壯丈夫二人、恒從公行也」と見え、『太平記』(巻一八越前府軍)には「此人丈夫ノ心ネヲハシテ、加様ニ思ヒ給ケルコソ憑シケレ」と、雄々しく才能の衆に過ぎた立派な男子を表現する一文が見える。形容動詞「ヂヤウブ」は名詞形から派生した日本での用法であり、現在での通用語となっている。名詞での近世以降の用例を次に提示しておきたい。

・富家喰肌肉丈夫喫菜根、予ハ乏し。 『芭蕉集』発句編(一六八一年)(二・三番前詞書)

・ひとりの丈夫の語りつるは爰にもめづらしき人こそ出来り侍る 『近代艶隠者』三・五(一六八六年)

・されど此詞の過当にして、他門の宗匠にもはゞかるべければ、いつかは我門に丈夫の人ありて、此詞を百世に伝へん、是さらに家訓の密語ならんとぞ。 『十論為弁抄』(俳諧、古人)(一七二五年)

・大根のからみのすみやかなるに、山葵のからみのへつらひたる匂さへ例の似而非ならん。此後に丈夫の人ありて心のねばりを洗ひつくし、剛からず柔ならず、俳諧は今日の平話なる事をしらば、はじめて落柿舎の講中となりて箸箱の名録に入べしとぞ。 『十論為弁抄』(洛陽、風土)(一七二五年)

・然るにあるじかつてある先生の門に乞て、号を指峯と定けるとぞ。其意いかならむ。あるじもおぼろくと

して、予に此記を書いてと求む。されば思ふに、高きを望む丈夫の志を表せるもの歟。

『鶉衣』(指峯堂記)(一七八七・八八年)

・病人は眠るが如くに身まかりぬ。朝露夕電脆きは人の命なり。恭輔のかなしみはいかばかりなりけん。目になぬ丈夫の死別は。思ひやるさへにいと痛まし。 『内地雑居未来之夢』第二回(坪内逍遙)(一八八六年)

◆胃糸(の帯)

醜ふなられた貴妃の面影 (三七二 西花) 妊まして腹をかゆる胃糸の帯 (三七三 西花)

「胃糸の帯」は『定本西鶴全集』の語釈に「石帯。束帯の時、袍の腰をつかねる草帯」とある。胃は腰の近くに位置すること、糸は帯との縁語でこの当て字を用いたのではないか。「胃糸」は辞書類に収録がなく、用例も見出すことができない。辞書類では『書言字考節用集』に「石帯(第七冊・1 服食門)」と収録がある。

用例

・谷ごしにとけぬ氷や石の帯 八七六 正吉 『崑山集』(巻一・春部・春水)(一六五一年刊)

・きそ始なつともつきじ石の帯 六九〇 令徳 『歳旦発句集』(明歴二年)

・石の帯しても又々痛出し(一三三六 千石) 諫のしるゝ母の藤原(一三三七 芦江) 『金龍山』(一七一二年刊)

以上の木項での当て字四語は、語の本義と何らかのつながりを持ちながら視覚的な新しさや面白さを出すために採用された戯書の一環であると言える。

おわりに

これまでの考察の結果、次のようなことが認められた。

第一には、「日外」は中国本来の漢語の意味から離れ、『新編大言海』（昭和五七年新編版初版発行^①）では『大言海』の和漢通用字から、和製漢語に転じている。とすれば、『唐話辞書類集』（應氏六帖）の出典注記並びに〔サ〕の用例『名物六帖』に掲載される『五老集』の「日外」、『色香歌』での「日外」に問題が生じ、これらは中国の書であるのか、両者の著者についてなど再考を要する。

第二には、二項で取り上げた「明上・性牀・上夫・胃糸」などの当て字では、元来ある漢語の文字を入れ替えて、遊戯的な文字遣いを行い、読み手の意表に出る漢字の用法を採用している。

当該集は西鶴編で、板下は水田西吟である。本節で扱った六語の句の作者は、「日外」（西六）、「織姫」（西鶴）、「性牀」（西花）、「明上」（西友）、「上夫衆」（西友）、「胃糸」（西花）というようにそれぞれ異なり、句の作者個人の表記によるものではない。且つ誤字でもない。新しいがりの西鶴が目新しい当説みを採用する事により、或は有意的に和製漢語を創作する事により、軽妙で機知滑稽に富む効果を表出しようとしたことは明白である。

注

1、『西鶴語彙管見』杉本つとむ 昭和五七年 ひたく書房

2、『五老集』慶安三年（一六五〇）正月 京都村上平楽寺刊本（『和刻本漢籍文集第二十輯』長澤規矩也編 昭和五四年 汲古書院）

参考文献

『一茶集』古典俳文学大系一五巻 昭和四五年 集英社

『鶉衣』（『中興俳論俳文集』古典俳文学大系一四巻 昭和四六年 集英社）

『犬子集』（『初期俳諧集』新日本古典文学大系 一九九一年 岩波書店）

『大坂独吟集』近世文学資料類従 古俳諧編 29 昭和五一年 勉誠社

『近世漢字文化と日本語』村上雅孝著 二〇〇五年 おうふう

『近代艶隠者』近世文学資料類従 西鶴編 23 昭和五〇年 勉誠社

『金籠山』（『享保俳諧集』古典俳文学大系一一巻 昭和四七年 集英社）

『空華日用工夫略集』義堂周信著（辻善之助編兼著 昭和一四年 太平洋社）

『訓注 空華日用工夫略集』藤木英雄著 昭和五七年 思文閣

『好色一代男』（大坂版）近世文学資料類従 西鶴編 1 昭和五六年 勉誠社

『好色五人女』『諸艶大鑑』近世文学資料類従 西鶴編 3 昭和四九年 勉誠社

『滑稽太平記』『臧旦発句集』（『貞門俳諧集 一』）古典俳文学大系二巻 昭和四六年 集英社）

『崑山集』近世文学資料類従 古俳諧編 23 昭和四九年 勉誠社

『西鶴大矢数』近世文学資料類従 古俳諧編 31 昭和五〇年 勉誠社

『西鶴織留』『西鶴俗つれづれ』（『新編西鶴全集 第四巻・木文篇』新編西鶴全集編集委員会 平成十六年 勉誠社）

『十論為弁抄』（『蕉門俳諧集一』）古典俳文学大系六巻 昭和四七年 集英社）

『蕉門名家句集 二』古典俳文学大系九巻 昭和四七年 集英社

『諸艶大鑑』近世文学資料類従 西鶴編 3 昭和四九年 勉誠社

『吾札調法記』『新撰用文章明鑑』近世文学資料類従 参考文献編 5・6 昭和五一年 勉誠社

『新可笑記』近世文学資料類従 西鶴編 11 昭和四九年 勉誠社

『新編宗因書簡集』（『談林叢談』野間光辰著 一九八七年 岩波書店）

『太平記』日本古典文学大系 一九八二年第二一刷 岩波書店

- 『定本西鶴全集』 巖原退藏・岫峻康隆・野間光辰編 昭和四七年 中央公論社
- 『唐話辞書類集』 第一集から第二〇集 古典研究会 昭和四四年・四五年 汲古書院
- 『内地雑居未来之夢』 坪内逍遙 大正一五年 明治文化研究会
- 『中村幸彦著述集 第七卷』 中村幸彦著 昭和五九年 中央公論社
- 『難波の兄は伊勢の白粉』 近世文学資料類従 西鶴編 20 昭和五一年 勉誠社
- 『寧楽遺文』 下巻 竹内理三編 昭和四七年 東京堂
- 『男色大鑑』 近世文学資料類従 西鶴編 7 昭和五〇年 勉誠社
- 『芭蕉集 全』 古典俳文学大系五巻 昭和四五年 集英社
- 『武家義理物語』 近世文学資料類従 西鶴編 10 昭和五〇年 勉誠社
- 『武道伝来記』 近世文学資料類従 西鶴編 8 昭和五〇年 勉誠社
- 『懐視』 (『新編西鶴全集 第三巻・本文篇』 平成一五年 勉誠社)
- 『蕪村集 全』 古典俳文学大系一二巻 昭和四七年 集英社
- 『本居宣長翁書簡集』 昭和九年 啓文社
- 『万の文反古』 近世文学資料類従 西鶴編 18 昭和四九年 勉誠社
- 『名物六帖』 伊藤東涯著 一七一四年白序 (昭和五四年 朋友書店)
- 『和刻本漢籍文集』 第二十輯 長澤規矩也編 昭和五四年 汲古書院
- * 「正體」の用例に挙げた『鷹筑波』『崑山集』『玉海集』『ゆめみ草』『投盃』は『古典俳文学大系CD・ROM』(集英社)による。

結 語

本章に挙げた語以外にも、もっと多くの用字考証を必要とする語があるけれども、とりあえず、『江戸八百韻』から「婀娜・艶・哆」の三語、『常流籠技』から「悶る」の一語、『西鶴五百韻』から「H外・織姫・明上・性躰・上夫衆・胃糸の帯」の六語を取り上げて、考証を試みてきた。

第一節の「婀娜・艶」を「ヤサシ」と読むことは、節用集に収録が見え、また、後の西鶴の浮世草子でも用いる例が見える。『江戸八百韻』のこれらの二語は、同じ「ヤサシ」でも使われる場面に違いがあり、漢字を使い分けることによって、それぞれの情景に適した表現法を採用している。

第二節では、「悶」を「イキ(る)」と読む例は、文芸作品・辞書類において探すことは出来なかったが、古辞書を通して、「悶」が「いきる」のヨミに至った過程は明らかにすることができた。この漢字と振り仮名の表現法は、杉本つとむ氏の言葉を借りれば、「日本語に不足している部分を、漢字を素材におくことによって幅と奥行を持たせ」た用法であり(『西鶴語彙管見』一七九頁)、一語で二重の効果をねらう趣向を凝らした用法であると言える。

第三節では、『江戸八百韻』に出現する「哆」の用法について検証を行った。しかし、文献での証例を探すことに努めたが、求め得ることは出来なかった。『古文書辞典』に「あつかひ」の項の見出し字の一つに「哆」があるものの、その例文が登載されていないことは、疑問である。当時の和訓として通行していなかったことは確かだろう。今後とも検討して行く必要があると考える。

第四節では、有意的に熟語の一字を置き換え、読み手に視覚的な印象を与える漢字の用法、あるいは中国での本義と対応しない熟字訓を対象に考察を重ねてきた。そこには、「明星・正体・丈夫・石帯」などの和製漢語も含まれた漢語を「明上・性躰・上夫・胃糸の帯」のように、漢字列の一字を置き換え、斬新さを志向する意図がうか

がわれた。

以上の本章で取り上げた語の中には、証例が見つからない語もあり、証例が見られる語についても、用例はそれほど多くはない。「悶る・唸」などは、二重イメージの機能を持つ振り仮名であり、俳諧者の自由な発想による独自の用法である。そこには、俳諧特有の面白さや新しさが託されていると言えよう。

第三章 仮名遣から見た近世初期俳諧集

―語頭に「お(オ)」「を(ヲ)」が付く語について―

導言

第一章と第二章では、近世初期俳諧集の表記の研究において、漢字を中心とした問題を取り上げてきた。本章では、視点を転じて仮名遣の観点から考察を加えていきたい。

本文中の仮名表記の語頭に「お・を」が付く語と振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語を取り上げてみると、両者には同語において「お↓ヲ」「を↓オ」の相違があること、また、本文中の仮名表記の同一の語において、俳諧集による仮名遣の相違・同じ俳諧集中での相違があることなど仮名遣が統一されているわけではない。

そこで、第一節では、本文中の語頭に「お・を」が付く語と定家仮名遣を比較し、定家仮名遣を規範としているか、仮名遣の様相を展開して行きたい。俳諧は、和歌や連歌の線上に位置するけれども、雅語ではなく日常語が用いられ、定家仮名遣を規範とする前時代の韻文とは、仮名遣に相違があると考えられるからである。

第二節では、振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語について、本文中の仮名表記語との比較と同時に、定家仮名遣・節用集と比較して検討していき、蕉風に入る前の近世初期の俳諧を一つの文字領域として、それぞれの俳諧集での仮名遣の傾向を示すことを目的としたい。

なお考察に際しては、語中語尾は問題とせず、本文中の仮名表記と振り仮名の語頭の「お(オ)・を(ヲ)」のみに焦点をおき、定家仮名遣に準拠しているか、あるいは節用集と共通しているかなど、定家仮名遣を基にする仮名遣書、及び節用集を参照しながら、検討を進めて行く。

仮名遣書は、天文二十一年本『仮名文字遣』・『定家卿仮名遣』（文明本仮名文字遣所収）・不忍文庫旧蔵写本を底本とする『下官集』（以上『国語学大系』第六卷 昭和五六年 国書刊行会）、並びに文明十一年本『仮名文字遣』（東大本 駒沢大学国語研究 資料第一 昭和五五年 汲古書院）を参照し、本文中「定家仮名遣」と表現するのは、上記の四種の仮名遣書によるものである。今回テキストとする俳諧集は、歴史的仮名遣を主張する『和字正濫鈔』（一六九五年刊）刊行以前の二六四八年から一六八一年成立の一〇作品集であるので、『和字正濫鈔』を参照の対象からは除外した。また、『節用集』は伊京集（伊）・明応五年本（明）・天正十八年本（天）・饅頭屋本（饅）・黒本本（黒）・易林本（易）・合類節用集（合）の七種と適宜他の古辞書を使用する。

以下、本章中「仮名表記語」は本行に平仮名で書かれた語を表すものであり、（ ）内は節用集・俳諧集の略称、及び割書きを示し、（ ）内の／は改行を示す。また、『古典俳文学大系』での用例の検索には『古典俳文学大系 CD・ROM』（集英社）を使用し、傍線、及び句番号（各作品集での通し番号）は『古典俳文学大系 CD・ROM』（集英社）を参考に編者が付記したものである。

第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語―定家仮名遣を通して―

はじめに

近世の戯作における仮名遣では、屋名池誠氏（二〇一）^①が、仮名遣に秩序がないとする否定的な評価に対して、正確に音形を示しているから、それが秩序であるとする（「近世通行仮名表記」―「濫れた表記」の冤を雪ぐ^②）『近世語研究のパスブックタイプ』一七一頁）。

それならば、近世初期俳諧集ではどうかであるか、本節では、俳諧集により仮名表記に差異がある語があること

を問題点の一つとして、本文中の仮名表記語の仮名遣について考察を進めていきたい。

定家仮名遣に関しては、大野晋氏（一九七七）^③が

仮名遣という、伊呂波の仮名の使い分けに関する規範の設定と、その実行という問題は（略）藤原定家に始まり、その学問につらなる行阿の『仮名文字遣』などによって中世の歌文の世界の常識となった。しかしまた、すでに見たように定家自身は世間にこれを強いるつもりはなかったらしい。ことに「お」「を」に関してはアクセントによることであつたから、文字化することが困難でもあり、伝達には口伝という形式に頼らざるを得なかつた。（『^④出典 漢語 日本語 8』二二〇頁）

と述べる。

一方、小松英雄氏（一九九八）^⑤は、定家は証本テキストを整定するために「仮名の綴りを挾一的に決定する必要があつた」（『日本語書記史原論』一七五頁）と述べ、「定家はみずから開発した文字運用の規範を子息の爲家にすら伝授した形跡が認められない」（同書一八二頁）とも記し、前掲の大野氏とは異なる見解を示す。

中世の仮名遣の実態では、安田章氏（二〇〇九）^⑥が「表記の分野は個人の自由になる領域を多く持つ」（『仮名文字遣と国語史研究』三頁）とし、中世の様々な仮名資料を取り上げて、「お」から「を」への書き替えによる現象など、仮名遣と同時に仮名文字遣について詳しく論述されている（同書第一章 仮名文字遣原論）。

また、近世の具体的な例では、酒井憲二氏（二〇〇〇）^⑦が『寛永諸家系図伝』（一六四三年完成）の仮名本を取り上げ、当時通行の仮名遣の根幹は、「定家仮名遣」（行阿の『仮名文字遣』の源流としての）にあつたとすべき」とし、「契沖の『和字正濫鈔』によって復古訂正される以前の姿を留め」「本書に見られる仮名遣いは幕末明初まで影響を与えた可能性が濃厚である」（『国語と国文学』77―3―二頁）と記す。そこには、定家仮名遣とは一致しないが、俳諧の仮名遣と共通する語が見え、幕府編纂の武家系譜集であり、その影響を看過することはできないだろう。

本節と同じ俳諧の仮名遣の先行研究では、今野真二氏（二〇〇一）⁵が荒木田守武の独吟千句の仮名文字遣を中心として

注目すべきは守武という、「和歌・連歌世界」という一つの（文字社会）に身をおいていたであろう人物の表記に統一のと見なし得るだけのかなづかい並びに「仮名文字遣」がみられるということである。

（『仮名表記論攷』清文堂 二八五頁）

と守武個人としての文字遣の実態とし、今回の調査結果と重なる部分が予想される。

さらに、寺島徹氏（二〇〇六・二〇〇八）⁶は、江戸中期の俳諧の仮名遣について、蕪村・晁台・也右・士朗を対象に、定家仮名遣・歴史的仮名遣・近世通行の仮名遣の観点から、それぞれを比較分析し、ここでも、個人により仮名遣の傾向が異なることを明らかにされている。

以上のような先行研究を踏まえ、俳諧集による特徴が見られるか、定家仮名遣・節用集との関係はどうであるかなど、近世初期俳諧における仮名遣の実態を提示して行くことにする。

一 仮名表記語と定家仮名遣の関係

定家の仮名遣では最も重要な項目であるとされている語頭の「お・を」のみに焦点を置き、一〇俳諧集の本文中に見える「お・を」が語頭に付く仮名表記語を取り上げ、俳諧集別に定家仮名遣と照合した結果を提示したのが【表一】である。

【表一】の仮名表記語は、一つの俳諧集の中では異なり語数であるが、他の俳諧集にも出現する語は重複することになる。また、定家仮名遣と一致しない語の中に、『正章千句』では「おどり」が一回、『紅梅千句』では「おどし」が二回、『常流籠抜』では「おく」が一回、『江戸八百韻』では「おめて」が二回出現するので、不一致の

延べ数は一六語となる。仮名表記の異なり語二二〇語中、定家仮名遣と一致する語には、定家仮名遣に準じるとした語、例えば、接頭辞「お」を用いる約三一語なども含めると一八九語があり、一致する割合が約八五・九%を占め、俳諧では概ね定家仮名遣に準拠していると言える。

大野晋氏によれば、定家仮名遣の「お・を」の分類は『色葉字類抄』のアクセントに基づくものである（前掲の書三一五頁）。よって、定家仮名遣に収録がない語を『色葉字類抄』（前田本・黒川本）の訓と照合してみると、次の語が収録されているのが確認できた。（―の下は『色葉字類抄』での収録状況）

・「おちぬ」（正）―「ヲツ（惶・怖）」（前田本 上八一ウ・黒川本 上六五オ）
・「おびたゞし」（紅）―「オヒタゞシ（夥）」（黒川本 中六七オ）
・「おもて」（紅・宗・西）―「オモテ（面）」（黒川本 中六四ウ）

右の四語の中には複数の俳諧集に出現する語もあり、『紅梅千句』『おびたゞし・おもて』、『宗囚七百韻』『おもて』、

『西鶴五百韻』『おもて』、『江戸宮筋』『おんぼう』、『七百五十韻』『おんぼう』の六語を定家仮名遣と一致すると見做せば、異なり語一九五語が一致し、不一致数は『正章千句』の「おちぬ」を加えれば延一七語となる。【表一】の定家仮名遣との一致度を俳諧集別に見た場合、『七百五十韻』では、定家仮名遣に収録がない語を除くとすべて定家仮名遣と一致し、『常流籠抜』は基礎となる語数が少ないが最も一致度が低い。

次に、一つは定家仮名遣に準じるとした語について、もう一つは【表一】の中で、定家仮名遣と一致しない「お」一〇語（延一四語）に定家仮名遣に収録がなく、『色葉字類抄』と一致しない『正章千句』の「おちぬ」を加えた一五語と、定家仮名遣と一致しない「を」を用いる二語の延一七語を以下①から⑩に示し、それらが他の俳諧集での使用状況はどうであるか、用例を挙げ検討していくことにする。

○定家仮名遣「を」に対して「お」を用いる語（延一五語）

正章千句：おそひ・おとゝ・おどれ（二句）・おちぬ／紅梅千句：おそはれ・おどす（二句）／江戸八百韻：おみて（二句）／當流籠拔：おく（二句）／西鶴五百韻：おのれ／江戸蛇之鮓：およぶ／江戸宮筒：おっ立られ

○定家仮名遣「お」に対して「を」を用いる（一語）

宗因七百韻：をもき／軒端の独活：をよぐ

【表一】（俳諧集は上から成立年代順）

定家仮名遣との関係						仮名表		正章千句 紅梅千句 宗因七百韻 江戸八百韻 當流籠拔 西鶴五百韻 江戸蛇之鮓 江戸宮筒 軒端の独活 七百五十韻 合計
収録なし	不一致数		一致数		記語			
	を	お	を	お	を	お		
1	2	0	3	10	38	11	43	
1	4	0	2	10	28	11	34	
0	3	1	0	2	22	3	25	
0	0	0	1	3	14	3	15	
0	1	0	1	0	5	0	7	
0	2	0	1	1	13	1	16	
0	0	0	1	3	8	3	9	
0	1	0	1	1	5	1	7	
0	3	1	0	2	9	3	12	
0	1	0	0	3	12	3	13	
2	17	2	10	35	154	39	181	

おろし・雪をれ・格子をり・逆おとし・宿おり」などのように、複合語の後部構成素となる語を加えなかった。

二 定家仮名遣に準じると見做した語

語頭に「お・を」が付く語を仮名遣書と照合した結果、ここでは、定家仮名遣に準じるとした語について言及していきたい。

◆語頭に接頭辞「お」が付く語

○おぐし―あたらおぐしをはさまれにけり 五一六 『正章千句』

拾遺をやおぐしすまして読ぬらん 七一 正章 『紅梅千句』

両句の「おぐし」は「小櫛」ではなく髪カミの敬語と解し、定家仮名遣に「おくしけつり 御頭梳」の収録があるので一致するとした。

○おかべ―とゝにおかべは露も及ばず 四〇七 『正章千句』

前句の「田菜」からの付合で豆腐を意味する「御壁」と解する。「御壁」は定家仮名遣には収録されていないが、定家仮名遣での「御」は「おん」「おほん」の収録と同時に、「おはします（御坐）」「おぐし（御櫛）」とあるので、定家仮名遣では「御」に対する仮名遣は「お」であるとするとする。

○おりやる―老人夫婦ようおりやつたの 四三〇 一鐵 『江戸八百韻』

「おりやる」は「お入りある」の変化した語で、「お」は尊敬を表す接頭辞である。よって「おかべ・おぐし」と同じく定家仮名遣に準じるとした。

○接頭辞「お」が付く語には、ここに挙げた三語以外にも、「おつかへ人・おねむ・おふくろ・おなつかし・おなびき・おまへ・おより・おかた・おききやれ：」など、全体で約三一語があり、これらは定家仮名遣に収録がな

いが、定家仮名遣に準じるとした。

◆その他（二通りの意味に取れる語・定家仮名遣に複数の収録がある語）

○おとす―請人の舅コソぼんおとす袖の花 三二一 鬼貫 『當流籠抜』

柵せき戸はおとしもあへぬ風情にて 五六五 『正章千句』

前者の「袖の花」は「くすだま」のことであり、「くす玉を落す」と解釈した。後者の「おとし」も戸の樞をおとす意であり、「おとす」ではない。よって、定家仮名遣に「おつ（おつる／とも） 零落」とあるので準じるとした。

○おくれじ―かる業わざの子ともは蝶におくれじと 九七 泰徳 『江戸八百韻』

『仮名文字遣』には「をくれて 後 終」の収録のみであるが、『下官集』に「をくる・おくる」両者の収録があり、対応する漢字は表記されていないが一致すると見做した。

○おはる―終には命おはるまさかど 三八四 西鶴 『西鶴五百韻』

『仮名文字遣』に「をはるりとも 終 了 畢 訖」（五ウ）「おはつて 已」（12才）の収録があるので「おはる」は一致するとした。

○おしとどめ―土車わりなく道におしとどめ 一〇八三 『正章千句』

定家仮名遣には「おしとどめ」の収録は見えない。「をし明かた・をしなへて…」など、複合語の前部構成素は「をし」と表記される。右の句と同じ『正章千句』の中で、「をしまづき（二〇七番） をしはかり（三九五番）をしやり（六八八番）」や、同じ正章が清書した『紅梅千句』でも「をしひたし」（一七一番）とある。但し、同じく正章が注を施した『俳諧の註』（一〇二番の自注）には、「おしとどめ」の用例が見え、正章個人に「おし」と「をし」のゆれが窺える。単純語「押す」では、『仮名文字遣』に「をす」（文明十一年 東大本）「をさへて 押

抑」と収録されていると同時に、「おして春雨」「むまをおさへて」も収録があるので、『西鶴五百韻』での「おさえ・おせば」、『軒端の独活』の「おさへ・おされ」も一致するとした。

三 定家仮名遣と一致しない語

次に定家仮名遣とは一致しない語について、『古典俳文学大系CD・ROM』により用例を検索し、俳文学作品での実態を提示していきたい。（各語の下の「」内は定家仮名遣を示す）

◆語頭の「お」に対して、定家仮名遣では「を」である語

○おそひ「をそしをそき 遅 晩」

①なぜに今夜の月はおそひぞ 七七四 『正章千句』

用例では、「お（を）そし・お（を）そき・お（を）そう」を含め、「お」が約四例、「を」が約一一例見えるが、『古典俳文学大系』五巻以降を含めると、「お」が約一一例、「を」が約一二例と「お」の方が多くなる。

○おとと草「をとと（おとと）ひの時はお也／おとうとの時もお也（弟）」

②菊の名もおとと草とてむしり捨 一〇三七 『正章千句』

「おとと草」は梅を花の兄として、菊は遅く咲くところから「弟草」と異名がつけられたものである。定家仮名遣に「おとと草」は収録されていないが、「をとと 弟」と収録があるので不一致とした。用例では「おとと」が二例、「を」では「をとと・をとと草・花のをとと」など六例が見える。但し、蕉風の俳諧以降は「をとと」が見えず、『古典俳文学大系』全体では「おとと」六例、「をとと」六例となる。

○おく「をく露 置露（露をきて／とも）」「をく 置措鷹たか呼／鷹たかヨフトヨム」

③夕暮は葦無の濱さいておけ

三二五 百丸 『當流籠拔』

④角かけておく御しら露

三七六 鬼貫 『當流籠拔』

「お(を)く・お(を)け・お(を)いて」の用例では、「お」が約二二例、「を」が約一五八例出現し、定家仮名遣と一致する「を」が優勢である。但し、用例における「置いて・於いて」などの判別が難しく、用例数は大よその数字である。

○おのれ「をのれ 己」

⑤おのれつかえば年のよる浪

四四四 西六 『西鶴五百韻』

・草履賣をのれとも云へ子規

一一七 猶水 『軒端の独活』

一〇俳諧集中、右の二句には「お・を」の差異があり、用例には、「をのれ」が一五例、「おのれ」が一三例で「を」が優勢であるが、蕉風以降も含めた『古典俳文学大系』全体では、「をのれ」が約五三例、「おのれ」が約八〇例で、①②と同様に「お」の使用頻度が高くなる。

○おどれ「をとる 踊躍」

⑥おどれくといふかわりなき

六一六 『正章千句』

⑦名残や惜き盆のおどり子

四三二 『正章千句』

「お(を)どり・お(を)どる・お(を)どれ」の用例では、「お」が約二二例、「を」が約三〇例見え、「くお(を)どり」のような複合語でも三五対一〇で「お」が優勢である。

○おそはれ「をそふ 襲」

⑧寒寝にはおそはれまじや小夜枕

八八一 政信 『紅梅千句』

用例では「おそはれ」が四例、「をそはれ」が二例、「をそふ・をそひ」では「お」は用いられず、「をそふ」が一例だけ見える。

○おどし「をとす 威 』

⑨源氏をおどす頭の中將

七五八 長頭丸 『紅梅千句』

⑩ほう引のわらはべおどす元興じ

九七九 長頭丸 『紅梅千句』

「鳥おどし・小桜おどし」などの複合語では、「お」を用いる用例が多数を占め、単純語「おどす・おどし」では約一八例、「をとす・をどし」が約五例出現する。

○おみて「をいて 於」「をひて 於」

⑪山陰の天津におみて喧嘩たて

五四三 一鏡 『江戸八百韻』

⑫上野におみてかゝる白雲

一三四 青雲 『江戸八百韻』

用例では「おみて」約一一例、「おいて」二例、「をみて」二例、「をいて」が二例出現する。

○およぶ「およはぬへをよふ時は／を也」不及」

⑬七百歳におよぶ古鎌

四〇一 言水 『江戸蛇之鮓』

用例では、およぶ六例・およばぬ四例・をよぶ一例・をよばぬ二例が見え、いずれの語形も語頭は「お」を用いることが多い。

○おつ立られ「をひ風 をひかせ 追風 逐風／をふへをひてとも」 追 逐」

⑭山公事にのほれくとおつ立られ

二八三 幽山 『江戸宮箆』

定家仮名遣に「おつ立られ」の収録はないが、「おつたつ」は「追い立てる」の変化した語であり、「追い」だけを定家仮名遣と照合し不一致とした。用例でも当該語句は見えず、「をふ(う)・をひ(い)・をはれ」約二二例、「おふ(う)・おひ(い)」約二二例出現する。

○おぢぬ『色葉字類抄』(前田本・黒川本)に「ヲツ(慄・怖…)」

⑮鍾馗の影もおぢぬ疫病

八三四 『正章千句』

「おづ」は定家仮名遣には収録がなく、『色葉字類抄』（前山本・黒川本）の訓により不一致とした。用例では右の句を除くと、「おぢぬ・おづ・おづる」が七例、「をぢぬ・をづ・をづる」では二例の用例が見える。

◆語頭に定家仮名遣と一致しない「を」を用いる語

○をよぐ「およく 游泳」

⑯唐杵や柄鮫をよくかたほ浪

一一八 立見 『軒端の独活』

・中といへば大盃をおよぐ也

三五五 如流 『江戸八百韻』

右の両句には「お」と「を」の差異があり、後者の「およぐ」が定家仮名遣と一致する。用例では、「およぐ・およぎ」が八例、「をよぐ・をよぎ」が右の『軒端の独活』を除くと二例の用例が見える。

○をもき「をもしへおもみの／時はお也」 重軽重也 「露おもみへおもきの時もお也／をもしの時はを也」露重

⑰笠に木葉のをもき跡付

六 幽山 『宗因七百韻』

右の句以外に『江戸蛇之鮎』（二・一・二番）『紅梅千句』（八八二番）『江戸宮筈』（四三一番）に「おもく」、『七百五十韻』（四二〇番）に「おもげ」が出現する。定家仮名遣には「おもき」とあるので、⑰の「をもき」は一致しない。「おもき」は約三〇例、「をもし」は右の句を除くと一例が『毛吹草』（巻六・五ノ四）に

露草やをもきが上の小夜時雨

一五五三 康廿

と見える。この句は、『崑山集』（四七三一番）『山の井』（四一一番）にも収録されるが、「をもき」は「おもき」と記され、定家仮名遣と一致する。

以上のように、定家仮名遣と一致しない語頭が「お」の仮名遣である①から⑯の語の中で、①から⑤の五語は、定家仮名遣と一致する「を」の用例数が優勢であるが、「お」の用例がないわけではない。したがって、定家仮名遣と一致しない「お」で記されるのは、一〇俳諧集中の特殊な現象ではなく、俳諧の中では通行していた仮名遣

と見ることが出来る。また、「を」の使用が優勢である語の中で、①「おそひ（遅）」②「おとと」⑤「おのれ」では、蕉風確立後も含めた『古典俳文学大系』全体では定家仮名遣と一致しない「お」の使用例が多くなる。この三語は『和字正濫鈔』巻二に

遅 おそし 万葉和名。をの字用へからず

弟 おとゝ 和名。おとうと同じ。共にをゝ用へからず。兄より年のおとれは劣人のこゝろに名付たる歟

己 おのれ 万葉におほし。をの字不可用

とあり、歴史的仮名遣への推移を示すものとして注意したい。同じ俳諧集の中で、同語に対する「お・を」の仮名遣が相違することは稀であり、それぞれの作品集の筆者により仮名遣に相違が見え、近世初期俳諧では、必ずしも和歌や連歌のように、定家仮名遣を規範とするのではない。

築島裕氏は『歴史的仮名遣 その成立と特徴』において

社会一般で統一的に仮名遣が行われるようになったのは、明治以来、近々百年ぐらゐのことに過ぎない。それまでは、世間に広く通用する仮名遣というものは存在していなかった。（七〇八頁）

と述べる。ここでの仮名遣は、今で言えば「現代仮名遣」「旧仮名遣」などの規則としての仮名遣を意味し、仮名遣が正しいか、誤りかという現代のような規定はなく、韻文や和文体において定家仮名遣を規範としても、それぞれ書く人により使い分けがあったと捉えられる。

おわりに

これまで検討を重ねてきた結果、仮名表記の語頭では「お」の使用頻度が高く、それらの多くは定家仮名遣と一致する。定家仮名遣に一致しない語の用例では、「お・を」両者の仮名遣が出現し、その仮名遣の差異は、俳諧

集の筆者が異なることによる。定家仮名遣と一致しない⑩⑪の「おみて」に関して云うならば、『信徳十百韻』『天満千句』『江戸八百韻』『江戸広小路』などの談林俳諧集で、この表記が用いられていること、あるいは、前掲の酒井氏（二〇〇〇）の『寛永諸家系図伝』に関する考察では、「おみて」が第一冊に九二例見え、序文以外では異例が見えない（三頁）、とあることから、当時「おみて」の表記は通行していたと捉えられる。また、清書者が同じ『正章千句』と『紅梅千句』の定家仮名遣と一致しない語では、前者が定家仮名遣に収録がないけれども、色葉字類抄と一致しない「おぢぬ」を加えると、異なり語で四語（延五語）があり、後者では異なり語で二語（延三語）がある。この清書者が同じ二つの俳諧集を合せると異なり語六語が定家仮名遣に適合しないことになる。この事象は他の俳諧集では、異なり語一語、または一致しない語が出現しないことと比較して大きい数字を示し、清書者正章の文字意識を窺い知る事が出来る。つまり、筆者個人が慣例的に用いていた仮名遣であり、近世初期の俳諧では、習慣として定家仮名遣の權威は保持されるものの、定家仮名遣を意識的には行っていないかたと考えられる。

注

- 1、屋名池誠「近世通行仮名表記」―「濫れた表記」の宛を雪ぐ（『近世語研究のパススペクティブ』二〇一一年 笠間書院）
- 2、大野晋「仮名づかいの歴史」〔『岩波講座 日本語8』一九七七年 岩波書店 改訂新版）
- 3、小松英雄『日本語書記史原論』一九九八年 笠間書院
- 4、安田章『仮名文字遣と国語史研究』二〇〇九年 清文堂
- 5、酒井憲一「近世初期通行の仮名遣いについて」『寛永諸家系図伝』『国語と国文学』77―3 二〇〇〇年 東京大学国語国文学会）

- 6、今野真二『仮名表記論考』二〇〇一年 清文堂
- 7、寺島徹「江戸中期における俳諧の仮名遣いについて」桜花学園大学人文学部 研究紀要第8号 二〇〇六年
- 8、寺島徹「江戸中期の俳諧句集における仮名遣いの用法について」桜花学園大学人文学部 研究紀要第10号 二〇〇八年
- 9、『色葉字類抄 研究並びに索引』昭和三十九年 風間書房
- 10、築島裕『歴史的仮名遣 その成立と特徴』昭和六一年 中央公論社

参考文献

- 『和字正濫鈔』（『契沖全集 第七卷』昭和二年 朝日新聞社）
『古典俳文学大系』一巻〜一六巻 昭和四五年〜四七年 集英社
（『古典俳文学大系』での検索には「CD・ROM（集英社）」を使用した）

第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

はじめに

前節では、語頭に「お・を」が付く本文中の仮名表記の仮名遣に焦点をおいて考察してきた。ここでは、語中語尾は問題としないので正確な数字ではないが、定家仮名遣と約八六%の一致を見た。本節では振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語の仮名遣において検討を加えていきたい。なぜならば

（一）仮名表記語の語頭は「お」が多用されるが、振り仮名では片仮名の「ヲ」が多用される。

(二) 振り仮名と本文中の仮名表記語の同語の語頭の間に、振り仮名の「ヲ」に対して仮名表記の「お」、振り仮名の「オ」に対して仮名表記では「を」を用いる語があり、両者に相違がある。

(三) 振り仮名の仮名遣で、同語において俳諧集による「オ」と「ヲ」の相違がある。

そこで、振り仮名の語頭の「オ・ヲ」と同語の仮名表記語の語頭の仮名遣の比較、併せて定家仮名遣・節用集と照合しながら、振り仮名の仮名遣の基盤となるものを考えることを目的とした。

但し、一〇俳諧集中『江戸宮筈』は総漢字数三四三〇に対して、振り仮名が付されるのが七七字で約二・二%という低い割合であり、語頭に「オ・ヲ」が付く振り仮名は出現しない。よって、『江戸宮筈』を除く九俳諧集での語を取り上げることになる。参照する節用集・仮名遣書は前節と同じである。

一 同語における振り仮名と仮名表記の語頭の仮名遣が一致する語

本文中の仮名表記語と同語で振り仮名を付す漢字表記語に九語があり、それを次の【表一】に示してみた。

【表一】の振り仮名と定家仮名遣との関係では、振り仮名・仮名表記とも定家仮名遣に収録がない「女子」「彫」を除くと、定家仮名遣に複数の仮名遣がある中でいずれかと一致し、節用集とは「折る」「跳／おどれ」を除いた七語が、振り仮名・仮名表記の両者の仮名遣と一致する。

表中「帯」は、『易林本』に「於」の項で「オビ」と収録があると同時に、「波」の項では「膚袴」の下注に「帯」とあり、「置く」は「遠」の項で「ヲク」とあると同時に、「淨地」の下注では「置ニ塩噌」處也」と記されるので、これら二語は『易林本』に「オ・ヲ」両者の収録があるとした。

【表一】(表中〈卿〉)は『定家卿仮名遣』による。また、複数の振り仮名(オドリ・ヲドリ／跳・躍)・仮名表記で複数ある語(おく・をく)も一致する語とした。

振り仮名	仮名表記	定家仮名遣	節用集
跳 <small>オドリ</small> (易・黒)	おどれ(正)	をとる	ヲドル(明・天・饅・黒・易・合)
躍 <small>ヲドリ</small> (西)			
帯 <small>オビ</small> (紅)	おび(江八)	おひ	オビ(易)ヲビ(明・天・饅・黒・易・合)
彫 <small>オビシ</small> (正)	おびたゝし(紅)	オヒタゝシ(色葉字類抄)	オビタタシ(易)ヲビタタシ(伊・天・饅・黒)
折る <small>オメ</small> (江八)	おる(正・紅・七)	おる	ヲル(明・饅・黒・合)
置き <small>オク</small> (鼓)	おく(当)をく(正・紅・宗・江宮・七)	をく	オク(易)ヲク(天・饅・黒・易・合)
音 <small>オト</small> (紅)	をと(正・紅)	をと(卿)	ヲト(黒・合)
女子 <small>オナゴ</small> (衆)	をなご(正・紅)		ヲホナゴ(女郎)(合)
鬼 <small>オニ</small> (紅)	をに(正)	おに・をに	オニ(易)ヲニ(饅・黒・合)
女神 <small>メシナ</small> (七)	をんな(正・紅)	をんな	ヲンナ(易)

「鬼」は『仮名文字遣』では、「お」「を」の両方に立項されていて「をにとも」「おにとも」と注記がある。この「くとも」の注記は、大野晋氏（一九七七）^① 三一八頁）や坂本清恵氏（二〇一〇）^② が鎌倉時代後半に、アクセントが変化したことによるものと述べている。

藤原定家白筆本を忠実に臨摸したとされる『拾遺和歌集』（雑下五五九）では、みちのくのあたちのはらのくるつかにおにこもれりとさきはまことかと「おに」の表記が見え、『伊勢物語』五八段の

むくらおひてあれたるやとのうれたきはかりにもおにのすたくなりけり

に対する注釈書でも、室町末期書写の『伊勢物語秘用抄』『伊勢物語宗長聞書』『伊勢物語山口記』は「おに」である。しかし、一四六〇年成立『伊勢物語愚見抄』では「をに」と表記され、室町期では、「鬼」の仮名遣に「おに」と「をに」が混用されている。『古典佛文学大系』所収の句でも両者の仮名遣が見え、『正章千句』の仮名表記「をに」は、混用の時代を反映したものであると言える。

以上、漢字表記語に付される振り仮名と同語の仮名表記で、語頭の仮名遣が同じである語を取り上げ検討してきた。その結果、振り仮名と仮名表記の語頭の仮名遣が一致する語には【表一】の九語があり、それらは、定家仮名遣とも一致する。但し、「おどり」に関しては複数の振り仮名のいずれか一方との一致である。

二 振り仮名と仮名表記の仮名遣が異なる語

次の【表二】に、同語において振り仮名の語頭が「ヲ」であるのに対して、仮名表記の語頭は「お」で記され両者の語頭に相違がある語を、定家仮名遣・節用集と照合した結果を示してみた。

【表二】（表中「隠坊」の「オン」は色葉字類抄による。）

振り仮名	仮名表記	定家仮名遣	節用集
老婆（紅）＊	おひ（正・紅）	おひ・おい	オイ（易）オヒ（伊）ライ（天・饅）ヲヒ（合）
負（宗・七・西）	おへる（宗）	おふ	オフ（易）ヲウ（天・饅・黒・合）
可笑（軒）	おかし（正・紅・宗・江八・西・江蛇）	おかし	ヲカシ（合）
起て（七）	おこす（正・宗・江八・当・江宮）	おき	オキ（易）ヲキ（明・天・饅・黒・合）
奥（紅）	おく（正）	おく	オク（易）ヲク（天・饅・黒・合）
御傍（宗）＊	おそば（七）	御お	オ（伊・易）ヲ（明・天・饅・黒・合）
恐（江蛇）	おそれ（紅・宗）	をそれ・おそる	オソル（易）・ヲソレ（易）ヲソル（明・天・饅・黒・合）
願（紅）	おとがひ（宗）	おとかい	オトガイ（易）ヲトガイ（明・伊・天・饅・黒・合）

表中＊印を付す「老婆・御傍・隠坊」は、節用集・定家仮名遣に熟語として収録が見えないので、「老・御・隠」のみを次のような語が収録されていることから類推とする。

○「老婆」|| 節用集（易）、「老」（オイ）のみの訓、（伊）、「老悖」（オイボレ）、（天・饅）、「老悖」（ライボレ）、（合）、「老坂」（ラヒザカ）／ 仮名文字遣 おひうと（おひうと／共）同上（老人）

○「御傍」|| 節用集（易・伊）、「御成」（オナリ）、（明・天・黒・饅）、「御成」（ヲナリ）、（合）、「御末」（ラス）／ 仮名文字遣「御」は「お」

○「隠坊」|| 節用集（伊・明・天・黒・易）、「隠密」（ランシツ）／ 色葉

字類抄 隠首

威(軒)	おどし(紅・宗・江八)	をとす	ヲドス(伊・明・天・巖・黒・易・合)
驚す(七)	おどろかす(西)	おどろく	オドロク・ヲドロカス(易)ヲドロク(天・巖・黒・明・合)
落す(紅)	おとし(正)	おつ・おこる	ヲトス(伊・明・黒・易)
大臣(七)	おとど(紅)	おとど	オトド(易)ヲトト(伊・明・天・巖・黒・合)
一昨日(江八)	おとむひ(正)	おとむひ	ヲト、ヒ(易・合)ヲトトイ(伊・天)
佛(紅・宗・当)	おもかけ(江宮)	おもかけ	オモカゲ(伊・易)ヲモカゲ(伊・明・天・巖・黒・合)
隠坊(宗) * 隠房(西) *	おんぼう(江宮・七)	隠 オン	ヲン(伊・明・天・黒・易・合)

同じ俳諧集の中で、振り仮名と仮名表記に差異が生じているのが見て取れる。

この同語における片仮名で記す振り仮名と、平仮名で書かれた本文での仮名遣の差異は、築島裕氏(一九八六)が「定家自身の『源氏物語奥入』、『奥儀抄』などの片仮名の部分には、この「ヲ」と「オ」の区別は見られない」(『歴史的仮名遣』その成立と特徴)三四頁)と記していることから、片仮名表記には定家仮名遣が反映されていないと捉え、本文中の平仮名表記と振り仮名の片仮名表記の間では、「お(オ)」と「を(ヲ)」の仮名遣が統一さ

れていない根拠の一つであると考えられる。同時に、片仮名で記す振り仮名について、矢田勉氏(二〇〇五)が次のように述べていることが、振り仮名の片仮名表記と本文中の平仮名表記に差異が生じる要因の一つとなる。

振り仮名の由来が訓点の仮名点にあった以上、本来、振り仮名の用字は片仮名であるのが理の当然であった。振り仮名の主たる機能が、対応する漢字の音形の表示であることからしても、より表音性の傾向が強い文字である片仮名が選択されるのが自然である。(『漢字と日本語』朝倉漢字講座1 一七三頁)

【表二】の振り仮名と仮名表記に相違がある語では、振り仮名一五語中、二語が定家仮名遣と一致し節用集のいずれかとはずべて一致する。但し、節用集の中で『易林本』(一部『伊京集』)に限っては振り仮名の仮名遣とは一致度が低く「老・負・起・奥・御・願・大田・佛」の八語の訓の仮名遣は、振り仮名とは一致しないが定家仮名遣とは一致する。このように『仮名文字遣』と『易林本節用集』が密接な関係にあることについては、『易林本節用集』の巻末に「惟取^テ定家卿^ノ假名遣^ヲ分^テ書^キ伊為^ヲ越^テ於^テ江患^ニ之^ヲ六^ノ隔^ヲ段^ニ以^テ返^レ之^ヲ云^フ」と易林の識語があり、橋本進吉氏(一九六八)は、易林本類において「あ・お・ゑ」と「い・を・え」が分けられているのは、「易林が仮名文字遣に依って改めたもので、その原づく所の本には、他の諸本の如く之を併せてあったものと思はれる」(『古本節用集の研究』一二八頁)と両者の関係を指摘されている。

また、築島裕氏(一九八六)が『運歩色葉集』と『易林本節用集』は定家仮名遣を使用していると述べ(前掲の書 五九頁)、今西浩子氏(一九九六)は、『仮名文字遣』は「易林本節用集の採録語の出典の一つであったこととは別に、仮名遣の参考資料として利用されることはなかったであろうか」(『国語文字史の研究』一一七頁)と両者の関係を述べる。

三 振り仮名の仮名遣と定家仮名遣・節用集との関係

驚す』は『七百五十韻』で

若驚^ヲ春の奥なる陰よりも

常之 七九番

と詠まれ、節用集では「驚」に「ヲドス」の訓は見えない。定家仮名遣には「おどろく」、節用集には「オ(ヲ)ドロク・ヲドロカス」と収録があり、当該句では「おどろかす」意と捉えるが、「威す」と同じ意と取れば、定家仮名遣・節用集に「ヲドス」とあり一致する。

また【表二】から『紅梅千句』では、「老婆」に対して仮名表記では「老」に「おひ」、『宗因七百韻』では「負」に対して仮名表記では「おへる」のように、

これまでは、本文中の仮名表記と振り仮名の両者の語頭に「お(オ)・を(ヲ)」が付く語を取り上げ、同語において比較考察することを試みてきた。一節では、本文中の仮名表記語での語頭は「お」が多用され、定家仮名遣との一致度が高く、それに対して本節【表二】での振り仮名の語頭は「ヲ」で記され節用集との一致度が高いことが認められた。しかし、振り仮名の中には語頭に「オ」を用いる俳諧集も出現する。

【表一】【表二】では本文中の仮名表記の語と共通する振り仮名二四語に限って考察してきたが、ここでは一〇俳諧集の振り仮名の語頭に「オ・ヲ」がつく延一〇一語を取り上げ、定家仮名遣との関係、或は俳諧集による特徴が見られるかを検討していくことにする。この延一〇一語の中には、振り仮名付きで同じ俳諧集で二回出現する語に「大臣(ヘ七)・飲食(軒)」がある。また、二種以上の俳諧集に亘って出現する漢字表記語には「甥(二回)・負(二回)・覆(二回)・瘧(五回)・驕(二回)・伯父(二回)・跳(二回)・佛(三回)・御(二回)・御(二回)」があり、異なり漢字表記語は八五語となる。「御」は『當流籠技』に「御日」、『軒端の独活』に「御しら露」のように、「御」の振り仮名に語頭の「オ・ヲ」の違いがある。このように複合語として同じ語ではないけれど接頭辞「御」のみを対象とした。「御」以外にも、「驕」が『正章千句』に

幾春か驕きはめし平家方 四二三番

と「オゴリ」と振り仮名が付され、『七百五十韻』には次の句で「ヲゴリ」と振り仮名が付される。

春の夢驕の大臣とだへして 政定 一七九番

また、用字に違いがあるが、『軒端の独活』での「奢る」の振り仮名の語頭は「ヲ」である。これら三句の振り仮名の語頭の仮名遣に、『正章千句』と『七百五十韻』『軒端の独活』では「オ」と「ヲ」の差異が見え、『正章千句』での「オゴリ」は節用集・定家仮名遣とは一致しないが、『七百五十韻』『軒端の独活』の「ヲゴリ」は節用集・定家仮名遣との一致を見る。

「跳」に関しては、『正章千句』では

跳法度と觸る猪熊 二一四番

と振り仮名の語頭は「オ」であるが、『紅梅千句』では

穉の彼岸に跳る道場 正章 八一八番

とあり、「オ」と「ヲ」の違いがある。この『正章千句』二一四番と『紅梅千句』八一八番の作者は同じ正章であり、両句が所収されている『正章千句』と『紅梅千句』の清書者もまた同じ正章であるという共通点がある。しかし、両者は清書する人が同じであるにもかかわらず、振り仮名の語頭の仮名遣には相違があり、清書する人が同じでも、振り仮名を付す人は異なることが認められる。ちなみに『西鶴五百韻』では

てう九十百になりても躍出 西鶴 四一五番

と「躍」に対する振り仮名は「ヲトリ」である。「跳」の振り仮名「オ」は、節用集とは一致しないが、『紅梅千句』『西鶴五百韻』の「ヲ」は、収録がある節用集七種と一致し、「驕」「跳」は、定家仮名遣と節用集とは「ヲ」で一致することになる。

このように『正章千句』では、振り仮名において多少の混乱が見え、「驕・跳」の振り仮名「オ」は、他の俳諧集や定家仮名遣・節用集では「ヲ」を用い一致しない。「夥し」の振り仮名の語頭「オ」も『易林本節用集』以外の節用集とは不一致を示す。これらのわずか三語からの判断では早計すぎるかもしれないが、『正章千句』の振り仮名の一部は、清書者正章自身が恣意的に施したものの可能性が考えられる。

【表二】

合計	七百	軒端	江宮	江蛇	西鶴	當流	江八	宗因	紅梅	正章	俳諧集		定家仮名遣
											延語数	ヲ	
101	20	14	0	3	7	5	9	15	21	7	ヲ	振り仮名の語頭	
89	20	11	0	3	7	5	8	14	18	3	オ	の語頭	
12	0	3	0	0	0	0	1	1	3	4			
37	6	6		1	2	3	4	5	7	3		一致数	
27	5	3		0	3	2	2	2	8	2		不一致数	
37	9	5		2	2	0	3	8	6	2		収録なし	
37%	35%	43%		33%	29%	60%	44%	33%	33%	43%		一致度・約	

以上のような考察から、定家仮名遣とそれぞれの俳諧集の振り仮名の一致度を前掲の【表三】にまとめてみた。
 【表三】の延語数は振り仮名の語頭に「オ・ヲ」が付く語数である。【表三】では、延一〇一語中定家仮名遣と三七語が一致し、約三六・六%を占める。定家仮名遣に収録がない語の中で、「大なる・大柄」の「大」、「老婆」の「老」、「落武者・落漣」の「落」、「追剥」の「追」、「御傍・御乳・御祓・御卒曾離」の「御」、「親父・親仁」の「親」、「重目」のみを定家仮名遣と照合すると次のようになる。()内には定家仮名遣書での事例を示す。(定)は定家仮名遣) ○一致する振り仮名

- 「大」(紅・軒)(定)大江山・大鹿・大方…)
 - 「追」(宗)(定)追風・追)
 - 「御」(軒・七)(定)御頭梳・御座)
 - 「親」(江八②)(定)をやこ)
- 一致しない振り仮名

- 「老」(紅)(定)老曾森・老人)
- 「御」(宗③)(定)右に既述)
- 「落」(宗)(定)落魄・落葉)

「重」(七)(定)「おもみ・おもき」をもし」とあり、『七百五十韻』では「重目」なので不一致とした)

右に『色葉字類抄』にある「夥し」(正)を一致する語に加えれば、一致する語が四四語となり、約四三・六%の一致度となる。意外に高い数字ではあるが、定家仮名遣に収録がない語に三七語があることは問題であり、漢字に付す片仮名の「ヲ」の振り仮名と定家仮名遣の「を」が偶発的に一致したまでのことで、定家仮名遣を意識しているのではない。清書者・板下が一冊である俳諧集、例えば正草千句・紅梅千句・軒端の独活(推定)では、振り仮名に個人の仮名遣が反映していると考えられる。

次に、各俳諧集の振り仮名の仮名遣と定家仮名遣の関係を「ア、振り仮名と定家仮名遣が一致する」「イ、振り仮名と定家仮名遣が不一致」「ウ、定家仮名遣に収録がない語」に分類して具体的に示しておくことにする。

ア、定家仮名遣と一致

イ、不一致

ウ、定家仮名遣に収録なし

【正草千句】	大原(ざし) 伯父者 愛宕	驕 跳	夥し 臆臆
【紅梅千句】	帯 怠らす 行ひ 跳る	狼 澳 叟草 奥 落す	大なる 恩徳 老婆 臆病風
【宗因七百韻】	及ぬ 甥 補ふ 鴛	願 衰ふ 佛	癩 落武者
【江戸八百韻】	折る 甥 荆 姨	一昨H 惟	追剥 癩 御傍 御乳 落漣
【當流籠技】	單部 舅 遠	御 佛	大根葉 御祓 隠坊
【西鶴五百韻】	遅ひ 躍	負 覆 篋	癩 親父 親仁
【江戸蛇之鱗】	恐	なし	臆病者 音高

*当該集九九番の「斧」に付された振り仮名が「ヲキ」のように見えるが、「ヲ」の二画目の横線が一重になっていることから、訂正が不明瞭ではあるが、誤刻と判断し除外した。

【江戸宮筍】 (該当語なし)

【軒端の独活】

御 奢る 踈 威 押	可笑 長 走	大柄 御卒曾離 臆辱 飲食②
------------	--------	----------------

【七百五十韻】

覆 置き(皺) 伯父 男鹿	負ふ 生て 起て 大臣②	臆 癩 驕 和尚 乙甲 驚す
女子(衆) 女(神)		臆所 重目 阿蘭陀

右の語の中で、アの定家仮名遣と一致する語で節用集と一致しない語には「及ぬ(宗) 折る(江八) 御(軒)

があり、「帯（紅）」は古本節用集六種と合類節用集のうち『易林本』とのみ一致し、他の節用集とは一致しない。イの振り仮名と定家仮名遣が不一致の語で、節用集とも一致しない語には「驕（正）」「跳（正）」「御（当）」がある。「御（当）」は『易林本』にのみ「オホン」と収録があり、『軒端の独活』では一致するが『當流籠拔』では一致しない。「御」を「ヲホン」ではなく「御乳」「御祓（宗）」のように「ヲ」と読むときは、『明応五年本』などとも一致する。ウの定家仮名遣に収録がない語で節用集に収録があるが、振り仮名の仮名遣が異なる語には「恩徳（紅）」がある。『正章千句』の「夥し」は参照した節用集のうち、『易林本』とは一致するが他の節用集とは一致しない。ちなみに節用集に収録がない語には、

紅梅千句	落武者
宗因七百韻	追剥 御傍 落瀧 大根葉 隠坊
江戸八百韻	親仁
西鶴五百韻	隠房
軒端の独活	大柄 御卒曾離 臆辱 飲食②
七百五十韻	乙甲 重目

がある。

こうして見て来ると、以上の中で『正章千句』では、定家仮名遣・節用集の両者と一致しない「驕」「跳」の二語があることには注意されると言えるだろう。

おわりに

振り仮名の語頭の多くは「ヲ」で表記され、同語において本文中の仮名遣と振り仮名を比較した結果では、定

家仮名遣とは【表一】と【表二】の二四語中七語が一致し、一致度が低く、節用集とは一致度が高い。この事象は、振り仮名を付す人が振り仮名を付すに当たり、節用集と同様に片仮名で記されていることも考え合わせて、参照する仮名遣の基盤となるものが、節用集と同じであることが推測される。

さらに、振り仮名二四語のみでなく、語頭に「オ・ヲ」が付く延一〇一語において定家仮名遣との一致度を調査してみると約三七%の一致を見た。そこに定家仮名遣に収録がある語とは差異があるが、熟語の上部の漢字の振り仮名のみ、或は『色葉字類抄』に収録がある「夥し」も含めると、約四三・六%が一致することになる。その中で『正章千句』では、「驕」「跳」のように節用集・定家仮名遣とも一致しない振り仮名が出現すると同時に、同俳諧集では、前節で述べたように本文中の仮名表記に、複合語の前部構成要素「おし・をし」の混用、語頭では同じ正章が清書した『紅梅千句』を含めると、定家仮名遣「を」に対する「お」の使用が多いことなど、正章個人の自由な文字領域を窺い知ることが出来る。

注

- 1、大野晋「仮名づかいの歴史」（『岩波講座 日本語8』一九七七年 岩波書店 改訂新版）
- 2、坂本清忠「ゆれる（をのこ）とゆれない（おとこ）——『仮名文字遣』の諸本とアクセントの体系変化——」（『古典語研究の焦点』二〇一〇年 武蔵野書院 八三—一頁）
- 3、『拾遺和歌集の研究』片桐洋一著 昭和五五年 大学堂書店
- 4、『伊勢物語秘川抄』三条西家流の立場にたつ注釈書（鉄心齋文庫 伊勢物語占注釈叢刊第五巻 平成元年 八木書店）
- 5、『伊勢物語宗長問書』武川本系統本（陽明叢書国書篇 第九輯 昭和五一年 思文閣）
- 6、『伊勢物語山口記』宗祇著（冷泉家時雨亭叢書 第八〇巻 二〇〇八年 朝日新聞社）

- 7、『伊勢物語愚見抄』一条兼良筆（冷泉家時雨亭叢書 第四一卷 一九九八年 朝日新聞社）
- 8、築島裕『歴史的仮名遣 その成立と特徴』一九八六年 中央公論社
- 9、矢田勉「振り仮名」（『朝倉漢字講座1』漢字と日本語 二〇〇五年 朝倉書店）
- 10、橋本進古『古本節用集の研究』一九六八年 勉誠社
- 11、今西浩子『国語文字史の研究 三』一九九六年 和泉書院
- 12、「隠坊」と「隠房」、「躍」と「跳」、「驕」と「奢」は漢字の違いから異なり語とした。
- 13、『色葉字類抄 研究並びに索引』昭和三九年 風間書房

参考文献

『古典俳文学大系』一巻～一六巻 昭和四五年～四七年 集英社

結 語

俳諧は和歌や連歌の線上に位置する韻文の一つである。それならば、仮名遣において、どのような様相を呈しているか、本章では、語頭の「お（オ）・を（ヲ）」のみであるが、本文中の仮名表記語と振り仮名の語頭に「お（オ）・を（ヲ）」がつく語を取り上げて考察を試みてきた。考察の対象とする一〇俳諧集中、同語の語頭の「お（オ）・を（ヲ）」において、俳諧集により仮名表記の語頭や振り仮名の語頭の仮名遣に差異がある語が見えること、本文中の仮名表記語と振り仮名の仮名遣には相違があることなどの問題点があるからである。

一節では、語頭に「お・を」が付く本文中の仮名表記語と、定家仮名遣との一致度を調査した結果を示した。

ここでは、仮名表記の語頭は、「お」の使用頻度が高く、それらは概ね定家仮名遣に準拠しているが、一致しない例もあることを報告した。一致しない語を一〇俳諧集以外での使用状況を見ると、一〇俳諧集と同様に定家仮名遣では「を」であるのに反して「お」を用いる例、或は定家仮名遣では「お」であるのに俳諧集では「を」を用いる例もあり、一〇俳諧集での特殊な現象ではないことが認められた。近世初期に限ることなく、天保の時代頃まで調査を進めると、時代が下るに従って定家仮名遣で語頭に「を」を用いる語は、「お」で表記される例が多くなり、「を」から「お」の多用へと推移する様相も同時に窺うことができた。

二節では、振り仮名の仮名遣を中心にして、本文中の仮名表記語・定家仮名遣・節用集と比較して検討を進めていった結果では、振り仮名の語頭では「ヲ」が多用され、それらは節用集との一致度が高い。振り仮名の仮名遣は、節用集と同様に片仮名で記されていることも考え合わせて、定家仮名遣は反映されず、参照する仮名遣の基盤となるものが、節用集と同じであることが推測される。また、本文中の平仮名表記と振り仮名の片仮名表記では、「ことば」と「ヨミ」を示す「質の違い」により仮名遣に違いが生じているとする。

以上のような考察を通して、一つには、本文中に見える仮名表記は、筆者個人の常用仮名遣によるものであり、近世初期の俳諧では、定家仮名遣を意識的に行っていないかた結論づけられる。いま一つには、同じ俳諧集の中で本文中の複合語の前部要素の語頭の仮名遣に「おしー」と「をしー」のように「お・を」両者を用いること、振り仮名の仮名遣が節用集と一致しない例があることなどの異例が見え、中には個人による自由な文字領域が窺えることを明らかにした。

終章 本稿の結論と今後の課題

日本語書記の史的研究に於いて、通時的に論を展開して行くには、まずそれぞれの時代における共時的な調査検討がなければ論じることができない。

そこで本稿では、江戸時代初期という時代設定をし、今まで国語学的研究において、殆んど取り上げられなかった俳諧集を資料として、表記の面からの考察を重ねてきた。その結果、振り仮名に関して振り仮名を付す場面・機能などの諸問題、或は漢字表記における当て字など、内蔵されている多くの問題の、ごく一斑ではあるが明らかにすることが出来たのではないかと思う。

第一章では、振り仮名に関する諸問題を中心に、どのような場合に振り仮名が付されるか、振り仮名の機能などを検討し、同時に振り仮名の形式にも触れた。ここでは難読字に付す振り仮名を基本として、次のようなことが認められた。

- (一) 振り仮名には意味を弁別する機能がある。
- (二) 易しい漢字でも語形を示す振り仮名がある。
- (三) 同じ漢字でも用法が異なる場合は、出現頻度が低い用法に振り仮名が付される。
- (四) 振り仮名の文字種には片仮名が用いられる。
- (五) 読本（よみほん）のように左右両側に付ける振り仮名は希である。

第二章では、談林の文字世界における特異な表記・ヨミなどについて言及していく。第一節では「やさし」に当てる「婀娜」「艶し」の二種の漢字表記は、『江戸八百韻』と同様に西鶴の浮世草子でも使い分けが見られ、文脈における表現性を重視したものとす。二節での「悶もん」は、漢字「悶」と振り仮名「イキ（る）」により、二

つの映像を合わせた新しい表現法を採用していると。二節の「哆」に関しては、現段階では『合類節用集』と『書言字考節用集』以外では、辞書・用例ともに「あつかひ」と読む事例が見出せない。「哆」に「アツカヒ」と振り仮名が付されることについて、いくつかの仮説を立て、その中で「哆」が持つ「はだかる」の義を含ませた情景描写のために「哆」を採用したとする。これは「悶る」と類似する二重表現法であり、表現としての振り仮名と捉えられる。四節の熟字訓「口外」については、『空華日用工夫略集』以前、或は同書と近世との間の事例など、通時的な調査の必要性が課題として残された。当て字に關しては、遊戯的に漢字を変えることにより、新しい表現を志向する結果であるとする。

このような考察の結果、第二章では第一章の(一)から(五)の振り仮名の機能に加え、新たに

(六)「重イメーজのように表現性を重視した振り仮名があることを報告した。

第三章では、これまでの漢字を主とした考察から離れ、仮名遣から俳諧集を見る事にした。

第三章一節では、本文中に見える語頭に「お・を」が付く仮名表記語を定家仮名遣と比較して見ると、概ね定家仮名遣に準拠している。一致しない語を一〇俳諧集以外の俳文学作品で見ると一〇俳諧集と同じ仮名遣が見られる作品集もあり、近世初期の俳諧では、定家仮名遣の權威は保持されるものの、意識的には定家仮名遣を行っていないことを報告した。二節では振り仮名の語頭では「ヲ」が多用され、それらは節用集との一致度が高い。この事象は、節用集と同様に振り仮名は片仮名で記されることも考え合わせて、参照する仮名遣の基盤となるものが節用集と同じであることが推測されるとする。

以上、今回は近世初期俳諧集の中で、一〇俳諧集しか調査の対象としなかったが、第一には、振り仮名に関して言うならば、前掲の(一)から(六)のような結果を得たこと、第二には、漢字と振り仮名による二重の表現法を採用していること、また本来の漢字を意識的に変えて新しさを志向していること、第三には、仮名遣では定家仮名遣を意識的には行っていないこと、など俳諧の大よその表記の実態をつかむ事ができた。但し、第二章三節の「哆」について、あるいは同章四節の「H外」のヨミなどでは、史的な調査などが必要であると考えている。また、考察の対象とする資料では、一〇俳諧集中、貞門の俳諧集が二集、談林の俳諧集が八集で談林に偏りすぎていることから、今後貞門の俳諧集をもう少し取り上げ検討していきたい。同時に以上に加えて、用語の問題を整理することも必要であり、多くの課題が残されている。

最後に、本稿では九本の論文をもとに、全体にわたって加筆訂正したもので成り立っているが、その中で既発表の論文との関係を示しておく事にする。

第一章 振り仮名が付される漢字表記語と表記形態

第一節 『紅梅千句』における振り仮名

(『紅梅千句』における振り仮名の「考察」大阪府立大学『上方文化研究センター―研究年報第九号』二〇〇八年三月)

第二節 『軒端の独活』『江戸宮筈』の表記

(『軒端の独活』『江戸宮筈』を中心にした表記の考察―大阪府立大学『上方文化研究センター―研究年報第一〇号』二〇〇九年三月)

第三節 『正章千句』の振り仮名

(『正章千句』の振り仮名に関する一試論―『国語文字史の研究十二』二〇一一年三月 和泉書院)

第四節 『宗因七百韻』と『七百五十韻』の表記―振り仮名の機能と表記形態の特徴―

(『国文学』九四号 関西大学国文学会 二〇一〇年)

第二章 近世初期俳諧の用字考証

第一節 近世初期俳諧における「やさし」の用法―『江戸八百韻』に見える「婀娜」「艶し」について―
『国文学』九五号 関西大学国文学会 二〇一一年)

第二節 『當流籠抜』における「悶る」について

(「近世初期俳諧の用字考証―『當流籠抜』における「悶る」について―『国文学』九六号 関西大学国文学会 二〇一二年)

第三節 『江戸八百韻』に見える「哆」の訓みについて (未発表)

第四節 『西鶴五百韻』の用字考証―熟字訓と当て字― (未発表)

第二章 仮名遣から見た近世初期俳諧集―語頭に「お(オ)」「を(ヲ)」が付く語について―

第一節 本文中の語頭に「お・を」が付く仮名表記語―定家仮名遣を通して―

(「仮名遣から見た近世初期俳諧集」『国文学』九七号 関西大学国文学会 二〇一三年三月の前半部を独立させて補訂したもの)

第二節 振り仮名の語頭の「オ・ヲ」の仮名遣

(右の論文の後半部を独立させて補訂したもの)

本稿では、俳諧を取り上げ、表記の視点から考察を重ねてきた。今回は一片の報告に過ぎないけれども、つとに指摘されている表現としての振り仮名に、少しは触れることができたなど、俳諧の表記における特質を実証できたのではないかと思う。今後、さらに多くの語を取り上げて用字考証を行うなど、残された課題に取り組んでいきたいと考えている。

資料編

資料一 紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係

資料二 振り仮名を付す語と条件との関係

資料三 一〇俳諧集における振り仮名付き語

【資料一】 紅梅千句振り仮名付き語と付合指導書との関係

	漢字	振り仮名	はなひ草	俳諧俣集	俳諧類集
1	垢	アカ			〇
2	灰汁	アク			〇
3	蘆	アシ	〇	〇	〇
4	畔	アゼ	あぜ	〇	〇
5	熱田	アツタ			〇
6	敦盛	アツモリ			〇
7	梁	アハ	〇	〇	〇
8	鮑	アハビ			〇
9	葵上	アフヒノウヘ			〇
10	鏡	アブミ	〇		〇
11	泉郎	アマ	蟹・海士・海人	海士	海士・蟹
12	鮎	アユ	〇	〇	〇
13	荒波	アラ波			荒浪
14	諷ふ	アラソ(ふ)	あらそひ		
15	蟻	アリ			〇
16	歩く	アリ(く)		ありく	ありき道
17	衣箱	イカウ			〇
18	箆籬	イカキ		いがき	〇
19	軍	イクサ	いくさ		〇
20	威勢	イセイ			〇
21	石上	イソノカミ			〇
22	鼬	イタチ			〇
23	一揆	一キ			〇
24	一日	一ジツ		〇	〇
25	泉	イツミ	〇	〇	〇
26	電	イナヒカリ	いなびかり	〇	稲光
27	守官	イモリ		〇	宮守
28	鴨舟	ウ舟	〇		〇
29	上龍	ウグロモチ			〇
30	諷ふ	ウタ(ふ)	〇		〇
31	温純	ウドン			うどん
32	飢	ウヘ			〇
33	運	ウン			〇
34	酔たる	エイ(たる)	〇	〇	〇
35	詠	エイ		〇	〇
36	條	エタ		枝	枝
37	穢多	エタ	〇		〇
38	恵比須講	エビスカウ			恵比須講
39	熊	エビラ	えびら		
40	烏帽子	エボシ	〇	〇	〇
41	縁	エン	えん		
42	猿猴	エンコウ	えんこう	〇(猿猴の手)	〇(猿猴の手)
43	縁付	エンゾキ			〇
44	帯	オビ		〇	〇
45	漣	ヲキ	沖	沖	沖
46	叟草	ヲキナ草			翁草
47	奥	ヲク		〇	奥国
48	行ひ	ヲコナ(ひ)	をこなひ		〇
49	癪	ヲコリ			〇
50	小手巻	ヲダマキ		をだまき	〇
51	落武者	ヲチ武者			〇
52	音	ヲト	〇	〇	
53	跳る	ヲド(る)	躍	おどる	
54	願	ヲトカイ			〇
55	鬼	ヲニ	〇	〇	〇
56	佛	ヲモカゲ	おもかげ	面影	〇
57	狼	ヲノカミ			〇
58	甲斐	カイ			〇
59	蠶	カイコ			〇
60	海草	カイサウ		〇	海藻
61	翔	カウジ			〇
62	驚鹿	カマシ	かまし	かまし	案山子
63	香久山	カク山			〇(天香久山)
64	霍乱	クハクラン	くわくらん	〇	〇

65	簞	カゴ		○	○
66	相枕	カヂ枕			梶枕
67	首途	カトデ	○	○	○
68	買もの	カヒ(もの)			買物
69	哥舞妓	カブキ		かぶき	○
70	蕪	カブラ			○
71	壁	カベ	○		○
72	鎌倉	カマクラ			○
73	上	カミ	○	○	○
74	瓶	カメ			○
75	萱萱	カヤブキ		菅ぶき	○
76	粥	カユ			○
77	荷葉	カヨウ		○	
78	確	カラウス			○
79	烏爪	カラスウリ			からす瓜
80	河狩	河ガリ	川がり・河がり		○
81	元興じ	クハシゴウ(じ)			元興寺
82	寒垢離	カンゴリ			○
83	勸進帳	クワンジンチャウ	(勸進のみ)*	(勸進のみ)*	○(勸進/帳)
84	勸進坊主	クワンジンバウス	○	○	○(勸進/坊主)
85	黄	キ	○	○	○
86	鬼界が嶋	キカイ(が嶋)			○
87	牙	キバ			○
88	青布祿	キブネ	○		○
89	花車	キヤシヤ		(訓ナシ; 異義)*	
90	脚布	キヤフ			きやふ
91	玉殿	キョクテン			○
92	玉兔	ギョクト		○	
93	桐	キリ	○	○	○
94	琴	キン	訓(こと)		訓(こと)
95	權花	キンクハ			○
96	鯨	クジラ			○
97	鯨	クジラ			○
98	薬玉	クスタマ	○	○	○
99	櫛	クスノキ			○
100	具足	グソク			○
101	喰	クヒ	くふ		
102	組	クミ			○
103	蔵	クラ	○		○
104	栗	クリ	くり		○
105	景	ケイ	訓(かげ)		○
106	稽古	ケイコ	○		○
107	喧嘩	ケンクハ			○
108	基	ゴ	○	○	○
109	濃茶	コイチヤ			○
110	格子	カウシ	○		○
111	氷砂糖	氷サタウ			○
112	漕ぐ	コ(ぐ)		こく	漕舟
113	国阿	コクア			○(国阿上人)
114	五月五日	ゴクハチゴニチ		訓ナシ	
115	苔	コケ	○	○	○
116	興	コン			○
117	乞食	コジキ	こつじき		訓(ゴツジキ)/付合語訓ナシ
118	牛頭	ゴツ		○(牛頭馬頭)	
119	鈎簾	コス	○	○	○
120	胡椒	コセウ			○
121	木間	コノマ		○(木の間)	○(木の間)
122	基盤	基バン			○
123	五百羅漢	五百ラカン			○
124	曆	ヨロミ	こよみ		○
125	垢離	コリ			○
126	衣	コロモ	○	○	○
127	牛王	ゴウウ			○
128	菜	サイ		さい	
129	催馬楽	サイバラ	○	○	○
130	室府	サイフ			○
131	材木	サイモク		○	○

132	冴還る	サヘカヘ(る)	さゑかへる		寒暑
133	桜	サクラ	○	○	○
134	雑喉	ザコ			○
135	大角豆	サマゲ	さまげ		小角豆
136	棧敷	サジキ	○		○
137	指身	サシミ			さしみ
138	座頭	ザト	○	○	○
139	砂糖	サタウ	○		○
140	真盛	サネモリ			実盛
141	鱒	サバ			○
142	金精	サビ		さび	渋(サビル)/さびり
143	三味線	サミセン			○
144	三途河	三ツ河			○(三途川)
145	主	シウ	○		
146	従者	ジウザ	○		
147	塩子	シホヒ		○	○
148	敷	シキ	○		
149	櫛	シキミ		○	○
150	侍従	ジシユ			○
151	獅笛	シハフエ	しゝふえ		獅子ノ笛
152	時守	ジシユ			時宗
153	時守寺	ジシユデラ			時宗寺
154	時正	ジシヤウ		○	
155	茵榮	シダ	しだ		○
156	濕気	シツケ			○
157	渡柿	シフガキ			○
158	江連	シメ			○
159	麝香	ジヤカウ			○
160	娑婆	シヤバ			○
161	殊救	ジユズ	○		○
162	書院	シヨエン	○		○
163	鍾馗	セウキ			○
164	精進	サウジ	○		○
165	風	シラミ			○
166	白髪	シロカミ	しらかみ	しらかみ・白かみ	訓(シラガ)
167	城責	シロセメ			○
168	新発意	シンホチ			○
169	和泉苑	シンゼンエン		○	○
170	神農	神ノウ			○
171	神輿	シンヨ			訓(ミコシ)
172	巢	ス	○	○	○
173	水晶	スイシヤウ			○
174	透	スキ			水精
175	透間・すき間	スキマ・(すき)マ		すきま	すきまの風
176	鮓	スン	○		○
177	煤	ス			○
178	錫	スハ			○
179	涼かぜ	スバ(かぜ)			涼風
180	薄	ススキ	○	○	○
181	硯	スマリ		○	○
182	諏訪	スハ	○		○
183	施行	セギヤウ			○
184	節	セチ			○
185	節分	セチブ	○	○	○
186	雪隠	セツチン			○
187	銭湯	センタク			洗湯
188	善導大師	ゼンダウ大師			○
189	洗濯	センタク			○
190	雑煮	ザウニ	○		○
191	茸履	ザウリ		さうり	○
192	蘇民	ソミン			○(蘇民将来)
193	候	ソロ	○		
194	誰	タ	訓(たれ)		
195	手折	テワル	○		手折夕かほ
196	高養甫	高ヤウシ			高楊枝
197	鷹師	鷹ジヤウ	鷹匠	鷹匠	○
198	帳翻	ダイゴ	だいご		○

199	薪	タキマ	○	○	○
200	卓敬	タクサン		沢山	
201	母	タツネ	○	○	
202	蓼	タテ	たて		○
203	床	タマ	玉	玉	○
204	團子	ダンゴ			○
205	調菜	テウサイ		○	
206	挑燈	テウチン			○
207	摩栗	ツバ	摩栗花(ついくわつ)		
208	杖	ツエ			○
209	頭巾	ツキン	○	○	○
210	皺	ツミ			○
211	燕	ツバメ	つばめ		○
212	籬	ツブテ			○
213	語る	ツム(る)			結(ツメル)
214	摘る	ツメ(る)	○	つむ	○
215	釣針	ツリ針		つりばり	○
216	鋸	ツルギ		○	鋸
217	躰	テイ	体		
218	亭主	テイシユ	○		○
219	手形	テガタ			○
220	敵	テキ	○		○
221	出来て	デキ(て)			○
222	鉄炮	テツハウ	○		○
223	照	テル			○
224	田楽	デンガク			○
225	道場	ドウジヤウ		○	○
226	納涼	ノウリヤウ	○	○	○
227	燈籠	トウロ			○
228	科	トカ			○
229	齋	トキ			○
230	とし越	(とし)越		年越	
231	杜子美	トシミ			
232	屠蘇白散	トソビヤクサン		屠蘇散	
233	土鱈	トチヤウ		鱈	
234	十津川	トツカハ			○
235	蛸蛤	トシハウ		○	○
236	菜	ナ		○	○
237	直寸	ナヲ(ナ)			○
238	仲麿	ナカマロ			○
239	渚	ナギサ	○	○	○
240	茄	ナスビ	なすび		○
241	那智	ナチ			○
242	納豆	ナツトウ			○
243	菜畑	ナバタ		菜畑	
244	靡く	ナビ(く)	○	なびく	○
245	銚	ナマリ			○
246	透て	ニゲ(て)	にぐる		
247	新枕	ニヤ枕			○
248	尼公	ニコウ	○		○
249	入部	ニウブ			○
250	場	ニハ	○	○	庭
251	人形	ニンゲウ	○		○
252	縫	ヌイ	ぬふ		○
253	盗み	ヌスミ(女-ママ)			○
254	眯る	ネ(る)	○	○	○
255	農人	ノウニン			○
256	軒	ノキ	○	○	○
257	拭(ふ)	ノゴ(ふ)			○
258	乗	ノル	○		
259	衛	ハ			○
260	言	ハヒ			○
261	臺	ハカ			○
262	博士	ハカセ			○
263	謀	ハカリコト	○	○	○
264	化物	バケ物			○
265	運ぶ	ハコ(ぶ)		ほこぶ	

266	蜂	ハチ			○
267	咄す	ハナ(ナ)			○
268	濱	ハマ	○	○	○
269	蛤	ハマグリ	はまぐり貝		○
270	拂ふ	ハラ(ふ)	○		○
271	張り	ハリコ			○
272	板木	ハンギ			○
273	斑女	ハンジヨ			○
274	火事	ヒシ		○	訓ナシ
275	僻言	ヒガコト		僻事	
276	羨	ヒン	○		○
277	左り	ヒダ(り)	○		
278	臂	ヒヂ			腕
279	人	ヒト		○	○
280	人香	ヒガ	○	人か	
281	百草	ヒヤクサウ			○
282	百人一首	ヒヤクニンシユ			○
283	琵琶	ビバ			○
284	柔拂	ビンボツ			○
285	麩	フ			○
286	二女狂ひ	フタメクル(ひ)			妻狂
287	蓋	フタ			○
288	階	フミ	ふむ	○	○
289	麓寺	フモト寺	麓/寺	麓/寺	○(麓の寺)
290	風爐釜	フロ釜			風呂釜
291	舳の姿	ヘ(の姿)			○
292	壁	ヘイ			○
293	臍	ヘソ			○
294	別当	別タウ			○
295	紅粉	ベニ	○	○	○
296	蛇	ヘビ			○
297	部屋	ヘ(や)	部屋		部屋
298	滲	ヘン	○	○	
299	法	ホウ	訓(のり)	訓(のり)	訓(ワリ/訓ナシ)
300	坊	ハウ	○	○	○
301	蓬萊	ホウライ			○
302	干菜	ホシナ			○
303	骨	ホネ			○
304	法論味噌	ホロミン			○
305	横尾	マキノブ			○
306	大藜	マタハビ			○
307	前	マヘ	○		
308	三寸	ミキ		○	○
309	二木	ミキ	○		○
310	親工	ミノ	みこ	御子	御子生
311	溝	ミノ	○		○
312	乱し髪	ミダ(し髪)			乱(ミダレ)髪
313	御田植	ミタウヘ			訓(オウタウヘ)
314	湖	ミツウミ			○
315	袈裟	ミノカサ		○	○
316	宮笛	ミヤゲ		○	上座・置宮笛
317	行幸	ミユキ	みゆき	御幸	○
318	麦秋	ムキ秋			○
319	麦飯	ムキ飯	○		○
320	虫氣	ムケ			○
321	蒸竹	ムンタケ			○
322	鞭	ムチ	訓(ふち)	○	○
323	胸	ムネ		○	○
324	厩	ムマヤ		○	馬屋
325	妻敵	メカタキ			○
326	眠 蔵	メンソウ	○		
327	麴類	メンルイ			○
328	毛氈	モウセン			○
329	最上	モガミ		○	最上(モガミ)川
330	文字余り	モジアマ(り)	文字あまり	文字あまり	(文字のみ)
331	餅躑躅	モチツツジ	(「つ」のみ)	(「躑躅」のみ)	餅/躑躅
332	餅突	餅ツキ	もちつき		餅つき

333	持	モツ	もつ	もつ	
334	海雲	モツク	もづく		○
335	戻る	モド(る)	もどる		○
336	百の姫	モへの(の)コビ			○
337	森	モリ	○	○	○
338	紋	モン			○
339	厄	ヤク			○
340	瘦て	ヤセ(て)			○
341	雇はれ	ヤト(はれ)			備
342	矢橋	ヤバセ			○
343	仙びと	ヤマ(びと)		仙人	
344	山科	山シナ	○	○	○
345	焼めし	ヤキ(めし)			○(焼飯)
346	湯	ユ	○		○
347	譲る	ユヅ(る)			○
348	指	ユビ		○	○
349	環堵	ヤウラク		やうらく	○
350	与謝	与サ			○
351	夕立	ヨダチ	訓(ゆふだち)	訓(ゆふだち)	訓(ゆふだち)
352	夜言	夜バイ			○
353	讀	ヨム			○
354	嫂入	ヨメ			婦(婢)入(ヨメイ)
355	落葉	ラクエウ		○	訓(オチバ)
356	琉球	リュウキウ		○	○
357	龍腦	リュウノウ			○
358	律(にしらぶる)	リツ(にしらぶる)	○(律のしらべ)	りちのしらべ	
359	恪気	リキ	りんき		○
360	例	レイ			訓(タメシ)／例(レイ)ならぬ身
361	礼	レイ		○	○
362	恋慕	レンボ	れんぼ		○
363	廬路	ロヂ	○	廬次	路地
364	廬地口	ロヂ(口)			路地口
365	輪	ワ			○
366	脇	ワキ			○
367	鷲	ワシ			○
368	忘れ	ワス(れ)		○	
369	鰯口	ワニ(口)	わに口		○
370	佞言	ワビゴト		佞こと	○
371	葦や	ワヤ(や)		わらや	○(葦屋／わらや)
372	破笠	ワリゴ			○

合計 135 130 328

- 「鞭」(ムチ)に対する『はなひ草』での訓「ふち」については、倭玉篇(慶長15年版)・『合類節用集』易林本節用集に「ブチ・ムチ」両訓の記載がある。
- はなひ草・俳諧御傘は見出し語と本文中に出現する俳諧用語を対象とし、俳諧類彙集からは見出し語と付合語を対象とした。
- 字体は現行の字体を用いたものもある。
- 俳諧御傘の「花車」は異義により不適合とした。
- (へのみ)は不適合とした。
- 「堅栗(ついくわつ)花」は注に「堅栗(ついくわつ)：底本ルビ「ついくわつ」とよめる字体ははなひ大全綱目「ついで花」により改む」とある。
- A/BはAとBの別々に収録されていることを示す。

【資料二】 振り仮名を付す語と条件との関係

	語	振り仮名	句番号	文頭	付合語	字音語	初出	節用集との関係		
								状況	表記	異訓
1	愛敬	アイキヤウ	612	○	○	○		○		
2	挨拶*	アイサツ	76			○	○	○		
3	垢	アカ	527					○		
4	崇め	アガ(め)	517					○		
5	灰汁	アク	253					○		
6	悪行	アクギヤウ	817	○	○	○		○		
7	明六つ	アケ六つ	303	○	○			×		
8	浅からぬ	アサ(からぬ)	82					○		
9	浅沢	アササハ	478					○		
10	蘆	アシ	267	○	○			○		
11	畔	アゼ	483					○		
12	價	アタヒ	847					○		
13	熟田	アツタ	900	○	○			○		
14	敦盛	アツモリ	415					×		
15	粟	アハ	198	○	○			○		
16	蛭	アハビ	721	○				△	鮑・石決	
17	鱈	アブリ	362		○			○		
18	葵上	アフヒノウヘ	689		○			×		
19	泉郎人	アマ人	356	○	○			△	蟹人	
20	天山	アメ山	982					○		
21	鮎	アユ	673	○	○			○		
22	朱み	アユ(み)	652		○			○		
23	荒蕪	アラユモ	267		○			×		
24	諍ふ	アラソ(ふ)	251					○		
25	あら寒	(あら)サム	742					×		
26	荒波	アラ波	736					×		
27	酸酒	アラレ酒	901					×		
28	囃	アリ	97		○			○		
29	歩き	アリ(き)	863					△	行	
30	哀れ*	アハレ(れ-ママ)	165					○		
31	衣桁	イカウ	504	○	○	○		○		
32	箆籬	イカキ	131		○			○		
33	生別れ	イキ(別れ)	855					×		
34	車	イクサ	179					○		
35	生つ	イケ(つ)	839					○		
36	射さず	イ(さず)	943					○		
37	急かせ	イソ(かせ)	487					○		
38	石上	イソノカミ	518	○	○			○		
39	戴け	イタダ(け)	330・875	○(875)	○(875)			○		
40	颯	イタチ	127・788	○(127)	○(2)			○		
41	一撥	一キ	754	○	○	○		○		
42	一合	イチガウ	333	○	○	○		○		
43	一口	一ジツ	840	○	○	○		×		
44	泉	イツミ	474		○			○		
45	宮み	イトナ(み)	567	○				○		
46	電	イナヒカリ	709	○	○			○		
47	守宮	イモリ	732	○				○		
48	鵜舟	ウ舟	258					×		
49	土籠	ウグロモチ	481		○			○		
50	右近	ウコン	466		○	○		●		無訓
51	宇治香	宇治カウ	70			○		×		
52	良角	ウシトラズミ	619		○			×		
53	諍ふ	ウタ(ふ)	227					○		
54	有得	ウトク	574			○		○		
55	有得者	ウトク者	880		○	○		×		
56	温飩	ウドン	235		○	○		○		
57	産湯	ウブユ	245		○			△	初湯	
58	飢し	ウヘ(し)	452					○		
59	瓜種	ウリタネ	739	○	○			×		
60	運	ウン	398			○		○		

61	雲龍	ウンレウ	802			○	○	×		
62	酔*	エイ	155				○	○		
63	詠	エイ	949			○	○	○		
64	穢多	エタ	709		○	○	○	○		
65	篠	エタ	609					○		
66	恵比須講	エビスカウ	903	○		○		×		
67	鯨	エビラ	206	○				○		
68	縁	エン	277	○		○		○		
69	縁付	エンツキ	761・930	○(761)	○(761)			×		
70	猿猴	エンコウ	915	○	○	○		○		
71	燕尾	エンビ	940		○	○		○		
72	老婆	エヒウバ	790					▲		ウバ
73	大なみ	オホ(なみ)	396		○			×		
74	狼	エハカミ	672		○			○		
75	漢	エキ	151		○			○		
76	叟草	エキナ草	701					△		白頭草
77	奥*	エク	256			○		○		
78	臆病風	エクベウ風	48	○	○			×		
79	怠らす	エクタ(らす)	562					○		
80	行ひ*	エコナ(ひ)	444		○		○	○		
81	癡	エコリ	753	○	○			○		
82	小手巻	エダマキ	382	○	○			○		
83	落武者	エチ武者	662		○			×		
84	音	エト	766					○		
85	圃	エトカイ	603		○			○		
86	落す*	エト(す)	868	○	○		○	○		
87	跳る	エド(る)	818					○		
88	寝ふ	エトロ(ふ)	596					○		
89	鬼	エニ	919					○		
90	帯	オビ	757					○		
91	佛	エモカゲ	410					△		面影
92	折烏帽子	エエボシ	948	○	○			×		
93	恩徳	オンドク	346		○			○		
94	餓	ガ	409		○	○		○		
95	甲斐	カイ	470			○		○		
96	蠶	カイコ	207		○			○		
97	海草	カイサウ	605	○	○		○	△		海藻
98	害せぬ	カイ(せぬ)	670			○		▲		コロス
99	かい楯	(かい)ダテ	485					○		
100	海童	カイドウ	163	○	○		○	×		
101	實もの	カヒ(もの)	796					△		
102	薫らし	カヲ(らし)	615		○			○		
103	抱へし	カヽ(へし)	967		○			▲		イダケ
104	驚鹿	カマン	906	○	○			△		案山子
105	簞	カマリ	257					○		
106	香久山	カク山	952		○			△		鯨香久山
107	掻合せ	カキ(合せ)	581					×		
108	垣杭	クキ	739					×		
109	隠す	カク(す)	928					○		
110	隔やみ	カク(やみ)	173	○	○		○	×		
111	菴乱	クハクラン	311	○	○	○		○		
112	隠れなし	カク(れなし)	941	○				△		(無)隠)
113	簞	カゴ	756	○	○			○		
114	かさね疊	(かさね)ダミ	287		○			×		
115	嫁せざる	カ(せざる)	652	○	○		○	○		
116	堅かりし	カタ(かりし)	511	○				○		
117	方違へ	カタダガ(へ)	897		○			×		
118	梶	カヂ	809		○			○		
119	楯枕	カヂ枕	835					×		
120	徒若覚	カチワカタウ	222	○	○			×		
121	化炊	クハテキ	599			○		×		
122	首途*	カトデ	154				○	○		
123	兼	カネ	749・926					○		
124	下坏	カヒ	399		○	○		×		
125	哥舞妓	カブキ	800	○		○		○		

126	蕪	カブラ	261			○			○	
127	壁	カベ	770			○			○	
128	鎌倉	カマクラ	533						○	
129	上*	カミ	444	○	○				○	
130	瓶	カメ	245			○			○	
131	亀が谷	(亀が)ヤツ	331		○				▲	カメガハ
132	宮葺	カヤブキ	283	○					○	
133	粥	カユ	842	○	○				○	
134	荷葉	カヨウ	208				○		▲	ハスノハ
135	辛き	カラ(き)	640						○	
136	雌	カラウス	895	○	○				○	
137	烏瓜	カラスウリ	828	○	○				△	
138	河狩	河ガリ	816						○	
139	元興じ	グハンゴウ(じ)	979			○			○	
140	寒垢離	カンゴリ	340		○	○			×	
141	廻じ	クハン(じ)	51			○			×	
142	感じ入	カン(じ入)	553						×	
143	閑所	カンジョ	302				○	○	○	
144	勧請	クハンジヤウ	900					○	○	
145	勧進帳	勧進チヤウ	520			○			×	
146	勧進坊主	クワンジンバウス	217		○	○			×	
147	黄	キ	467			○			○	
148	綺	キ	27		○	○			○	
149	紀の路	(紀の)ヂ	644			○			○	
150	鬼界が嶋	キカイ(が嶋)	767		○				○	
151	后	キサキ	857						○	
152	牙	キバ	482						○	
153	貴布祿	キブネ	918	○	○	○			○	
154	裾	キヨ	81			○	○		○	
155	藁	ギヨウ	718	○	○				●	無訓
156	業々し	ギヤウ(々し)	353			○			△	凝凝
157	花車*	キヤシヤ	574	○			○	○	○	
158	脚布	キヤフ	812・634						○	
159	狂乱	キヤウ乱	430						○	
160	玉殿	ギョクデン	942		○				×	
161	玉兔	ギョクト	407			○			○	
162	桐	キリ	678	○	○				○	
163	器量	キリヤウ	587	○	○				○	
164	奇麗*	キレイ	509						○	
165	琴	キン	295			○			○	
166	吟	ギン	124						○	
167	權花	キンクハ	839	○	○				▲	ムクゲ・アサカホ
168	銀公	キンコウ	1						×	
169	飲明	キンメイ	387	○			○		○	
170	公宴	クエン	777						×	
171	葦	クキ	922						○	
172	草薙	クサナギ	426	○	○				○	
173	鯨	クジラ	262						○	
174	鯨	クジラ	1008						○	
175	粟玉	クスタマ	690			○			○	
176	桶	クヌキ	485	○					○	
177	具足	グゾク	669		○	○			○	
178	国人	クニウト	846						×	
179	喰くらべ	クヒ(くらべ)	831						×	
180	狗品	グヒン	495				○		×	
181	組いれ	クミ(いれ)	715						○	
182	葦	クラ	725		○				○	
183	栗	クリ	193						○	
184	景*	ケイ	830			○			○	
185	稽古	ケイコ	551						○	
186	化生	ケシヤウ	943						○	
187	解怠	ケダイ	341		○				○	(懈怠)
188	結構	ケツコウ	951						○	
189	臧る	ケ(る)	869						○	

189	元亨	ゲンカウ	596			○	×		
190	喧嘩	ケンカハ	886	○	○	○	○	(喧嘩)	
191	建水	ケンスイ	543	○	○	○	△	碓水	ミスコボシ
192	碁	ゴ	834		○	○	○		
193	御成勢	御イセイ	744			○	×		
194	濃茶	コイチヤ・コヒ	413・555				×		
195	榧	カウ	207			○	○		
196	功	コウ	291		○	○	○		
197	牛王	ゴウウ	137			○	○		
198	五月五日	ゴゴハチゴニチ	224	○	○	○	●		無訓
199	碁盤	碁バン	181		○	○	○		
200	格子	カウシ	419		○	○	○		
201	麴	カウジ	297	○	○	○	○		
202	香水	カウスイ	748		○	○	×		
203	行成	カウゼイ	695	○	○	○	×		
204	高祖	カウソ	521		○	○	○		
205	氷砂糖	氷ザタウ	667				×		
206	漕ぐ	コ(ぐ)	415				○		
207	国阿	コクア	265		○		×		
208	苔	コケ	838			○	○		
209	奥	コシ	10				○		
210	乞食*	コジキ	846	○	○	○	▲		コツジキ
211	鈎簾	コス	411		○		△	簾箔	
212	胡椒	コセウ	234		○	○	○		
213	こせ瘡	(こせ)ガサ	729		○	○	△		
214	牛頭天皇	ゴツ天皇	282	○	○	○	○		
215	小狛	小ネコ	190				×		
216	此土	此ド	386		○		×		
217	木間	コノマ	764				×		
218	五百羅漢	五百ラカン	66		○	○	×		
219	讀て	コヒ(て)	536		○		○		
220	細か	コマ(か)	665				○		
221	籠り人	(籠り)ド	141		○		×		
222	子安	コヤス	470				○		
223	唇	コヨミ	864				○		
224	垢離	コリ	266	○		○	○		
225	氷掻て	コリカキ(て)	527・995	○(527)	○(527)		○		
226	衣*	コロモ	772	○	○		○		
227	粟	サイ	192			○	○		
228	災難	サイナン	424	○		○	○		
229	僱馬楽	サイバラ	294		○		○		
230	宰府	サイフ	855		○	○	○		
231	材木	ザイモク	768		○	○	○		
232	桜*	サクラ	307		○	○	○		
233	掘虫箱	サゲジウバコ	715				×		
234	雑喉	ザコ	639			○	○		
235	大角豆	サハダ	132		○		△	小角豆	
236	棧敷	サジキ	714				○		
237	指身	サシミ	509		○		○		
238	座頭*	ザト	785		○	○	○		
239	砂糖	サタウ	820	○	○	○	○		
240	実朝	サネトモ	777				×		
241	真盛	サネモリ	859	○	○		×		
242	鯖	サバ	845				○		
243	金精	サビ	388				▲		カネノサビ
244	冴選り	サヘカヘ(り)	407				△	寒返	
245	三味線	サミセン	784		○	○	○		
246	三途河	ミツカ	539		○		×		
247	三の間	サン(の)マ	772		○		×		
248	懺悔する	サンゲ(する)	259	○	○	○	○		
249	山莊	サンザウ	970		○	○	○		
250	謠奏	ザンソウ	856	○	○	○	○		
251	塩丁	シホヒ	606	○	○		○		
252	色紙形	シホヒガウ	971			○	×		
253	敷つめ	シキ(つめ)	220				×		

254	檣	シキミ	91					○	
255	獅笛	シハブエ	680		○			×	
256	時守	ジシュ	492		○	○	△	時宗	
257	時守寺	ジシュデラ	324		○		×		
258	侍従	シジウ	615			○	○		
259	時正	ジシヤウ	675			○	○		
260	雀梁	シダ	1002			○	○	○	
261	山墮落	シダラク	611	○		○	○	△	山墮落
262	七賢	シダケン	227	○	○	○	○		
263	濕気*	シツケ	380			○	○	○	
264	品*	シナ	209			○	○	○	
265	渋柿	シンプガキ	934	○		○	○	○	
266	洋連	シメ	117・549・650	○(549・650)	○③			○	(計連)
267	下をなご	シモ(をなご)	447		○			×	
268	麝香	シヤカウ	383・814	○(814)	○(383)	○	○	○	
269	娑婆世界	シヤバセカイ	547					×	
270	執	シウ	711				○	○	
271	主	シウ	966	○	○	○	○	○	
272	拾遺	シウイ	71	○	○	○	○	×	
273	従者	ジウザ	966			○	○	○	
274	珠救	ジユズ	358			○	○	△	数珠
275	念珠	ジユズ	160			○	○	○	
276	精進	セイジン	509				○	○	
277	憔悴	セウスイ	394	○			○	○	
278	商松	シヤウセン	512	○			○	×	
279	正真	セイジン	971	○	○	○	○	×	
280	書院*	シヨエン	510			○	○	○	
281	虱*	シラミ	813			○	○	○	
282	尻	シリ	933	○	○			○	
283	尻馬	シリマ	540					×	
284	白髪	シロカミ	858		○			▲	白ハツ
285	城責	シロセメ	806			○		×	
286	神泉苑	シンゼンエン	281			○	○	○	
287	真鍮	シンチウ	322	○		○	○	○	
288	神農	シノウ	226			○	○	○	
289	新発意	シンホチ	468			○	○	○	
290	腎葉	ジンヤク	938			○	○	×	
291	神輿	シンヨ	197				○	▲	ミコシ
292	新羅	シンラ	27				○	○	
293	人倫	ジンリン	525				○	●	無訓 (部)
294	巢*	ス	110	○	○	○	○	○	
295	推	スイ	687			○	○	○	
296	水晶	スイシヤウ	475	○	○	○	○	○	
297	救百里	ス百里	776				○	×	
298	菅井黨	スカキタウ	594	○	○			×	
299	透とをり	スキ(とをり)	939					×	
300	透間・すき間	スキマ・(すき)マ	601・742		○(742)			○	
301	鯉	シシ	639				○	○	
302	薄*	スハキ	972	○	○			○	
303	煤けたる	ス(けたる)	137	○				×	
304	錫	ス	583					○	
305	涼かぜ	ス(かぜ)	764					×	
306	覗	スワリ	511		○			○	
307	穿て	スベ(て)	933					▲	スボム
308	墨付	スミツキ	808		○			×	
309	諏訪	スハ	741				○	○	
310	情*	セイ	275				○	○	
311	施行	セギヤウ	927	○	○	○	○	○	
312	節	セチ	691			○	○	○	
313	節分*	セチブ	896			○	○	○	
314	雪隠	セツチン	676			○	○	○	
315	震津	セツツ	149			○	○	○	
316	銭湯	センタウ	728			○	○	×	

317	善導大師	ゼンダウ大師	468	○		○	×		
318	洗濯	センタク	14			○	○		
319	蔵	ザウ	452			○	○		
320	増水	ザウスイ	172		○	○	○		
321	雑煮	ザウニ	866	○	○		○		
322	笠履	ザウリ	782		○	○	○		
323	惻隠 ㊦ + ㊧ 編	ソクイン	585	○	○	○	×		
324	卒度	ソツ度	640	○			○		
325	蘇民	ソミン	283	○	○	○	○	蘇民将来	
326	候*	ゾロ	470				○		
327	誰	タ	232				▲		タソ・タレ
328	帝釈天	タイシヤクテン	244	○	○	○	○		
329	醍醐	タイゴ	444		○	○	○		
330	大徳	ダイ徳	492			○	×		
331	手折じ*	テヲラ(じ)	609	○			○		
332	高養齋	高ヤウシ	933				×		
333	鷹師	鷹シヤウ	506				○		
334	薪	タキム	714	○	○		○		
335	卓散*	タクサン	889	○			○		
336	出す	ダ(す)	54・695・828				▲		イダス
337	糺河原	タマス河原	672	○	○		×		
338	尋*	タツネ	616			○	○		
339	蓼*	タデ	640				○		
340	戯れて	タハム(れて)	185・541		○(541)		○		
341	陀佛	タブツ	817			○	×		
342	給	タバ・タブ	252・759	○(252)	○(252)		▲		タマフ
343	珠	タマ	703	○			○		
344	團子	ダンゴ	762		○		○		
345	知死期	チシゴ	719			○	○		
346	調菜	テウサイ	261				○		
347	桃燈	テウチン	288・656		○(288)	○	○		
348	沈香亭	チンカウテイ	872	○	○	○	×		
349	鎮守	チンジュ	517		○		○		
350	唎栗	ツイリ	536	○	○	○	△	唎栗花	
351	杖	ツエ	789	○	○		○		
352	塚穴	ツカアナ	238				△	壙	
353	願む	ツカ(む)	524				○		
354	付そめ	ツキ(そめ)	731				×		
355	著ぬ	ツキ(ぬ)	767				△	著	
356	頭巾	ツキン	603			○	○		
357	盡し	ツク(し)	944				○		
358	漬ざる	ツケ(ざる)	923		○		○		
359	破	ツマミ	941				○		
360	燕	ツバメ	423		○		○		
361	饜	ツブテ	692		○		○		
362	詰る	ツム(る)	956				▲		ナジル
363	摘る	ツメ(る)	171	○			○		
364	釣針	ツリ針	868				△	鈎・鈎鈎	
365	出る*	ヅ(る)・デ(た)	92・717・889				▲		イズル
366	鋺	ツルギ	426		○		○		
367	菘菜*	ツル菜	58	○		○	×		
368	鮓*	テイ	123		○	○	○		
369	亭主*	テイシユ	839	○	○	○	○		
370	出来さん	デカ(さん)	305				×		
371	手筒*	テカヒ	870	○	○		×		
372	手形	テカタ	724		○		△	契	
373	敵	テキ	661	○		○	○		
374	出来て	テキ(て)	744・807				×		
375	鉄砲*	テツハウ	766	○	○	○	○		
376	煎*	テル	763				○		
377	田楽	デンガク	196		○	○	○		
378	典菓	デンヤク	312		○	○	○		
379	道場*	ドウジヤウ	818		○	○	○		
380	盜賊	ドウゾク	214		○	○	○		
381	同朋	ドウボウ	957	○	○	○	○		

382	納涼	タウリヤウ	936				○	○	
383	燈籠*	トウロ	36			○	○	○	
384	科	トカ	861	○				△	遍
385	録る	トガ(る)	602・738			○(738)		○	
386	富樫	トガシ	316	○	○			○	
387	齋	トキ	261			○		○	
388	得度	トクド	635				○	○	
389	どし越	(どし)コシ	356			○		△	歳越
390	柱子美	トシミ	984	○	○	○	○		
391	屠蘇山散	トソビヤクサン	451			○	○	○	
392	問目	トヂメ	557	○				×	
393	閉	トツ	324			○		○	
394	土津川	トツカハ	756			○		○	
395	飛次第	トビ次第	424					×	
396	土鯰簞	ドチヤウカコ	571					×	
397	土鯰	ドチヤウ	130			○		△	鯰・土魚
398	苔	トマ	720					○	
399	鈍漢	ドンカン	53	○	○	○	○	○	
400	蜻蛉	トンハウ	499			○		○	
401	倉欲	トシヨク	527				○	○	
402	菜	ナ	171			○		○	
403	直す	ナヲ(す)	797					○	
404	中飲	ナノミ	542			○		×	
405	仲磨	ナカマロ	461	○	○			×	
406	泣いる	ナギ(いる)	43					×	
407	渚	ナギサ	344			○		○	
408	茄	ナスビ	989	○				△	茄子
409	那智	ナチ	835	○	○	○	○	○	
410	納豆	ナツトウ	715	○			○	○	
411	撫られ	ナデ(られ)	503			○		○	
412	菜畑	ナバタ	380	○	○			×	
413	麩く	ナビ(く)	586・705			○(705)		○	
414	鈿	ナマリ	765			○		○	
415	何歳	ナンザイ	402			○		×	
416	尾公*	ニコウ	612			○	○	○	
417	二条家	ニ条ケ	778			○	○	×	
418	二の町	ニ(の)町	827	○				×	
419	二幅	ニフク	582			○	○	×	
420	新枕	ニキ枕	797			○		○	
421	煮る	ニ(る)	298・493			○(493)		○	
422	入部*	ニウブ	780	○	○		○	○	
423	逃こむ	ニゲ(こむ)	709					×	
424	逃て	ニゲ(て)	886					○	
425	逃かへり	ニゲ(かへり)	919					×	
426	場	ニハ	412					○	
427	岩僧	ニヤク僧	587				○	×	
428	人形	ニンゲウ	184				○	○	
429	藤たて	ヌイ(たて)	450					×	
430	盗み*	ヌスミ(み・ママ)	724			○		○	
431	熱痰	ネツタン	667	○			○	×	
432	寐る	ネ(る)	931・990			○(990)		○	
433	納受	ナウジユ	211	○			○	○	
434	農人	ノウニン	897	○	○		○	○	
435	軒*	ノキ	202			○		○	
436	拭ひ	ノゴ(ひ)	552・809			○(809)		○	
437	野良猫	ノラネコ	507	○				×	
438	乗鞍	ノリクラ	725	○	○			○	
439	乗	ノル	755			○		○	
440	霰	ハ	561			○		○	
441	這まはり	ハビ(まはり)	733					×	
442	墓	ハカ	629					○	
443	博士	ハカセ	660	○			○	○	
444	謀	ハカリゴト	353	○				○	
445	勵す	ハゲマ(す)	534					○	
446	化物	バケ物	710			○		△	妖化物

576	矢橋	ヤバセ	250		○			○		
577	山科	山シナ	675		○			○		
578	仙びと	ヤマ(びと)	181	○				×		
579	止ぬ	ヤメ(ぬ)	528					○		
580	湯	ユ	395・924		○(924)			○		
581	柚味噌	ユ味噌	192		○	○		○		
582	柚べし	ユ(べし)	716	○	○	○		×		
583	維摩経	ユイマ経	74	○	○	○		×		
584	翫	ユキ	358	○	○			▲		イキ
585	讀る	ユヅ(る)	249		○			○		
586	指	ユビ	968					○		
587	与謝	与サ	975			○		○		
588	夕立*	ヨダチ	245	○	○		○	▲		ユフダチ
589	夜這	夜バイ	786					○		
590	讀*	ヨム	553					○		
591	短入	ヨメ	119・796	○(796)	○			△		嫁
592	楽寝	ラクネ	881	○	○			×		
593	落葉	ラクエウ	502			○		○		
594	琉球	リウキウ	783	○	○	○		○		
595	龍腦	リウノウ	591	○	○	○		○		
596	律	リツ	992	○		○		●		無訓 レイ
597	靈*	リョウ	774		○	○		▲		
598	礼	レイ	876		○	○		○		
599	圃*	レイ	902	○		○		○		
600	料	レウ	241			○		×		
601	恪気	リンキ	531・988		○(988)	○		○		
602	恋慕	レンボ	653・750	○(653)	○(750)	○		○		
603	廬路	ロヂ	158	○				△		路次
604	廬地口	ロヂロ	960			○		×		
605	脇*	ワキ	689			○		○		
606	脇ぐるひ	ワキ(ぐるひ)	731					×		
607	分て	ワキ(て)						×		
608	輪珠数	ワジュズ	260	○	○			×		
609	響	ワシ	524		○			○		
610	忘れ	ワス(れ)	757					○		
611	罽口	ワニロ	978		○			○		
612	化言	ワビゴト	945	○				○		
613	臺	ワラ	1001					○		
614	藁や	ワラ(や)	649		○			△		草亭
615	破箒	ワリゴ	630	○	○			○		
	小計							239		○=394
	合計			196	347	248	24			△=41 ▲=25 ●=5 ×=153

7、「分(ワキ)て」は節用集には動詞「分(ワカツ)」とあるので、異義により不一致とした。

- *印を付す語は、振り仮名がある場合とない場合がある語である。
- 振り仮名付き語655語中いずれかの条件に適合する語に○印を記入、○の中の数字は 回数を示す。
『節用集』における収載の有無は
一致するものに○、漢字が異なる語には△、訓が異なる語には▲印、漢字の収載はあるが訓がない語は●、収載がない語に×印を記入する。
- 『紅梅千句』での用字が一部平仮名表記である「かい橋・すき間・まん中・部や」と『節用集』での表記「搔橋・透間・真中・部屋」は一致するものとした。
- 『節用集』との関係では、「クジラ」に「鯨・鯢」、「ミキ」に「三寸・三木」、「ジュズ」に「念珠・珠数」の異なる漢字表記があり、異なり振り仮名付き語数615語に加え618語に対する合計数である。
- 「巢・鬼」は果が巢、鬼は点の省画、「尼」は[ニ尸+エ]「虫」は上にノを増画、140・224の「離」は「隼」を省略した字体などを現行の字体とした。
- 『節用集』との照合には、黒本本・明応五年本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本・合類節用集の7種を使用した。

【資料三】		10俳諧集における振り仮名付き語											
No.	漢字	振り仮名	正章	紅梅	宗因	江八	当流	西鶴	江蛇	江宮	軒端	七百	回数
1	あ	嗚呼	ア、				○						1
2		嗚呼	ア、							○			1
3		藍	アイ		○								1
4		相あひ	アヒ(あひ)								○		1
5		哀猿	アイエン							○			1
6		愛敬	アイキヤウ	○									1
7		挨拶	アイサツ・アヒサツ	○	○						○		3
8		相圖	アイヅ				○						1
9		相住	アヒズミ								○		1
10		遇	アフ							○			1
11		葵	アフヒ						○				1
12		葵上	アフヒノウヘ	○									1
13		和物草	アヘモノ草								○		1
14		白雲	アラ雲								○		1
15		青昆布	アラコブ								○		1
16		青芋	アラソ								○		1
17		青駄	アラダ								○		1
18		青丹	アホニ								○		1
19		障泥	アラリ								○		1
20		垢	アカ		○								2
21		罽伽桶	アカラケ	○									1
22		頬	アカリ	○									1
23		胼	アカリ			○					○		2
24		茜	アカネ								○		1
25		銅	アカハネ								○		1
26		赤肌	赤ハダ										1
27		赤膚山	アカハタ山			○							1
28		崇め	アガ(め)	○									1
29		赤裳	アカニ				○						1
30		上らふ	アガ(らふ)					○					1
31		揚屋	アガリ屋								○		1
32		明(ニ)	アキラカ(ニ)								○		1
33		灰汁	アク	○									1
34		悪行	アクギヤウ	○									1
35		欠	アクビ								○		1
36		朱	アケ						○		○		2
37		揚代	アゲ代							○	○		1
38		明六つ	アケ(六つ)	○									1
39		揚屋	アゲ屋				○						1
40		腮	アゴ								○		1
41		綱子	アゴ								○		1
42		麻	アサ								○		1
43		浅からぬ	アサ(からぬ)	○									1
44		浅沢	アササハ	○									1
45		浅漬	浅ツケ・アサツケ						○		○		2
46		朝朝	朝ボラケ			○	○						2
47		朝政	アサマツリゴト								○		1
48		鯛	アサリ							○			1
49		蘆	アシ	○									1
50		無レ状	アヂキナシ								○		1
51		朝	アシタ								○		1
52		川	アシタ								○		1
53		履	アシダ	○									1

54	明日	アス								○				1
55	飛鳥河	アスカ河								○				1
56	小豆	アヅキ								○				1
57	射塚	アヅチ										○		1
58	東	アヅマ										○		1
59	畔	アゼ							○					1
60	阿蘇	アソ								○				1
61	化	アダ											○2	2
62	價	アタヒ								○				1
63	愛宕講	アタゴ講											○	1
64	化野	アタシノ・アダシ野							○	○				2
65	暖	アタカ										○		1
66	化名	アダナ								○				1
67	化部屋	アダ部屋											○	1
68	化人	アダ人											○	1
69	阿呼	アタン								○				1
70	哆	アツカヒ								○				1
71	熱田	アツタ								○				1
72	厚髯	アツビシ									○			1
73	敦盛	アツモリ								○				1
74	躑	アト										○		1
75	穴	アナ											○	1
76	穴師	アナシ										○		1
77	豈	アニ								○				1
78	兄弟子	兄弟シ								○				1
79	アル摩爾摩々袂	アニマニマハネ											○	1
80	姉女郎	姉チヤウラウ											○	1
81	並誹	アハイ										○		1
82	骨	アバラボネ											○	1
83	鶯	アヒル									○			1
84	檮	アフチ								○				1
85	蛇蜂	アフハチ									○			1
86	簞	アツミ								○				1
87	膏	アブラ										○		1
88	油氣	油ケ										○		1
89	咄方	アハウ											○	1
90	泉郎	アマ								○				1
91	蟹	アマ											○	1
92	天兒	アマガツ										○		1
93	阿麻久佐	アマクサ										○		1
94	尼衣	アマゴロモ								○				1
95	尼店	アマタナ									○			1
96	天の磐楯	アマ(の)イハクス											○	1
97	天彦姫	アマヒコ姫										○		1
98	泉郎人	アマ人								○				1
99	烏梯	アマボン											○	1
100	綱	アミ								○			○	2
101	編笠	アミ笠											○	1
102	飴	アメ								○				1
103	糖	アメ								○				1
104		アメ									○			1
105	天	アメ											○	1
106	天山	アメ山								○				1
107	綾竹	アヤ竹								○				1
108	菖蒲	アヤメ									○		○	2
109	菖蒲草	アヤメ草									○			1
110	歩み	アユ(み)								○				1

1902	醬	ヒシホ								○	1
1903	非情	ヒジキウ						○			1
1904	砒霜石	ヒサウ石					○				1
1905	潜に	ヒソカ(に)								○	1
1906	日剃	ヒソリ								○	1
1907	美樽	ビゾン								○	1
1908	左り	ヒダ(り)	○								1
1909	額	ヒタイ					○			○	2
1910	直甲	ヒタ甲								○	1
1911	浸す	ヒタ(す)					○				1
1912	乞食國	ヒダルイコク								○	1
1913	畢境	ヒツキヤウ					○				1
1914	跛行	ヒツコ								○	1
1915	筆耕	ヒツカウ					○			○	2
1916	蹄	ヒツメ								○	1
1917	早	ヒデリ	○								1
1918	非門梅	ヒテンハイ					○				1
1919	人	ヒト	○								1
1920	他	ヒト					○				1
1921	人足	ヒト足								○	1
1922	人香	ヒトガ	○								1
1923	一救	一スクヒ								○	1
1924	人魂	ヒトタマ					○			○	2
	魂魄	ヒトタマ								○	1
1925	一番	一ツガヒ					○				1
1926	一筆	ヒト筆								○	1
1927	一間	一マ								○	1
1928	人御々供	ヒトミコク	○								1
1929	一群	ヒトムラ					○				1
1930	獨	ヒトリ								○	1
1931	雛	ヒナ								○	1
1932	皮肉	ヒニク					○				1
1933	日々記	ヒトツキ					○				1
1934	雲雀	ヒバリ								○	1
1935	狛々	ヒビ								○	1
1936	響かせて	ヒ(かせて)								○	1
1937	平日	ヒボク								○	1
1938	隙毎に	ヒゴト(に)								○	1
1939	干物	ヒモノ								○	1
1940	百足	ヒヤシ								○	1
1941	白散	ヒヤクサン					○				1
1942	百草	ヒヤクサウ					○				1
1943	百人一首	ヒヤクニンシユ					○				1
1944	冷汁	ヒヤ汁								○	1
1945	瓢箪	ヒョウタン								○	1
1946	比翼	ヒヨク								○	1
1947	平蛛	ヒクモ								○	1
1948	開闢	ヒラケハシマル								○	1
1949	毘蘭樹	ヒランジュ	○								1
1950	干る	ヒ(る)								○	1
1951	昼	ヒル								○	1
1952	昼嵐	ヒル嵐								○	1
1953	昼狐	ヒル狐					○				1
1954	拾ひ	ヒロ(ひ)								○	1
1955	尾篭	ヒロウ					○			○	2
1956	天鵝毛	ビロウド								○	1
	天鵝絨	ビロウド								○	1

1957	天鵝鼻緒	ビロウトバナオ									○	1
1958	麋鹿	ビ鹿									○	1
1959	琵琶	ビハ					○					1
1960	鬢	ビン								○	○	2
1961	頬迦	ビンガ									○	1
1962	便宜	ビンギ					○					1
1963	鬢水	ビンク					○					1
1964	鬢	ビンツラ									○	1
1965	貧乏	ビンボウ								○		2
1966	貧乏神	ビンボウ(神)								○		1
1967	乗拂	ビンボツ					○					1
1968	ふ 葱	フ					○					1
1969	諧	フ					○					1
1970	富貴	フウキ								○		1
1971	風蘭	フウラン									○	1
1972	豊干	フカン								○		1
1973	豊	フキ								○		1
1974	吹出す	吹ダ(す)					○					1
1975	吹嵐	フキ嵐								○		1
1976	無興	フケウ					○					1
1977	和巾	フクサ								○		1
	服巾	フクサ									○	1
	服紗	フクサ								○		1
1978	鯨	フク								○		1
1979	覆面	フクメン					○					1
1980	鼻	フクロウ					○					1
1981	合で	フクン(で)									○	1
1982	不孝	フケウ					○					1
1983	分限	フゲン					○					1
1984	糞	フゴ									○	1
1985	房	フサ									○	1
1986	無作法	フサ法									○	1
1987	檨	フサヒ								○		1
1988	巫山	フサン									○	1
1989	節	フシ					○					1
1990	節穴	フシ穴									○	1
1991	藤川	フヂ川								○		1
1992	蘭	フヂバカマ								○		1
1993	諷誦文	フジユ文					○					1
1994	不祥	フシヤウ								○		1
1995	不如歸	フジヨキ					○					1
1996	普請	フシン								○		1
1997	襖	フスマ								○		2
1998	食雪	フスマ雪					○					1
1999	伏芝	フセシバ									○	1
2000	蓋	フタ					○	○2		○2	○	6
2001	猪	ブタ								○		1
2002	家猪	ブタ									○	1
2003	舞臺	ブタイ									○	1
2004	二齒	フタバ					○					1
2005	二女狂ひ	フタメクル(ひ)					○					1
2006	補陀樂	フダラク					○					1
2007	不断香	フダシカウ					○					1
2008	扶持	フチ・フチ					○			○2		3
2009	舞蝶	フヂ									○	1
2010	不凶	フト					○					1
2011	不動	フトウ					○					1

